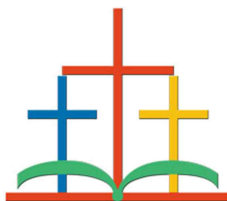
聖書小説

ヨセフの再会

The reunion of Joseph

2023.03.12.修正版

洪性弼(ホン・ソンピル)

基隣宣教会

伊香保中央教会牧師(群馬県)

kirinmission@gmail.com

http://www.kirinmission.com

http://www.kirin.love

+81-70-1072-0109

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

【おしらせ】

1994年から現在まで私どもの教会は群馬県にて、ただ恵みによって、ただ信仰によって、ただ主によって、ただ御言葉によって、ただ神に栄光をささげるために、万民に福音を伝えるという使命に従う覚悟で今日まで主と共に歩んでまいりました。

現在、私どもの教会は財政的に自立しておらず、皆さまのお祈りと宣教支援によって支えられております。

このたび、聖書小説「ヨセフの再会」の執筆を終え、これを出版しようと進めてまいりましたが、ただいま、宣教資金の不足により、皆さまにすべての原稿を公開することと致しました。

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

皆さまのご奉仕が日本宣教の礎となります。

皆さまのご奉仕は日本の福音化と神の御国の貴重な試金石となるでしょう。ご支援をお待ちしております。

神様の驚くべき祝福と溢れんばかりの恵みが共におられますよう、主の御名においてお祈りいたします。

伊香保中央教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
群馬銀行:店番号 190　口座番号 1992256
ホンソンピル
韓国:KB 国民銀行 079-21-0736-251 홍성필

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

【聖書小説「ヨセフの再会」作品紹介】

The reunion of Joseph

1. タイトル:「ヨセフの再会」

2. サブタイトル:エジプトの支配者に上り詰めたヤコブの息子「ヨセフ」が兄弟たちと宿命の再会を果たすとき、その裏では何が起こっていたのか。うごめく思惑と隠れた真実とは。

3. ジャンル:小説・戯曲

4. 企画趣旨:兄たちによって奴隷としてエジプトに売られた「ヨセフ」が彼の兄弟たちと再会を果たす

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

というのは旧約聖書の創世記に登場する有名な話ですが、牧師や神学者による既存の解釈を適用すると不自然な点が多く見受けられました。これは登場人物の心理を誤解したためです。よって、彼らの心の動きをさまざまな側面から本質に近づこうと試みました。内容は本来の聖書の内容を恣意的に捻じ曲げようとするのではなく、より真実に近づかせるための本となるはずです。

すべては、4 つの疑問から始まりました。

— 4 つの疑問

ⓐ なぜヨセフは兄たちを回し者(スパイ)と決めつけたのか。

ⓑ なぜヨセフはシメオンを人質として選んだのか。

ⓒ なぜヨセフはベニヤミンの荷の中に銀の杯を入れさせたのか。

ⓓ なぜヨセフは三度泣いたのか。

5. 読者ターゲット:クリスチャンだけでなく一般小説・戯曲に興味のある読者全般。

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

6. 主な構成案:第一章から第六章までの構成。各章は独白・傍白形式と対話形式とに分けられます。

7. 類書と差別化

新しい解釈・聖書に忠実な解釈

既存の解釈によると、エジプトの支配者となったヨセフが兄弟たちの再会を果たすとき、様々なことをしたのは、兄たちを許すべきかどうかを試すためだという解釈が一般的です。しかし、このような解釈をする場合、話の流れがとても不自然になってしまいます。これについて本書は新しい解釈、より真実に近いであろう解釈を試みました。本書を通じたくさんの方が一度でも多く聖書を開く機会が増えればと思います。

聖書小説

ヨセフの再会

The reunion of Joseph

洪性弼(ホン・ソンピル)

基隣宣教会

伊香保中央教会牧師(群馬県)

kirinmission@gmail.com

http://www.kirinmission.com

http://www.kirin.love

+81-70-1072-0109

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

ヨセフの再会

目次

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

登場人物の紹介

★印:「ヨセフの再会」登場人物

アブラハム　:　信仰の祖と言われ、神の導きによりカナンの地へと向かった。

サラ:アブラハムの妻

ハガル:サラの侍女

イシュマエル:アブラハムとハガルの息子

イサク:アブラハムとサラの息子

リベカ:ラバンの妹・イサクの妻

ラバン:リベカの兄

★ヤコブ:イサクとリベカの息子

レア:ラバンの長女・ヤコブの妻

ラケル:ラバンの侍女・ヤコブの妻

シルバ:レアの侍女

ビルハ:ラケルの侍女

ヤコブとレアの子:

★ルベン①、★シメオン②、★レビ③、

★ユダ④、★イッサカル⑨、★ゼブルン⑩、

ディナ(娘)⑬

ヤコブとラケルの子:★ヨセフ⑪、★ベニヤミン⑫

ヤコブとビルハの子:★ダン⑤、★ナフタリ⑥

ヤコブとシルバの子:★ガド⑦、★アシェル⑧

※数字は序列

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

★ツァフェナテ・パネアハ（ヨセフと同一人物）：
エジプトの宰相

★アセナテ：ヨセフの妻

★通訳

★警備兵1・2・3

★宰相の使者

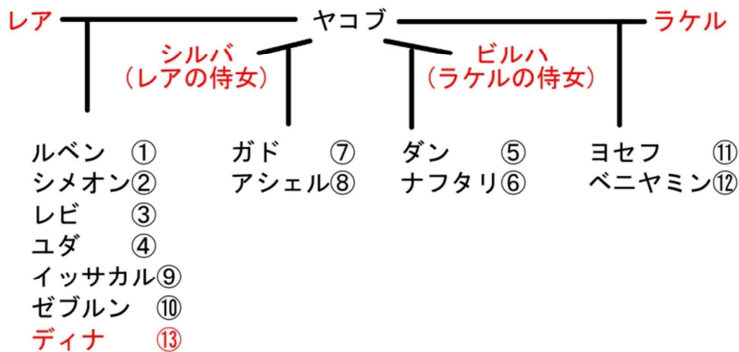
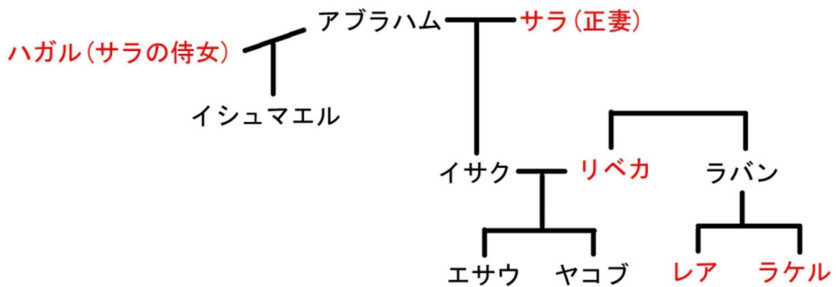
★兵士1・2・3

（通訳と宰相の使者の二役可能）

（家臣1・2・3と兵士1・2・3の二役可能）

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

アブラハム・イサク・ヤコブの系図

（赤色は女性）

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

第一章　決断

－ 再会を控えたヨセフの決断

登場人物 ：

ツァフェナテ・パネアハ（ヨセフ）：エジプトの宰相

場所 ：

エジプト宰相執務室

会わぬ。会わぬぞ。会わぬと言っておるではないか。なぜ、私が彼らに会わなければならんのだ。聞けよ、アセナテ。そなたも私の心を察してはくれぬのか。私が彼らに会ったところで何を話せというのだ。一握りのはした金を受け取って食料でも分けてやれとでもいうのか。私にはできぬ。私が彼らにどれほどの苦しみを受けたのか、そなたは分からんのか。

我が故郷カナン。私が生まれ、父と母との愛を受けながら育った愛しい我が故郷。私には母が四人おられた。レアとその侍女シルバ、ラケルとその侍女ビルハだ。系図の上ではどなたも私の母親であり、彼女らが産んだ子らは皆が私と血を分けた兄弟だといえよう。だが、私を産んで下さった実の母はラケルのみ。とても美しく知恵のあるお方だった。これは私

の母だからということではない。今まで何度も言ってきたではないか。だからこそ、私の母は父からの愛を独り占めできたのだ。いくらレアが私の母の姉であっても、誰も私の母に注がれた父の愛を邪魔することはできなかった。父ヤコブと母ラケルとの愛、この世で最も神聖で美しい愛だった。天上の天使であったとしても、どうしてその愛を妨げることができたろうか。

しかしレア、シルバ、ましてやビルハが十人もの子を産む間、哀れなことに私の母は子宝に恵まれなかった。このようなことをもって天が平等であると誰がが言うなら、私はその口に呪いを浴びせたかっただろう。平等？そのような言葉はそう簡単に口にするものではない。自分の侍女までが息子を得られたのに、

どれほど父の愛を独り占めできたとしても、子を授かることができないとしたら何の意味があろうか。

　そんなある日、ついに母は私を身ごもり、お産みになられた。どれほどよろこばれたであろうか。父には多くの子供たちがいたにもかかわらず、私はすべての愛を一身に受けて育てられたのだ。全世界が私のものだった。朝、目覚めてから夜、眠りにつくまで、私が食べるものから着るもの全てが父の愛と母の喜びで満たされていたのだ。

　十年後、母は再び身ごもった。母親が子を宿したと知った時から父はとても喜んでおられた。恐れ多くも陛下が授けてくださった私の名は「ツァフェナテ・パネアハ」であるが、私の母が付けてくださった名はヨセフだった。ヨセフ、ヨセフ…。これは「加える」とい

う意味を持つ名前だ。神がもう一人息子を加えてほしいという意味が込められているのだ。

　母は私をお産みになられても満足はしなかった。それもそのはず、レアは、息子を七人も授かり、シルバとビルハどちらも子供二人いるというのに、ラケルが私一人で満足するはずがない。そして十年が経ってから、やっと二人目の子を授かることができたのだ。私の名前に込められた祈りが遂に成就される時が来たのだ。父ももはや気力の衰えを感じていただけに、これが最後のチャンスになるかもしれないということはご存じだっただろう。

　だが、何ということだ！シェケムからヘブロンへ向かう途上で出産される時、母は、あまりにも早すぎる死を迎えてしまわれたのだ。ああ！あれほど待ち望

まれたわが弟を一度抱きしめることもできずに目を閉じてしまわれたその心情を、その悔しさを誰が知り得ようか！

　母がこの世を去った後、母へと注がれていた父の愛は私と、その時生まれた私の弟ベニヤミンに向けられた。父が私と私の弟ベニヤミンも見つめる視線と言葉の先にはいつも母がおられた。私はそのような父に報いようと最善を尽くした。いや、それはただ父の愛に応えたい、というようなきれいごとではない。幼い私にとっては親のような、いや、親よりも大きな権威として君臨する兄たちの間(はざま)で生き残るための私の生存戦略だったのだ。レアから生まれた兄弟たち、シルパから生まれたガドとアシェル、ビルハから生まれたダンとナフタリ、彼らはどこへ行こうとも何があっ

ても、彼らの母によって守られ、兄弟たちもお互いを思いやり支えあうのだが、私には守ってくれる母がおらぬではないか。私を守ってくれるのは私自身のみ。それだけではない。私は私だけではなく、幼いベニヤミンまでも守ってやらねばならなかったのだ。このような状況で、私の拠り所は父以外に誰がいようか。私は父から気に入られるためであれば何でもやった。恥も外聞もなかった。挙句の果てには、兄たちの過ちを父に告げ口することまでいとわなかった。幼心ではあったが、私は生き残るために毎日毎日必死だったのだ。

　そう、それは母が生きていた時とは正反対の、いわば朝、目覚めた瞬間から夜、目を閉じるまで、私は生きるためにもがき、ベニヤミンを守るために手段

と方法を選ばなかった。父の愛を渇望し懇願したのだ。憎まれないためにも必死になるしかなかったのだ。

　ある日、私は夢を見た。私が兄たちと一緒に畑で束を束ねていたところ、私の束がまっすぐ立ち上がり、兄たちの束が私の束を囲むとひれ伏して拝むではないか。そして、またある日、夢の中で空に浮かんでいる太陽と月と十一の星が私にひれ伏したのだ。その夢があまりにも不思議だったので、私はうっかり父と兄たちに話してしまった。軽はずみな行為だったということに当時は気がつかなかった。

　愛する私のアセナトよ。このような私を、あなたは傲慢だったと、愚かだったと嘲笑うかね？ありがとう。私はあなたのそのような慈悲深い心に慰めを受ける。

頼るところも人もない異郷の地で、陛下の大きな恵みとあなたの美しい心がどれほど慰めになるのか知れない。

しかし、私の血を分けたの兄たちに、そのような思いやりはひとかけらも持ち合わせていなかったようだ。私が十七になる年、その日も私は父と一緒にいたのだが、兄たちの様子を見てくるようにと言いつけられたので家を出ることになった。

遠くに彼らが見え始めたころ、私を見つけた兄たちの声が聞こえてきた。その内容とは、何かを穴の中に放り投げるというものだった。それが、まさか私のことだったとは知る由もなかった。近づくなり、それまで着ていた綾織の着物を急に剥ぎ取るやいやな、この私を穴の中に放り込むではないか。おお、その

綾織の着物は父の愛そのものだったのだ。愛のあかしだった。私はすぐに悟ったよ。その着物が剥ぎ取られる瞬間、私の父の愛が去ってしまうことを感じることができたのだ。もう、父が私を守ってくれることはできなくなったと悟ったのだよ。

　私がすべてをあきらめたとき、ユダの声が聞こえてきた。私を生かしておく代わりに奴隷商人に売ってしまおうというではないか。私はこれから何がどうなってしまうのか全く見当がつかなかった。穴から引っ張り上げられると、何かを言い出す間もなく、私は力づくでラクダに乗せられ、どこかへと連れて行かれてしまったのだ。

　そして、私は誰かの手に渡ることになった。そこは皇帝陛下の侍従長ポティファル将軍の邸だった。私

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

は恐れおののいたよ。エジプト語も知らなければ、一体何をどうしたらいいのか全く分からなったからね。しかし、ポティファル将軍は情け深いお方だった。十七歳の幼くみすぼらしい奴隷にもかかわらず、私を粗末に扱われなかった。いや、粗末どころか、少し経つと邸の中のすべてのことを私に任せて下さったのだ。これがどれほどありがたいことだったか。その恩に報いるためにも私は懸命に働いたよ。広い邸を整備し、家族の方々に仕えるために食糧倉庫の管理と清掃、料理に洗濯、資金管理に至るまですべてのことを私に委ねて下さった。夜明けに目を覚まし、夜眠りにつくまで必死に働いた。今思えば、よくもそれほど熱心に働けたと思えるほどだよ。奴隷にすぎない私にとっては夢も希望もあるはずがない。

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

ただ、私は父から聞かされた神だけを考えた。

だからといって、誤解しないでくれ。私が生まれつき素直だとか信心深かったからではない。異国の地に連れてこられた私に、母をすでに亡くし父の生死すら知らない私に、血を分けた兄たちに裏切られ奴隷として売られてきた私に、何を頼ることができたであろうか。

ヤコブの神、私を愛した父があれほどまでに信じて頼った神。私が神を信じて頼った理由を誰かが尋ねるとしたら、それは、私が父を信じて頼ったからだと言えよう。私をあれほどまで大切にしてくださった父が信じる神が私を見捨てるはずがないではないか。もちろん何の根拠もない話だが、私は私の父であるヤコブの神なくしては一日たりとも耐え忍ぶこと

はできなかった。

　喜び？幸福？平安？そう。そのようなことを望む暇もなかった。ただ、食べること、雨風をしのげることさえできればそれだけで十分だった。将軍が施して下さる恵みに感謝しながら一日一日真面目に生きて生きていくことだけが自分の人生の全てだった。そして、それがまさしく喜びと幸福と平安を得られる道だと思ったのだ。だが、あれほど理不尽な事件に巻き込まれてしまうことになろうとは。

　他でもない、ポティファル夫人のことよ。口にすることすら汚らわしい。考えてみてくれ。半人前の私を信じ、喜びと幸福と平安を与えて下さった慈悲深い将軍を失望させるようなことなど、私にできるはずないではないか。ポティファル夫人が私を寝室に招き

入れようとしたとき、それを振り切って飛び出してきたのだが、私を憎んだ夫人は結局、ありもしない嘘によって将軍を怒らせ、私は監獄に入れられる羽目になってしまったのだ。私が得られた平和はわずか10年にもならなかった。酷すぎる。あまりにも酷すぎる。私が何の過ちを犯したというのだ。私が主人の財産を一銭たりとも偽ったことがあったか。主人の財産に欲を出したことがあったとでもいうのだろうか。あるいは誰かに被害を与えたことがあったか。一体何の罪を犯したというのだ。私は私の父、ヤコブの神の名に懸けて堂々と言えるぞ。そのようなことは決してない。だが、それが何になろうか。その時まで充実なしもべとして少しずつ積み上げてきた信用やら信頼やらが一度に崩れ去ってしまったのだ。私は大き

なことを望んではいなかった。そんな私を牢屋に投げ込むのがヤコブの神なのか。我が愛する父はそのようなわけのわからない神を信じたというのか。私は混乱した。しかし、その混乱を鎮める間もなかったよ。私は人間ではなく粗大ごみのような無残な姿で牢屋の中へと放り込まれてしまったのだ。笑わせるじゃないか。将軍の邸に住みながら、それも奴隷として住みながら、私は本当に小さいことだけを望んだ。生きながらえることだけを望みながら用心深く歩いてきたつもりだった。それなのに神というお方はそれまでも許さないというのか。その時はまるでみすぼらしい私が持っていたひとかけらのパンまでも奪われたような心境だった。何年もの間、自分の力で成し遂げてきたことが、小さな報いはおろかすべてが

水の泡と化してしまう瞬間だったと言えよう。一寸先も見えぬ。血を吐くような努力も無駄になってしまったのに、これ以上何ができようか。

何日も私は牢屋の壁をただ無心に見つめながら死人のような日々を過ごした。飲まず食わずの生活。ただ命令されるままに働きながら、誰かが殴れば何も考えずただ殴られるだけだった。人生において何の意味も見出すことができなかったのだ。一体何の意欲があったろうか。私は私と弟を守るために父の愛を渇望したが兄たちの嫉妬と憎しみにより奴隷として売り飛ばされてしまったのだよ。もう、明々白々ではないか。私の父が信じた神がいたのなら、それはまさしく私の不幸を望む方であり、私の道を妨げる存在であり、私の努力を踏みにじる残酷な神だと

いうことを確信したのだ。私は母も失い、父も失い、兄たちも失い、最後の望みである父の信じた神までも失ったのだ。そんな私が生きていても何の意味もないではないか。私は死だけを望むようになっていたようだ。

しかし、ふとある日二つのことが思い浮かんだのだよ。まず一つ目は私が見た夢だ。兄たちの束が私の束に向かってお辞儀をし、太陽と月と十一の星たちが私にお辞儀をしたあの夢だ。いくら考えても単なる夢ではない。必ずや成就する夢、だが未だ成就されていない夢だと思えるようになったのだ。神が私を憎むゆえ、このような苦しみを与えられるとはとても思えない。考えてもみなさい。もし私を憎むのなら、ちり芥よりも、虫けらよりもみすぼらしい私を殺すこと

など容易いではないか。私を殺してしまおうとしたのならポティファル将軍の手にかかって、いや、エジプトに連れてこられる前に、あの残虐極まりない兄たちの手によって、とうの昔に殺されてしまっていたはずだ。にもかかわらず、何度も危機に瀕してきたにもかかわらず生きてるのを見ると、これもやはり神の導きかもしれないと、この私を通じて何かを成し遂げようとされているのかもしれないと思えるようになってきたのだ。一度そのように気持ちを切り替えてみると不思議なもので、見える風景も、私に対する世間の待遇も少しずつ変わっていくような気がしたよ。ポティファル将軍がもし本当に私のことを憎んでいたのなら、私のような若い奴隷を殺めることなど、赤子の手をひねるようなものではないかね。しかし、彼は私を

手にかけるようなことはなかった。それどころか私を大切にしてくれているようにも思えてきたのだよ。これこそ不思議としか言いようがない。

　そして二つ目は、私には逢いたい人物がいたということを悟ったのだ。それは誰なのか、もう知っているね。いかにも、ベニヤミンだ。おお、ベニヤミン！今の今まで一日たりとも忘れることのできなかった愛する弟ベニヤミン！私を殺そうとまで憎んでいた彼らがベニヤミンにはどういう仕打ちをしただろうか。おお、考えただけでも胸が苦しくなる！生きてはいるのか、あるいは彼らの凶暴な彼らによって裂けられてしまったのか！この世で最も愛した母の息子。この世で最も濃い血と肉でつながれた弟、この世で…この世で…ああ、ベニヤミン！お前を守ってやり

たかった。私の生きがいはお前を守ってやることだったのに、この愚かで罪深い兄とやらは、あまりにも遠くかけ離れ、顔も合わせることができぬとは。ベニヤミン！私を許しておくれ！生きてはいるのか！どれほどつらい日々を送っていることだろう！ベニヤミン！ベニヤミン！

　私はもう一度望みをかけることにした。何としてでもこの世でベニヤミンに一目逢いたかった。たとえ過去に見た夢が嘘だったとしてもかまわん。もう一度だけベニヤミンに逢うことができるなら、ベニヤミンの手を握ることができるなら、ベニヤミンをこの胸でしっかりと抱きしめることができるなら、この監獄の生活も耐え忍ぶことができるような気がしたよ。だが、このままではいかん。何はともあれ監獄から出なければなら

なかった。だが、それがいつになったら叶うのか知る由もあるまい。

　振り返ってみると、アブラハムの神、イサクの神、そして我が父であるヤコブの神が、いつ何時(なんどき)も私と共におられたように思えてならぬ。いや、そうとしか考えられないではないか。この私が卑しい奴隷として連れてこられた時も、すべてが万事うまくいくように導いてくださった。ましてや監獄に入れられていた時でさえ、監獄の長が私にすべての管理を任せてくれたおかげで、ほかの囚人たちより多くの自由を与えられることができた。それだけではない。私がいた監獄は特別だったんだよ。ポティファル将軍の邸の中にあるその監獄は主に罪の疑いのある官僚たちが入れられるところだったので、彼らから言語と

文化などに関しては、むしろポティファル将軍の邸にいたころよりも幅広い知識を得ることができたのだ。

いつの日だったか、私が言わなかったかな。ある日、とても興味深いことがあってな。私のいる監獄に二人の官僚が収監されてきたのだが、彼らが連れてこられた時にポティファル将軍は彼らの面倒を見るようにと私に直接命じられたのだ。彼らのうち一人は陛下の献酌官、もう一人は陛下の料理官であった。そなたなら知っておる通り、彼らは陛下に間近で仕えておられる方たちだ。普通だったらとてもお目にかかれる方たちではない。しかし、その時は囚人という身分であり、そこは監獄の長から信頼を得ているおかげで、すべての管理を任されていたので、私はすぐに彼らとお近づきになることができたのだ。

だとしても私は奴隷として連れてこられた挙句に捕らわれの身となった者だが、彼らは国の最高幹部だったにもかかわらず牢に入れられたのだから、落ち込みも激しかっただろう。後で知ったのだが、罪状が反逆罪だそうではないか。それこそ風前の灯火だ。いつ処刑されてもおかしくはない、というのはご自分たちもよく知っておられたことだろう。私が面倒を見て差し上げてはいたのだが、なんとも哀れなお姿であった。いつも無言で暗い表情だった。いつ殺されるかもしれない日々を送っていたのだ。生きた心地すらしなかったかもしれんから、当然といえば当然だったろう。希望のない時間だったのかも知れぬ。ま、希望がないといえば、当時の私も似たようなものだったがな。

そんなある日の朝、私がその方たちの房に入ると、悩まし気な面持ちで顔色が甚だ悪いではないか。私は首をかしげた。もし万一、刑の執行の知らせが入ったのなら、ここを任されている私が先に知っているはずだが、そのような話は聞いていなかったにもかかわらず、彼らがそんな様子だったから妙でった。そこで、その方たちに尋ねてみたところ、昨晩、二人で同じような夢を見たそうなのだが、どんな夢なのか皆目見当がつかないとのことだ。しかし、私には確信があった。幼い頃に見た夢が神からのものだったとすれば、この方たちが見た夢もやはり神からのものに違いないという確信があったのだ。だから私はその方たちに、夢の解釈は神がしてくださいます、と申し上げた。

すると、まず献酌官が言うには、目の前にブドウの木が見えたのだが、その木には三つのつるがあり、そのつるから芽が出て花が咲き、実が熟していたそうだ。その時ふと自分の手も見ると陛下の杯があったので、その実を摘んで杯の中に絞り入れ陛下に捧げるという夢だったそうだ。

　私がその夢を聞くと、これは間違いなく神が下さったものだという気がしたよ。私は夢の解き明かしについて習ったこともなければ読んだこともないが、この夢の話を聞いた瞬間、すべてを悟ることができたのだ。

　献酌官の夢は間違いなく回復を意味するものだった。自由を回復する夢だったのた。正直言って私は迷ったよ。もし、私の解き明かし通りにならず、悪

い方に転んだら一大事だ。

しかし、ためらうわけにはいかない。献酌官の心配そうな顔、私を信頼して夢を語ってくれたその信頼を裏切るわけにはいかない。そして何よりも、私の心に沸き起こる確固たる自信が口を開かせたのだ。

献酌官が見た三つのつるは三日を示すものであり、あなたは三日のうちに汚名が晴れ、元の地位を取り戻すでしょう、と申し上げた。

すると不安に満ちていた献酌官の顔が緩み始めたようだったね。それはそうだろう。命が危機に瀕していると思っていたのに、私の確信に満ちた言葉は大きな励みになったようだった。

私は彼にお願いをすることも忘れなかった。

「申し上げましたように、三日の内にここから釈放

されるでしょう。そして、すべての役職が回復して権威と栄華も取り戻されます。ただ、お願いがございます。その時は私のことを思い出してください。このヨセフは、ただヘブライの地から連れて来られた奴隷でございます。ポティファル将軍に仕えていた際にも獄につながるようなことをするなど断じてありません。ここからお出になられた暁には、どうか私のことを陛下にお伝え下さり、何卒、取り計らっていただきとう存じます。」

　私がどれほど懇願したか想像がつくかね。それこそ渾身の力を出し尽くしてお願いしたよ。何から何まで本当ではないか。私が兄から憎まれるようなことをしたかね。命を奪われなければならぬ悪を働いたかね。奴隷として売られなければならぬことなど、何

一つしたことはないではないか。ポティファル将軍家に仕えるときも同様だ。私は夫人に対して卑しい心を抱いたことなど全くない。これは、誰よりも神がご承知のはずだ。この世界のすべての者に目を留められる主は、少なくともこの胸の内を知っておられるであろう。

振り返ってみると、私の人生は濡れ衣だらけだ。不幸な人生だ。自分の思い通りになったことなど一度もなかった。誰が私のように奴隷として売られただろう。それも血を分けた兄弟によってだ。

それでもまだ飽き足りず、また濡れ衣を着せられて牢に閉じ込められる始末。情けないではないか。私の人生の中で幸せは十七歳まで父の愛を受けたことで終わったのかと思ったよ。

だが、このヨセフ。そういうわけにはいかぬでないか。そこで人生を終えるわけにはいかなかったのだ。

私は献酌官だけを頼りにしていた。希望を抱いたのだ。どうか私を覚えてくれ、どうか私を忘れないでくれ、どうか私を出してくれ、どうか、私を…。どうか、私のことを…。

そんな私の切実な思いを知ってか知らずか、献酌官は私の夢の解き明かしが「吉」だと知ってからは、分かった、分かったと笑ってばかりいた。何とももどかしいかぎりだった。

すると、これを隣で聞いていた料理官も自分の夢を聞いてくれという。おそらく献酌官の解き明かしがよかったのでご自分も気をよくしたのであろう。しかし、彼の夢は献酌官のものと比べてみると、いかにも妙

である。いや、妙だという言い方は正しくない。身の毛もよようような怪しいものが感じられた。話によるとその夢の中には同じく「三」が登場するのだ。自分の頭の上には三つのかごが積み上げられていたのだが、一番上のかごには陛下のために作られた様々な食べ物が入っており、鳥たちが飛んできて自分の頭のかごの中からそれらを食べてしまったというのだ。私はこれを聞いてめまいを起こしそうになったよ。何と不吉な夢だろうか。

　私は絶望した。もしも、献酌官が私を助けてくれなければ、料理官に望みを託そうと思ったはかない希望は虚しく消えてしまったのだ。献酌官の夢が回復を意味するのであったのなら、料理官の夢は破滅だったからだよ。全身、身震いがしたものだ。目の前の

人間に死と絶望と破滅を伝えなければならなかったからね。

　これをそのまま言うべきかどうか迷ったがものだが、それを考えるいとまもなく、口からはすでに解き明かしが出てきてしまっていたのだ。

　あなたの頭の上にあった三つのかごは、やはり三日を示しています。今から三日のうちにあなたは木に吊るされ、鳥たちはあなたの肉をついばむでしょう。

　ああ、なんと恐ろしい。身の毛もよだつような話ではないか。

　私はこの言葉を終えて慌てたよ。私の力では、彼の救ってあげることも、せめて三日という苦痛の日々を短くしてあげることもなかったからね。私はすぐさま後悔したが、時すでに遅し。あっけにとられている彼

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

を見ると、どうすることもできず、逃げるようにその場を立ち去ってしまったさ。「吉」を期待して開けていた口が歪みはじめ、絶望の底へと落ちていく暗い目を見たのが、その日の料理官の最後の姿だった。

　そして、三日が過ぎた。牢に閉じ込められ以来、いや、エジプト連れて来られて以来、その三日間は特別な日だった。そう、〈待つ〉ということを私が初めて味わった日だったのだ。おそらく生まれて初めて〈待つ〉ということを経験した日だったのかも知れぬな。

　物心ついてからというもの、私自身の人生はそこになかった。奴隷という身分である私に何の力があったろうか。何の決定権も、何の選択肢もなかった。

　自由を覚える前に服従を覚えた。笑いを覚える前に、主人の顔色を伺うことを覚えさせられた。口を開

くことを覚える前に、口を閉じ耳を開くことを覚えさせられた。私の主張をするより先に退くことから覚えさせられたのだ。すべては強制で始まり強制で終わった。私自身を考えるより先にご主人様のために動かなければならなかったからな。

そんな私に「待つ」などというのは贅沢だったのだ。明日があるのかどうかも怪しいのに、どうして明日を夢見ることができようか。

「待つ」というのは、未来を象徴するもの。

「待つ」というのは、希望を象徴するもの。

「待つ」というのは、自由を象徴するもの。

しかし、未来も希望も自由もなかった私には、待つことが許されない人生、待つことが忘れられた人生だったのだ。それが、献酌官の夢を聞いてからの

三日間は、「待つ」ことへの快感を味わることができた貴重な時間だった。

　待った理由はというと、私の夢の解き明かしがどのように成就されるのかを確認したかったからだ。子供の頃に見た夢は、まだ達成されていない。どのように達成されるのか、どの時に成就されるかどうかも分からない。その時は正直のところ、神から与えられた夢なのか、でなければただ露や霧のように過ぎ去ってしまう、はかない蜃気楼かもしれないと思ったものだ。

　だが、今度は違う。三日だ。献酌官の夢も料理官の夢も、すべて「三」を指していた。その夢の解き明かしについては、もちろん確信は持っていたが、実際にどうなるのかを見届けたかったのだよ。

これは単純な好奇心ではない。今回の夢が解き明かし通りに成就されれば、私はもう一つ「待つ」ということを得ることができるだろう。献酌官の夢の解き明かしが本当に神から与えられたものならば、遠い昔、ヘブライの地で父の愛を受けていた時に見た夢も神から与えられた夢だと信じることができる。

　ああ、また、待つことができる。そう、待つことができる。待つことができるのだ。未来を、希望を、そして自由を得る道が開かれるのだ。

　私が見届けたかった、もう一つの理由は献酌官と交わした約束があっただからだ。私の解き明かし通りにあの方たちの運命が決まるのであれば、「持つ」というものは現実のものとなる。この目で見て、この手で触れるような現実のものとなるではないか。料

理官には申し訳ないが、私は彼がどうなろうと関心がなかった。

　もちろん、その方が許されれば、でたらめな解き明かしをしたと不快がられるだろうが、私はすでに牢に入れられている身である。これ以上どうすることもできまい。

　問題は、献酌官だ。その方は、私を見捨てないと信じていた。

　私の解き明かし通り三日後に、ここから出ることができるなら、そして以前のように陛下のそばで仕えることができるなら、その方は間違いなくここから出して下さるに違いない。

　私はそう信じていた。そのような気持ちで、三日を待っていたのだ。怖くもあり、期待に胸を膨らませた

りもしたものだ。

　そして、ついにその日が来た。いつも通りの朝だった。監獄の長から信任を得ていた私は、ある程度自由が許されている代わりに、掃除や食事、そして諸事務などすべて行う必要があった。あの日以来、二人の方とは顔をなるべく合わさないようにしていた。

　収監されているた方たちは、ほとんどが高級官僚だ。たとえ今は牢に閉じ込められているが、無罪となれば、いつでも高い役職に回復する希望を持っていた。

　そう。彼らは希望を持っていた。たとえ私が釈放されても一介の奴隷にすぎない。いわば釈放された奴隷に過ぎない身分だが、その方たちは違う。無罪となればすべてをに取り戻すことができるのだ。彼ら

は、口癖のように言っていた。私がここを出られれば、出さえすれば…。

　しかし、私は知っていた。彼らは、必ずいつかはここを出ることになる。ただし、出て行った後に自由を得られるという保証はない。外に出て悲惨な最期を遂げる者も数え切れない程いたのだ。

　その日の夕方、陛下が宴の席を設けられたという知らせが入ってきた。何も起こらぬまま、一日が過ぎてゆくかも知れないという思いが脳裏をかすめた矢先、牢の外が騒がしくなりはじめた。監獄の長が急遽、呼び出されたと思ったら、足早に戻ってきてから私に言ったのだ。陛下が献酌官と料理官を連れてくるようにとの命令が下ったとな。

　ついに時が来たのだ。私は慌てて二人の閉じ込

められている部屋に向かった。牢の扉を開け、その前に立って静かに言った。

「陛下がお二人をお呼びです。」

この言葉を聞いたときに見せた二人の表情は今でも忘れられないよ。期待に満ちた献酌官と恐怖に身震いをする料理官が私を見ていた。私がその方たちに放った言葉は、一人には釈放の知らせであり、もう一人には死刑執行の宣告のようなものだったからな。

二人を連れて出て門の前に待機していた兵士に引き渡してから、私は去っていく彼らがいなくなるまで見送っていた。

結果は、痛快なほど私の解き明かし通りだったよ。聞くところによると、多くの家臣たちが見ている前で

献酌官は疑いが晴れ、以前の官職に復帰することができたが、一方で料理官は、反逆事件の主犯であることが明らかになったらしい。木に吊るされるときに残した言葉は知らぬが、ただ、最期の姿は私の解き明かしたのと同じだったとのことだ。

　処刑された料理官は哀れだったが、私は献酌官が釈放されたということが大変うれしかった。あれほど頼んでおいたのだから必ずや私を助けてくれるに違いないだろう。彼が監獄から出ていく日にも繰り返し頼んだよ。それからの私の心境をあなたは想像できるかね。私は再び希望を持つことができたのだよ。いつのことになるかは知れぬが、この薄暗い監獄から解放される道が開かれたのだ。私は嬉しかった。私の心は献酌官が釈放される前と後とでは完全に

変わったといえるだろう。考えてみたまえ。ただ死なずに一日一日やっと生きていくのがすべてだった人生だ。それが変わったのだ。私の人生の中に「待つ」ということが再び生まれたのだ。そう、もうすぐ献酌官が私を釈放してくれるはずだ。弱々しいがここから出ていけるという一筋の光が見えてきたということだよ。

もちろんそれ以降のことは分からない。その夫人が家にいる限りポティファル将軍のお宅に再び入ることはできないとは思っていた。おそらく献酌官が何とかしてくれるだろう。彼がどうにかしてくれるに違いないと信じていたのだ。

私はその日から夢を見始めた。いや、これは寝ているときに見る夢とは大違いだ。私が監獄から出て行ってから何をすべきかという夢だ。私はまず生ま

れ故郷のカナンに戻る決意をした。私を産んでくれたカナンの地に、私を愛してくれた父へのもとへと行きたかった。ベニヤミンに逢いに行きたかった。正直に言わせてもらえば、私は今まで私を蔑ろにした父に対する愛も、カナンに対する未練もなかった。ただ、私の中にあったものは、ベニヤミンに対する愛だった。一度でいいからベニヤミンをこの腕で抱きしめてやりたかった。それすらも神が許されないのなら、遠くからでも見守ることができればいい。それもかなわないのなら、健やかでいるのかどうかさえ知ることができれば、それだけで、どれほどうれしいだろうかと思ったものだ。

　献酌官が出ていってからというもの、私は希望のない無期囚から希望のある有期囚へと、釈放を待つ

身分へと変わった。私は毎日、献酌官が出してくれる日だけを待ちわびた。固く閉ざされた扉の向こうから聞こえてくる足音に、もうおびえる必要はない。その足音は私を木に吊るすためではなく、私に自由を伝えに来る足音かも知れないではないか。ああ、私の周りを見ても何一つ変わったものはなかったが、希望を持つと、こうも見え方が違うものかと驚かされたよ。私は毎日が楽しかった。私が生きているということを楽しむようになったのだ。失っていた笑いが戻ってきた。ときどき様子を見に来るポティファル将軍殿も私の表情が変わったと言ってくれたほどだ。

　ところが、いくら待っても献酌官からの知らせも、釈放の通告も届かぬまま、時間だけがむなしく過ぎていった。「待つ」ということは人を幸せにもするが、

胸を焦がすこともするから不思議ではないかね。待てど暮らせど静寂ばかり。私はまたもや穴の中、カナンの地で私が投げ入れられたあの暗い穴よりも、もっと暗い闇の中へと落ちていくような気がした。

一体私をこの薄暗い監獄の中にいつまで閉じ込めておくつもりなのだ。私に夢の解き明かしをさせた神は、あるいは私のためではなく彼らのための神、木に吊るされた料理官は例外としても、献酌官のための神ではなかったのかと思えるまでになったのだ。そうではないか。彼らの夢の解き明かしをしてくださったのは紛れもなく神だった。それは自信を持って言える。しかし、私としては、ただ解き明かしをしてあげただけだったとすれば、神は誰のために働かれたのかね。私の頭ではいくら考えても答えを見つける

ことはできなかったよ。

　一言、ただ一言だけでもいいから献酌官に申し上げたかった。このヨセフをお忘れかと、このヨセフを、このヨセフを本当にお忘れなのかと、一言お伝えしたかった。

　だがなす術がない。八方ふさがりだ。ここにおられたときは、私の助けを必要としていたが、今では陛下を近くで仕える家臣。一方で私は主人の妻に手を出そうとしたという濡れ衣を着せられ、投獄された奴隷の身分だ。囚人の私からは雲の上のような方である献酌官にもうお目にかかることもできなかったので、私はただ祈るばかりだった。何度も何度も祈ったものだった。だが、現実の中でも夢でも何の答えも見えてこないままだったよ。

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

　未来も、希望も、自由もない。「待つ」ということとは、痛みでもあるということを思い知らされたものだ。ひたすら待つことの痛みに耐えていた。まるで兄から捨てられて穴の中から抜け出せなかったときに感じた無力感のようだった。

　それでも、生きる手立てはあるものだね。待つのが苦痛であれば、これを治療する薬も見つけることができた。それは忘却だよ。忘れてしまうこと。そう、献酌官も、そのお方と結んだ約束もすべて夢だと思うことにしたのだ。献酌官が私を忘れてしまったのなら、私も忘れるほかはない。神とて同じことよ。神が私を忘れてしまったのなら、私も忘れればよい。そうではないか。忘却はいつか私を安らかにしてくれるものと信じることにしたのだ。

時間は過ぎて、季節も移り変わる。牢には献酌官や料理官の後にも多くの人々が入ってきて、多くの人々が出ていった。献酌官のように回復された者もいたが、料理官ように惨い最期を迎える人も少なくなかった。

　私の前には繰り返される時間、繰り返される季節、繰り返される日常があるだけだった。神は、そう、神は沈黙を守ったままだ。その沈黙は漆黒のような牢の闇よりも深いものだった。

　だが、運命の日、その日は突然やってきた。監獄の長の慌てて私を呼ぶ声がした。牢の中に彼の叫ぶ声が響き渡った。なんと陛下が私をお探しだというではないか。このヨセフを探しておられるというのだ。私には想像もできなかった。

私が喜んだと思うかね。いいや、初めは怖かった。それもそうだろう。献酌官が私を助けてくれるのなら、彼が呼ぶはずではないか。万が一、献酌官が私の悔しさを陛下に申し上げたとして、私が釈放されることはあっても、陛下が直接私をお呼びになるはずがない。そうでなかったらポティファル将軍から命じられたはずだ。

　なのに、突然、陛下が直々お呼びだとはどういうことだ。思いもよらぬ展開に私は驚いた。だが、逆らうわけにもいくまい。私はすでに待つことも望むこともなくした状態だった。私がどう思おうと何の意味があろうか。待つということの忘却によって、私は喜びや恐怖さえもすべて忘れてしまったようだった。そこから出た後、私が料理官や他の悲劇的な官僚たち

のように木に吊るされ、鳥たちが私の体をついばんだとしても関係ない。この世に名もなく訪れ、名もなく去っていく魂がどんなに多いだろうか。私も所詮はその中の一つに過ぎない小さな魂。この地に小さな爪痕すら残さず消えゆく塵のような存在のように、ただこの地に小さな命、静かに来たりて、寂しく消えていくだけだ。血を分けた兄弟たちに見捨てられ、奴隷として売られ、恥ずかしい濡れ衣を着せられて死んいくとしても、怖くも恐ろしくもない。いずれにせよ、もう自分の力ではどうしようもないことだ。

　未来が栄光へと続く道であろうと刑場へと続く道であろうと、わたしはただ何も考えず従うことにした。

　数年ぶりに塀の外へ出たようだった。牢の中から見えた空とは明らかにちがう。同じ空とは思えないほ

ど色が違っていた。

　私は陛下からの使者に連れられて行き、そこで謁見の支度を整えた。何が起こっているのかと尋ねようともしなかったよ。尋ねてどうする。知ってどうする。自分の力で神の口を開くことができないのと同様に、自分の力で人生を変えることもできないという事実を、少しずつ分かってきたような気がしたのだ。

　初めて足を踏み入れた王宮は、とてもまぶしかった。家臣たちが着た服は太陽よりも輝いて見えた。床や壁も光っていた。いくら感情が枯れていたとはいえ、私の前に広がる廊下の上を歩いているということ自体が驚きだった。そのような床の上を踏んでもいいということが信じられなかったほどだったよ。

　広々とした豪華な廊下を過ぎると、大きな扉が見

えてきた。ゆっくり門が開き、導かれるままに入っていくと、そこには偉大な威厳が待っておられた。そう、陛下だ。エジプトを統治するファラオ、世界を動かす皇帝陛下だったのだ。

玉座の前に出でてかがみむと、エジプトに連れて来られたヘブライ人が、しきたり通りに礼をささげるのをご覧になって、少し驚かれたとおっしゃって下さった。陛下は言葉をつづけられた。

お前は夢の解き明かしが得意だというではないか、私の夢を解き明かしてみよ。

私は驚いて顔を上げ周囲を見渡すと、陛下の隣に献酌官がおられるではないか。私を見る視線が喜んでいるのか申し訳なく思っているのかわからなかった。

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

おそらく二年は経っただろう。多くのことが、そう、その瞬間、目の前を様々なことが通り過ぎていったような気がする。

陛下の怒りを買い、料理官と共に入れられてきた初日の記憶。監獄生活での苦しさを訴えていた時の姿。夢の解き明かしを聞いて喜んでおられた姿。そしてあの日、陛下の召しを受けて出て行かれるときの後ろ姿。

すぐに走り寄って、なぜ今まで何の音沙汰もなかったのか問いただしたかったが、その表情を見てすべてを許すことにしたよ。悔しさよりも嬉しさがこみあげてきた。すぐにでも近づいて手でも取りあいたかったが、その時はただ笑顔で挨拶を交わすしかなかった。そう、すべては神が計画されたことよ。誰を非難

することができようか。

　初めてお目にかかる陛下のお顔は、ひどくやつれたように見受けられた。お言葉によると、夢を見られたのだが誰も解き明かしができないとのこと。その夢というのがこうだ。

　夢の中で陛下はナイル川沿いに立っておられたが、美しく脂えた七頭の雌牛が川から上がってきて牧草をはんでいると、その背後から醜いやせ細った七頭の雌牛が川から上がって来て、先にいた七頭の雌牛を食べてしまったそうだ。陛下は一度、眠りから覚めた後、また夢を見られた。一本の太い茎に七つの穂が実ったのだが、後から弱った茎から七つの穂が出てきて、前の太い茎に実った穂を飲み込んでしまったと仰った。

陛下からこの言葉を聞いた時、私は確信した。これは推定や憶測ではない。自ら悩むとか考える間もなく、神は私に知恵を下さったのだ。どうして疑うことができようか。疑問の余地がないというのはもう一つ理由がある。それは、神が陛下に二度も夢をお見せになられたという点だ。これは明らかに成し遂げようとされる神の確固たる意志を示すものだ。

これほど明快な意味をこれほど聡明で博学な方たちに解けないということが不思議でならなかったよ。

そこは偉大なる陛下の御前。下手をしたら、いつ首が飛ぶかもしれない席だったのだが、ためらう私の考えとは裏腹に口はすでに動いていたのだ。

「この夢は七年の豊作と七年の凶作です。先に現れた肥えた七頭の雌牛と太い茎に実った七つの穂

は七年間の豊作を、次いで現れた醜いやせ細った七頭の雌牛や弱った茎から出た七つの穂は七年間の凶作を示していますが、後の醜いやせ細った雌牛が肥えた雌牛を飲み込み、弱った茎の穂が太い茎の穂を飲み込んだというのは、後に起こるであろう凶作が前の豊作の勢いを上回るということです。よって、陛下は知恵あるものを選んで国を治めさせ、七年間の豊作の間に刈り入れる穀物の五分の一を蓄えさせ七年間の凶作に備えられればエジプトは滅びずに済むでしょう。」

　一度に言葉を発したためか、背筋には冷や汗が流れ、呼吸は荒かったが、私を助ける神がおられるということをはっきり知ることができたよ。このようなことを申し上げると信じられないことが起こったのだ。

畏れ多くも陛下は私をエジプトの宰相に任命されると仰せられたのだ。どうしてこのようなことが起こり得ようか。それだけではない。陛下は自ら皇帝の印章が彫られた指輪を私にはめて下さるではないか。

私は何者であろうか。カナンのはずれで生まれた羊飼いの息子ではないか。

私は何者であろうか。兄たちに憎まれた哀れな弟ではないか。

私は何者であろうか。遠くエジプトに売られた奴隷ではないか。

私は何者であろうか。ポティファアル将軍に仕えていたしもべではないか。

私は何者であろうか。濡れ衣とはいえ、何年もの間、獄中に繋がれていた罪人ではないか。

そのような私を神は一度に高められたのだ。どれほど高められたのか。そう、天より高く持ち上げて下さったのだ。

　おお、神よ、このちり芥のような私が宰相になったとは。兄たちから嫌われ、十七の歳で父がつけてくれた、あや織りの長服さえも引き裂かれて売られてきたこのヨセフが、残りの十三年間を奴隷と監獄生活しかしたことのないこのヨセフが、名もなく生きて名もなく去っていくだけの命だと思っていたこのヨセフが、生まれ故郷のヘブライの地でもない、エジプトで宰相になるとは。

　私は陛下から名誉も名前も、そして美しいアセナテも授かることができた。奴隷であり罪人であったヨセフが、エジプトの支配者であり祭司の婿でありそな

たの夫であるツァフェナテ・パネアハとなったのだ。これこそがまさしく、全てを創造された神、全てを成し遂げられる神、全てを回復される神の驚くべき御業でなくてなんであろうか。

そなたも知っての通り、私は七年の間、あらゆる穀物を蓄えることができた。あの豊作は実に素晴らしかったではないか。重さや数を記録しようとも追いつかないほどの驚異的な収穫量だった。だが、七年が過ぎると神が下さった解き明かしのとおり、肥えた土地は荒野に変わり、大きい実を植えようと小さい実を植えようと、土地はすべての穀物を呑み込んでしまった。もう周辺にはエジプトと競り合えるような国はなくなってしまったではないか。国中のすべての民の財産は陛下のものとなり、その代償として民た

ちは腹いっぱい食べることができる。そなたも周辺国から入ってくる金銀財宝を見たことがあろう。エジプトはこれからもどんどん大きくなるはずだ。大帝国となり世界を支配するようになるだろう。

先日、本宮に戻ると、二人の客人が待っておられた。一人は献酌官殿あり、もう一人は親衛隊長ポティファル将軍殿であった。私の執務室に入って来られると、ひざをかがもうとされたので、慌てて引き止めたよ。いくら陛下の寵愛を得て仕えているとはいえ、お世話になった方たちだ。献酌官殿は二年も私を忘れていてしまったことについて重ねて謝られ、ポティファル将軍殿はご自分も真実を知っていたが、どうすることもできなかったとし許しを求めた。

私はまず、献酌官殿に申し上げた。

「二年もの間、一日も欠かさず知らせを待っていました。昼も夜も献酌官殿がお呼びするのを待っていました。しかし、もし献酌官殿が私をすぐ陛下に申し上げてくださったならば、少し早く釈放されたかもしれないが、私はまだ依然として奴隷だったはず。ただ罪を犯した奴隷が罪を犯していない奴隷に変わっただけでしたでしょう。未来も希望も自由もなく昔のように一日一日生きて行かなければならなかった。しかし、二年間、私を忘れて下さったおかげで、私は今こうして栄光を得ることができました。これらすべてのことを司る神に感謝と捧げます。」

一方、ポティファル将軍と話すときは少し困ってしまったよ。奴隷として将軍殿とその家族のために仕えているときにも、実はその夫人に関していくつかの

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

噂は小耳にはさんでいたのだ。しかし、それを口に出すわけにはいかない。将軍殿が建前では怒っていらっしゃったが、牢に閉じ込められている間にも、いろいろと配慮をしてくださった。あの夫人の下で働くぐらいなら監獄生活がよっぽど楽だったかもしれん。ハハハ。

　私はごちそうでもてなし、二方と楽しい時間を過ごすことができた。とても温かい出会いであった。すべてが遅かったと考えたとき、誰もが間違っていると思ったとき、神は一寸の狂いもなく私をここにまで導いてくださったのだ。すべての栄光を神にささげよう。

　だがなあ、アセナテ、私は忘れておらん。十人の血を分けた兄たちを忘れるわけがない。彼らが私に何をしたのかも忘れるわけがないではないか。そん

な彼らとの再会が楽しいはずも温かいはずもなかろう。会うなどもってのほかだ。私はそんな暇ではない！

ふむ……。

（しばらく考えこみながら室内をゆっくり歩き回る）

（次第に怪しい表情を浮かべながら笑い出す）

ふふ、しかし、面白いかもしれんな。

（高らかに笑う）

よかろう。己の嫉妬と憎しみで私と父との間を引き裂き、私とベニヤミンの間を引き裂いた彼らか来たとな。よかろう。会おう。会おうではないか。

誰か！誰かおらぬか！

（退場）

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

第一章　幕。

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 : 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

第二章　葛藤

－ 十一兄弟たちの葛藤

登場人物

ツァフェナテ・パネアハ(ヨセフ) : エジプトの宰相

通訳

警備兵1・2・3

ヨセフの兄たち : ルベン、シメオン、レビ、ユダ、ダン、ナフタリ、ガド、アシェル、イッサカル、ゼブルン

場所 : エジプト宰相の謁見室

※注1:【目上の呼称】母親が同じ場合は「兄さん」、違う場合は「兄貴」

※注2:【自分の呼称】

ルベン　:ボク

シメオン :俺

レビ・ダン:オレ

ユダ　　:私

他兄弟　:僕

※注3:【父の呼称】

ルベン　:お父さん

シメオン・レビ　:親父

他兄弟　:父さん

－ 静かな音楽が響く

－ 幕が開くと、左側の高いところ椅子が置かれており、その前付近に通訳と警備兵2～3人がいる。右側からルベン、シメオン、レビ、ユダ、ダン、ナフタリ、ガド、アシェル、イッサカル、ゼブルンの順序で周辺をキョロキョロしながら登場する。

ナフタリ　　:(ダンを見て)ここが、エジプトの宰相が住んでいる城なのか？すごいな。目がクラクラしそうだ。すげえ。あの彫刻を見てみなよ。こんなにすごいところは初めてだ！

ダン　　:静かにしろ！声が大きすぎる！おまえ、ここをどこだと思ってるんだ。お前

はどこへ行っても落ち着きがない。おとなしくしてなさい。ここで下手したら殺されるかもしれないんだぞ。

ナフタリ　:(ダンを見て)ところで、宰相という人は一体どうしてオレたちに会いたがってるんだろう？ここに食糧を買いに来た人たちに全部会ってるのかな。エジプトの宰相って、そんなに暇なの？

ダン　:うむ、実を言うと、オレもそれがちょっと引っかかってるんだよ。ほかの人たちは倉の方でお金を払って食料を買ってただろう？なのに、どうしてオレたちだけこんなところに連れてこられたんだろう。おい、ナフタリ！お前、また

妙な事してないよな？

ナフタリ　　:何言ってるんだよ。そんなはずないだろ。一体どうなってるのかさっぱりわからないよ。

ダン　　:(ユダに向かって)ユダ兄貴、大丈夫でしょうね。何もないでしょうね？

ユダ　　:さあ、私もそれが気になってるんだ。何が何だかさっぱり分からない。私たちをどうにかしたいのなら、さっさと牢に入れてしまえばいいものを、宰相が直々にお会いになりたいとおっしゃるとなると、悪いことではないような気はするのだが…。

ルベン:(ユダを見て)そうだろう？ユダ、そうだよ

な？大したことないよな？ボクたち、
無事に帰ることはできるだろう？

－ ナフタリとダンはルベンが気に入らないという風に舌打ちをして、ルベンと反対の方を向く。

ユダ　　　　：はい、ルベン兄さん。大丈夫です。
あまり心配しないでください。
シメオン　　：（ルベンを見て）ほら、ルベン兄さん。
大丈夫ですよ。俺たちがいるでしょう。
何かあったって大したことないですよ。
ま、いざとなりゃあ、このシメオンとレビ
がいるじゃないっすか。大船に乗った
気持ちで、うちらの後ろをちょろちょろ

とついて来てくださりゃあいんですよ。(レビの方を見る)そうだろう？弟。

レビ　：シメオン兄さんの言うとおりだ。他の奴らはともかく、オレたちを信じて下さい。フフフ。

ルベン　：(シメオンを見て)そ、そう…そうだよな。君たちを信じるよ。さ、さっきおしっこをして来たんだけど、また行きたくなってきちゃったな。

シメオン　：まったく…兄さん、あの宰相かなんかが俺たちに言いたいことなんてそんなにないでしょう。どうせ、すぐ終わるだろうから、ちょっと我慢しなさいよ。

警備兵1　：皆の者、静まれ！ツァフェナテ・パネ

アハ宰相閣下にあらせられるぞ！控えおろう！

－ ヨセフの兄たち、左側の椅子に向かって、その場にひれ伏す。

－ 壮大な音楽が鳴り響き、華やかで権威のある衣装を着たヨセフが左側の椅子の後ろから入ってきて座る。

ヨセフ　　：（通訳に話す）

通訳　　　：皆の者、面（おもて）を上げよ。

－ 兄たち、恐れながら、ゆっくりと顔を上げる。

ヨセフ　:（通訳に話す）

通訳　:おぬしたちはどこから来たのか。この国に来た理由を尋ねておられる。

ルベン　:（大声で）し、臣たちは食料を買うためにカナンから来ました。

通訳　:（ヨセフに伝える）

ヨセフ　:（通訳に話す）

通訳　:（大きく権威のある声で）嘘をつけ！おぬしたちは私の目を節穴と思っておるのか。お前らはこの国を偵察に来た回し者であろう。

ルベン　:ち、違います！何を言ってるんですか！違いますよ！

シメオン　:あっしたちは、ただカナンの地から穀

物を買いに来ただけです。これを見てくだせぇ。これが食料を買うための資金です。回し者などとは、そんな物騒な。あっしたちみたいな、けちな者たちに何の疑いがございましょう。

レビ　:そうっすよ。ここにいるあっしたちは、みな一人の父親から生まれた兄弟っす。そんな、回し者だなんて、めっそうもございあせん。何でしたら、ほれ、持ち物をみんなご覧になってもかまいませんぜ。それにしても、何でまた、そんなことをおっしゃるんで？

通訳　:(ヨセフに伝える)

ヨセフ　:(通訳に話す)

通訳　　:不届き者め！おぬしら、恐れ多くも宰相閣下の御前であるぞ！この期に及んでも白を切る気か！おぬしらは隣の国からこの国の偵察に来た回し者であるぞ。私は早くから周辺国らがこの国の豊富な食料を略奪しようと虎視眈々とすきを狙っているということを知らぬとでも思っておるのか。もし、正直に白状するのなら、今回だけは許して遣わす。相違ないな？

ルベン　　:宰相閣下！私たちは、ただ、カナンの地に住んでいる家族です。回し者じゃないですよ。とんでもありません。私たちは十二人兄弟で…。

通訳　　:（ヨセフに伝える）

ヨセフ　　:（通訳に話す）

通訳　　:十二人兄弟とな？しかしおぬしらは十人しかおらぬではないか。

ルベン　　:そ、それは、す、末は今、うちでお父さんといまして…、そして、もう一人、もう一人は…（うつむく）昔、いなくなりました…。

通訳　　:（ヨセフに伝える）

ヨセフ　　:（通訳に話す）

通訳　　:とうとう本性を現しおったな。私が回し者だといったのはこのためだ。おぬしらの末の者がカナンの地でおぬしらの父親と一緒におるということであるな

ら、その末の者を連れてまいれ。もし、おぬしらが末の者を連れてくればよし、今言ったことが真実と証明されるだろうが、もしも、連れて来ることができなければ、ここから永遠に出られないと思え！これからおぬしたちの中から一人を送り出そう。命が惜しければ早急に末の者を連れてまいるがよい。よいか！

－ 照明が暗くなってスポットライトが十人兄弟だけを照らす。兄弟たちは、お互いの顔を見合わせながら座っている。お互いに困ったような面持ちだ。兄弟たちの会話が始まると、ゆっくりと幕が降り、客席から

は十人兄弟だけに見える。

ダン　　　　：(ルベンを見て)おい、てめえ、何、ふざけたこと、言ってるんだよ！何で末のことを持ち出して話をこじらせてるんだよ！てめえのせいで、皆殺しにされそうじゃねえか！どうしていつも、やることなすこと、みんながこのざまなんだ！

ナフタリ　：(ダンを見て)ダン兄さん！あんな奴、ほっとけよ。あんな、汚らわしいやつ、連れてきたのが間違いだったんだよ。

－ ルベンが卑屈な目つきでダン、ナフタリを見て

いる。

ナフタリ　：何、見てんだよ！この野郎！とっとと、うせろ！あっち行け！

ユダ　：（ダン、ナフタリに向かって）こら！お前ら！兄さんに向かってなんて口の利き方だ！

レビ　：おい、ユダ。放っとけよ。お前もあいつらの気持ちを察してやれ。それに、間違ったことなんか言ってねえじゃねえか。

シメオン　：その通りだ。ダンやナフタリの言っている通りだよ。

ユダ　：（シメオンを見て）兄さん、しかし、放

ってはおけません。

ルベン　　:(兄弟たちをいちいち見回しながら)ボ、ボク、間違ってないよ。いくらうちらの兄弟がどうなったとしても、ボクはいつもうちらの兄弟は十二人だと思ってきたんだ。あの子は目に見えなくてもボクたちと一緒にいるんだ。あの子は今もボクたちの兄弟なんだ。ボクたちの愛しい兄弟なんだ。

レビ　　:(シメオンに向かって静かに)兄さん、ルベンはまだヨセフが穴の中で死んだと思ってんのか。

シメオン　　:(レビに静かに)そうみてえだな。そういやあ、ヨセフを奴隷商人に売り渡す

とき、おそらくルベンはそこにいなかっただろう？まあ、いてもいなくても関係ねえ人間だから、気にもとめていなかったけどな。

レビ　　：(シメオンに静かに)じゃあ、今の今まで、誰も教えてやんなかったんすかね。

シメオン　　：(レビに静かに)関係ねえよ。あんな奴に誰が構うもんか。いくら何でも、ビルハ母さんに手を出すとはな…。

ルベン　　：(シメオンの最後の言葉を聞いて、シメオンを見て)いや、シメオン、そうじゃないんだってば。ボクじゃなくて、ビルハが先に…。

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

ダン　　　　：(ルベンに向かって殴りかかろうとする)もういっぺん言ってみろ、この野郎！、まだあんなこと言ってるのか。あの野郎を生かしておかねえ。今日こそ、ぶっ殺してやる！てめぇ、ちょっとこっち来い！

－ ルベン・ユダ・シメオン・レビを除いた兄弟たちがダンを抑える。

ナフタリ　　：兄さん、もう、それぐらいにしとけよ。
ダン　　　　：おい、ナフタリ。お前はオレたちの母さんがあんな奴に辱めを受けたのに何ともないのか？え？言ってみろよ！

悔しくないのか！

ナフタリ　:あんな奴を相手したってしょうがないだろ。兄さんが我慢しろよ。あんな奴を殴ったって、オレたちの手がよごれるだけだって。

ダン　:(ルベンを睨む)くっそ！ 憎たらしい奴め！ (なだめる兄弟たちによって、怒りを抑えながらしぶしぶ座る。もと居た、ルベンから離れた、ナフタリの隣)

レビ　:(ダン・ナフタリに)まあ、お前らの言いたいことは分かるけどな。(ルベンを見て)あのさあ、何で余計なことをしゃべって、こじらせるんかね…。末のことなんて言わなくてもいいじゃんかよ。

おかげでオレたちは殺されちまうかもしれねえんだぜ。

ルベン　：おい、そんなこと言うなよ。あの人がボクたちの言っていることを信じてくれないのは、信憑性がなかったからなんだ。ボクたち兄弟はここにいるだけじゃないじゃないか。だから、全てを話したら信じてくれるはずだよ。いや…、待てよ…。（しばらく考え込む）違う…、違うぞ…。（歩き回りながら）もしかしたらこれは、あの子の呪い…、いや…、ラケル母さんの呪いかも知れないぞ…。

シメオン　：何言ってんだよ。いい加減にしろよ。

ルベン　　：(シメオンを見て真剣な表情で)なあ、か、考えてみろよ。あの子が死んだのはボクたちのせいだろう？ボクたちが殺めたようなもんじゃないか。これは、もしかしたら、あの子の呪い…。いや、いや、違う、違うぞ…。(頭に手を当てて深刻な表情で考えていたが、しばらくして、新しい事実を悟ったというようにシメオンを指さしながら)わかったぞ！そうだ、あの子が言ったんだ。間違いない！あの子が、あの子が天国へ行って、そこにいるラケル母さんに、みんな告げ口をしたんだよ。(シメオンに擦り寄る)だからラケル母さんがそ

のことを知ってしまったんだよ。ボクたちが自分を殺したんだとさあ。ほら、覚えてるだろ？もともとあいつの特技だったろう？告げ口するのがさあ。なあ、そうだろう？

シメオン　　：（ルベンの体を押し戻す）もう、いい加減にしろって言ってるだろう。

ルベン　　　：いいや、シメオン、そうじゃないよ。聞いてみてくれよ。ボクたちはあの子を手にかけたんだよ。血を分けたあの子を僕たちの手で殺してしまったんだ。ラケル母さんの息子はあの子らだけだろう？だから僕たちがこのエジプトで何の理由もわからずに死んでしまうこ

とになったじゃないか。な？不思議だろ？ちょうど末は今、お父さんとカナンにいるじゃないか。だから、末を除いて僕たちだけが殺されることになったんだ。だろう？これがラケルの呪いでなくて何だろうか。そうだろう？なあ、そうだろう？

ダン　　　：（ルベンに殴りかかろうとする）てめえ、黙れって言ってんのが聞こえねえのかよ！

－ 周りの兄弟たちがなだめる。声 cut out。ダンは振り切ってルベンに殴りかかり、兄弟たちは、ダンを抑えるために追いかける。ルベンはあちこち逃げ

回る。

－ ガドとアシェルが顔を合わせ話始める。

アシェル　:ガド兄さん、ダン兄貴とナフタリ兄貴はどうしてルベン兄貴を嫌ってるの？兄弟の中では長男でしょう？

ガド　:気にするなよ。お前は知らなくてもいい。

アシェル　:何でなの？兄さんは知ってるの？知ってたら教えてよ。

ガド　:いいよ。知らなくてもいいって言ってるだろ？

アシェル　:なんだよ。水くさい。教えてくれたっていいじゃんかよ。

ガド　　　:まあ、それがな。その…、ダン兄貴とナフタリ兄貴の実の母親はビルハ母さんだろう？

アシェル　:そんなの知ってるよ。それが、どうしたっていうの？

ガド　　　:それがな。まあ、その…、ルベン兄貴とビルハ母さんが、その、まあ、いわば、その…男女関係になってしまったんだ。

アシェル　:なにそれ。本当なの？そんな馬鹿なことが…。父さんもそれを知ってるの？

ガド　　　:ああ、耳には入っているはずだ。だからビルハ母さんから生まれたダン兄

貴とナフタリ兄貴がルベン兄貴にあんなにたてついても、誰も文句が言えないんだ。

アシェル　：じゃあ、ルベン兄貴はビルハ母さんを愛してるって？

ガド　：そんなわけないだろう。ルベン兄貴はビルハ母さんが先に自分を誘惑したっているけどな。

アシェル　：え？それって、本当なの？

ガド　：さあね。本当かどうかは誰も知らないんじゃないの？

アシェル　：ビルハ母さんはなんて言ってるの？自分から誘ったって認めたの？

ガド　：まさか、そんなこと言うはずないだろ

う。父さんがなんて言ったかは知らないけど、いつからかルベン兄貴がいるところでは顔も見せない。なのに、自分からどうのこうのとか、そんなことを言うかい？おい、それはそうと、ありゃまずいぞ。本当に兄弟どうして殺し合いが起こるかも。(アシェルに)お前も早くなんとかしてみろよ。

- 音　fade in。兄弟たちの口論の音が大きくなる。

ユダ　　　　　：おい、ダン！お前の言い分は分からないでもないが、これはならん。ならんものはならんのだ。いくら何でも我々

兄弟の長男であるルベン兄さんにこんなことをしていいと思っているのか？早く謝れ、早く！

ダン　　:謝る？オレが謝る？オレに、あのルベンだかなんか知らん奴に謝れと言ってるんですか？ユダ兄貴、いくら同じ母さんから生まれた兄弟だからってかばう気持ちはわかるけど、これはちょっとやりすぎじゃありませんか？

ユダ　　:何を言ってるんだ。誤解するな。私は母親が誰であろうとお前らを差別したことは一度もない。皆が血を分けたアブラハムとイサクとヤコブも息子だと思っている。だが、しかし、守るべきも

のは守らなければならないんじゃないか。理由はどうであれ、ルベン兄さんは我々の長子ではないか。それを肝に銘じるようにと言ってるんだ。

ナフタリ　：兄貴、長子って言いましたか？だから何だと言ってるんですか。長子がどうしたと言うんです。言っちゃあなんだけど、うちの父さんがその長子の権利のせいで、どれほど苦労したか、おわかりでしょう？生まれてくるときからエサウのかかとをつかんで出てきたヤコブ。一生、二番目という劣等感。長子でないという劣等感にさいなまれた父ヤコブ。父さんはいつでもスキさえあ

ればエサウおじさんから長子の権利を奪おうとしたでしょう？だからあの日もおじさんが空腹を覚えて狩りから帰ってくるとき、ずる賢くもその前で煮物を煮たあげく、結局長子の権利を奪ったんです。それだけじゃない。それでも不安だったのか、イサクじいさんが二人の息子、エサウとヤコブに遺言を残すとき、目がかすんでいたおじいさんの弱みに付け込んで、父さんはエサウの着物を着て、腕には毛深いエサウおじさんに見えるように子ヤギの毛皮を巻き付けて、エサウの受けるはずだった祝福を横取りしましたよね。そ

の結果、父さんが得られたものは何でしたか。長い間、逃げ回っていただけでしょう。

ユダ　：ナフタリ！ 今、お前は兄さんだけでなく父さんまでも辱めるのか。一体、どういうつもりなんだ！（立ち上がる）

レビ　：（立ち上がるユダを座らなせがら）おい、ユダ、もういい。それくらいにしておけ。（ダンとナフタリを指しながら）お前もあいつらの気持ちを知っているくせに、どうした。（後に下がって座りながら）まあ、考えてみりゃあ、うちの親父さんも大したもんだよな。どれだけ自分本位なんだ。長子になったってし

ょうがないだろう。違うか？だからって うちの親父がイサクから譲り受けたもんなんて、あったか？逆にその時まで蓄えていたものもヤボク川を渡るときに、みんなおじさんにやっちまったんだろう？

シメオン　：ハハハ。ホント、うちの親父も大したもんだよ。親父がカナンを離れて20年ぶりに戻るとき、ハハ。おまえ、ヤボク川を渡るときのこと、覚えてるよな？エサウが自分を襲うかも知れないからと言って、どうした？ヤギや羊やらくだの群れを最初に渡らせ、次に俺ら家族を、そして最後に自分が渡ってきた

だろう？あれは、どういう意味だ？エサウが俺らを襲ったら、自分一人だけ逃げ出す魂胆だったんだろう？それを俺らが知らないとでも思ったのかねぇ。ハハハ。

レビ　　　：(シメオンに向かって)もしかしたら、自分だけを考え自分本位で生きていくのは、うちの家の伝統かも知れないっすよ。オレが聞いた話によれば、アブラハムがネゲムに行ったとき、きれいなサラのせいで自分が殺されるかもしれないからと、妻だということを隠したんでしょ？それで危うくゲラルの王アビメレクにサラを奪われそうになった

そうだけど。イサク爺さんもゲラルで全く同じことをしでかしたそうっすよ。うちには、どうしてこんな利己的な人間ばかりいるのかね。とんだ家柄もあったもんだ。

ユダ　　　：お二人とも、それぐらいにして下さい。他の者たちも聞いてますよ。

イッサカル　：それは僕も聞いたことがあります。

ゼブルン　　：お婆さんはそのことをまだ忘れられないと言っていましたよ。

ユダ　　　　：（イッサカル、ゼブルンを見て）お前らも静かにしなさい。ふむ…。

シメオン　　：うちらの家系に利己的な人間たちはアブラハムだけじゃなかろう。そもそも

最初の人間だったアダムからしてそうだったんだ。（兄弟たちを見ながら）神がアダムとエバを創ってエデンに置かれたとき、食うなといった、その…何だ…善悪の知識の木の実とかなんかを食ってしまったから俺たちが今もこんなに苦労してんだろう？あの時、あんなことをしなかったら、今の俺たちみたいに腹を減らすこともなく、何の心配事もないエデンでラクして生きて行けたのによ。

レビ　　：ヘビだか何だかに騙されたんでしょ？

シメオン　　：どんだけダマやれやすいんだって話

だろ？それもまた情けない話だ。エバは、その実を食べると神のようになれるって聞いてダマされたっていうじゃないか。利己的？それも神のようになれるだ？だからって、それをペロッと食っちゃうかね。自分が神のようになってどうするつもりだ？今も昔も女っていうのはいつも同じだ。女の言うことがどれだけ非現実的で愚かなことか。

ユダ　：単純にエバだけ責めることはできません。アダムには、少なくとも二つの誤りがありました。第一は、アダムは神からその実を食べてはならないという、食べれば必ず死んでしまうとう御言葉

を受けました。ですが、彼はその御言葉をエバに正しく伝えなかったのではないかと思われます。だから、ヘビによって誘惑を受けたとき、「その実を食べると必ず死ぬ」ではなく、「死ぬかもしれない」と理解していたのです。もう少し正しく御言葉がエバに伝えられていたのなら、あるいは人間が堕落せずに済んだかもしれません。そして第二の誤りは、エバが神の御言葉に背くとき、アダムはこれを止めませんでした。神は確かにエバをアダムの管理下に置きましたが、アダムはその責任を全うせず、むしろエバが転ぶとき一緒に

転んでしまうという失態を犯したのです。このようなアダムにどうして非がないと言えるでしょうか。そしてまた、それほど過ちがあるにもかかわらず二人を滅ぼさなかったのは神の恵みだったと受けとらなければなりません。人間が創造された当初は何も身につけていなかったにもかかわらず自分たちが裸だったということに気が付かなかったといわれますが、これは人間が無知だったからではないはずです。いくら自分が何も持っていなくても、神の保護を受けているのなら何の恐れもないでしょう。しかし、神の命令に背き、

神の保護膜が取り払われた状態になって、初めて自らが裸だったと気づいたのです。彼らにとって自分を守るためにできることといえば、イチジクの葉を編んで、できそこないの服を作ることぐらいです。その時、神はどうされましたか。神は皮の衣を二人に与えられました。皮の衣とは血を流す犠牲をあらわします。犠牲がなければ得られない、犠牲の結果として得られるものが皮だからです。人間に対する神様の恵みは今も与えられています。この世がひどい飢饉に見舞われているにもかかわらず、それでも私たちを見捨て

ずにエジプトまでの道を開いて下さったではありませんか。

レビ　:それはどうかな。弟、お前の言っていることが間違っているとまでは言わないが、少なくとも今は的を射てると前では言い難いね。生きる道が開けたのか殺される道が開けたのか、わからんだろう。あの宰相がオレらを殺そうと躍起になっているじゃねえか。

シメオン　:(レビに向かって)まあ、ちょっと待て。(ユダに向き直る)アダムとエバはそうだとしよう。じゃあ、その息子カインを見てみろ。自分の弟を殺したカインこそ利己的な人間じゃないか。

レビ　　　　：一体カインは、何でそんなことまでしたんすかね。

シメオン　　：お前はそんなことも知らんのか。アダムの息子であるカインとアベルが神にいけにえを捧げたんだが、弟アベルのいけにえは受けられ、自分のいけにえは神が受けなかったから、弟に嫉妬してアベルを打ち殺したっていうじゃねえか。

レビ　　　　：神は、何でまたカインが捧げるいけにえを受けなかったんすか？

シメオン　　：そんなの知るか。どうだ、ユダ。お前はどう思う？

ユダ　　　　：神がカインのいけにえをなぜ受けた

のかは私にも分かりません。しかし、いくつか確かな点はあります。まず、神はアベルのいけにえを受けられたのには理由があり、また、同様に、カインのいけにえを拒否された理由も必ずあるということです。捧げ物から比べてみましょう。カインが捧げ物は、土地からの収穫物を捧げ、アベルは羊の初子の中で最も肥えたものを捧げたと聞きました。

レビ　:カインは土を耕し、アベルは羊を飼っていたから、自分たちが得たものから捧げたんだろう？それのどこがいけなかったって言うんだ？

ユダ　　　：私も細かい点については分かりません。ただ、三つのことは言えると思います。第一に、明確なのはアベルがカインよりも選りすぐりのものを捧げたということです。聞くところによると、アベルが捧げた物については、「羊の初子の中で最も肥えたもの」とされており、これは、アベルが神にいけにえを捧げるに際して気を使って選別したアベルの心を示すことだと言えるでしょう。アベルが神に対する捧げものをどれほど大切に思っていたかをあらわすものだと思われます。一方で、カインのささげた物は、ただ「土地からの収穫物」

とだけとされています。特に選んだとかということは聞いたことがありませんでした。そして第二に、カインは理由を知っていました。アベルを殺す前に、神はカインに対して罪を犯さないようにたしなめたと聞きます。それからすると、当時はまだ神と人間との交わりが今よりもよっぽど近かったのかも知れません。それほどお互いに話せて、神が自分のささげ物を拒んだ理由を自らが知らなかったとしたら、間違いなくカインはそれについて神に尋ねたはずです。しかし、カインはそれについて何も言わず、ただ激しく怒り顔を

伏せたそうではありませんか。これが本当ならカインはその理由を知っていたはずです。そして第三ですが、不思議なことにこの場面でアダムがいません。神にいけにえを捧げることは聖なる大事な行為であったはずです。今となっては、その時の明確な決め事に関する内容は分かりかねますが、当時ははっきりしていたはずです。それをアベルは守ったけれどもカインは背いた。そしてその理由をカインが知っていたなら、当然その父であるアダムも知りえたはずです。もし彼らがいけにえを捧げる前にアダムが監督をして

いたなら、カインも正しいいけにえを捧げたでしょうから、兄弟の間でこのような悲惨な争いごとは起こらなかったかもしれませんが、不幸にもその場にアダムはいませんでした。これが最も大きな原因ではないでしょうか。当時の彼らが何歳だったかは知りませんが、あの事件の根本的な原因は利己的なカインにあったというよりは、アダムによる監督義務の不届きだったと思います。

シメオン　　：お前は、結局、これもまたアダムのせいだというのか。アダムってやつはろくな人間じゃあねえな。じゃあ、ノアはど

うだ。ノアは箱舟を造って自分たち八人家族だけ乗り込んだんだろう？たくさんの動物も載せたというが、獣なんかよりも一人でも多く人間を乗せた方がよかったんじゃねえか？箱舟と建てるのに120年もかかったんだって？そんな時間があったら…。

ユダ　　:神が世界を滅ぼそうと決心されたのは120年前であり、洪水が起きた時、ノアが600歳だったのは確かですが、かといって120年もの間船を造ったとは思われません。

シメオン　　:それはなぜそうなんだ？俺は、神が120年後に世界を滅ぼすと言ったと聞

いたぞ。

ユダ　　：神は、その言葉をノアに直接お話されたのではありません。それに、神がノアに箱舟の建設を命じたられたとき、すでに彼にはセム、ハム、ヤフェテの三人の息子がいただけでなく、三人とも結婚していました。長男セムは洪水の2年後に100歳であり、その時アルパクシャデを産んだと言います。洪水が起こった時ノアは御年600歳。長男セムは98歳です。つまり長男セムが生まれたのはノアが502歳の時だと言えるでしょう。502歳の時に生まれた息子が結婚しているためには、早くても20

年は必要でしょう。先ほど言ったように箱舟を命じられた時にはすでに三人の息子には嫁さんがいました。百歩譲って、仮に息子たちが三つ子だったとしましょう。その時点、神が箱舟の建設を命じた時点を無理を承知で見てみても、三つ子の息子たちが20歳ですべて結婚していたとして、ノアは522歳です。そしてノアが600歳に洪水が起きたわけでしょう？

レビ　:(シメオンを見て)ふむ。弟の計算が合ってるみたいだぜ。120年はおろか、80年にも満たねえじゃねえか、兄さん。

シメオン　:うむ。よし、まあ、そうだとしよう。だけ

ど、120年だろうが80年だろうがだ。それが果たして短いかってことなんだよ。俺が言いたいのはな、ノアは、自分の家族以外にほかの人間を乗せなかったんだろう？これを見てもノアがどれだけ利己的だったかわかるってもんだろう。

ユダ　：(シメオンに) 兄さん、それは兄さんが誤解されたようです。ノアが長い期間にわたって大きな船を建て、最後にその船に乗った人は、多くの動物たちを除くと、その家族にしかいなかったというのは間違いありません。しかし、それは、ノア自身の決断ではないんで

す。神はすべての陸の生物を絶滅させるおつもりでした。もちろん人間も含めてです。ただ、例外があります。神はその例外、つまり箱舟に乗る人まで指名しておられます。それは、ノアとノアの妻、三人の息子とその嫁の八人だけです。ノアが自分と家族だけを連れて箱舟に乗ったのは、利己的だからなのではなく、神の言葉を守った結果と見るべきでしょう。神が呼ばれていない者まで連れて行ったとしたら、それはアブラハムとロトのようになってしまっていたのかも知れませんね。

シメオン　　:アブラハムとロト？なんだ、そりゃ？

ユダ　　　：神はアブラハムに故郷の親戚や父の家を離れて神が命じる場所へ行くようにと言われました。ところが、アブラハムは、神が仰らなかった甥のロトを連れて行きます。その結果、どうなったのかというと、結局は、アブラハムとロトの間に争いがうまれ、二人は決別を余儀なくされます。それだけではありません。ソドムに入ったロトは拉致され、彼を救うためにアブラハムは300人を連れて行って戦争をする羽目になります。もしアブラハムが神の御言葉通り、ロトを連れて行かなかったならば、これらのことをする手間が省けた

はずでしょう。神には人を選ぶ権利もあれば、捨てるの権利もあられます。神が選んだ人を捨てることを不従順とすれば、神が捨ててしまった人を選ぶことも不従順と言えるでしょう。ノアは、神が捨てた人間を選ぶ不従順を犯したのではなく、神が捨てた人間を捨てた従順を選んだのです。それでもノアとその家族を置いて利己的だとすれば、ロト自身も利己的だと言えましょう。

シメオン　：そうだ。その通りだ。ロトも非常に利己的な人間だ。ソドムが滅びる時、ロトが連れてきたのが誰だ？自分と妻、そして二人の娘だけだった。その二人の

娘には婚約者も二人いたというが、ロトは婚約者たちを見捨ててきたんだろ？これもやはり、その、捨てる権利というやつか？

レビ　:ああ、オレもその話は聞いたことがある。でも、オレの聞いたところではロトが二人の娘の婚約者たちにも話をしたけど、冗談だと言って相手にしてもらえなかったらしいですぜ。

シメオン　:だとしてもひどいだろう。自分の娘のことを思うんなら置いてきたりするかね。

ユダ　:そうではありません。夜が明ける時、ソドムの滅亡を知らせに来た天の御使いたちはロトにロトの妻と二人の娘、

そして身内の者だけでなく婚約者も連れて脱出するように間違いなく言ったと聞きました。二人の御使いがソドムに着いたのは夕暮れ時だったというのに、ロトが脱出をしたのは夜が明けることだというではありませんか。彼がいくら呑気な人間だったとしても自分の住んでいる町が滅びるというのに眠ってしまったとは思えません。緊迫した状況にもかかわらず、それほど時間がかかった理由は、あるいは婚約者やほかの身内たちを説得するためではなかったのかとも思われます。しかし、時は流れて婚約者を初め、ほかの身

内たちは耳を傾けようとしなかったので、結局、彼らを連れて出て行くことということはできなかったのかも知れません。

シメオン　:その結果はどうだ？ロトの妻は塩の柱になり、ソドムの滅亡によって婚約者を失った二人の娘は父に酒を飲ませて、その子を身ごもったそうじゃないか。こんな馬鹿げた話があるか。これはすべて、その利己的なロトのせいだろ。

ユダ　:ロトの妻は御使いたちの言いつけを守りませんでした。神がソドムをなぜ滅ぼしたのでしょうか。神はソドムを滅

ぼす計画をアブラハムに語り、アブラハムはソドムに義人十人を見つけることができれば彼らのことを思って滅ぼさないように懇願しましたが、結局十人もいなかったということです。当時のソドムとゴモラは、何もかもが罪に染まっていました。その地で成し遂げた財があったとしても、それはまた、罪の中で得られたものです。だからこそ、神は最終的に、すべてのものを捨て、妻と娘二人だけを連れて脱出するように命じました。それだけでなく、罪の中で得られたすべてのものに対する未練をも捨てろという意味で後ろを振り

返らないようにと警告します。ところが、ロトの妻は…。そうですね。未練が残っていたのか…、もったいなかったのかも知れませんね。ロトはアブラハムと一緒にハランの地から出てきたのですが、ロトの妻はもしかしたらソドムで生まれソドムで育ったのかも知れません。だからこそ多くのものに対する未練、罪の中にいた未練を捨てきれずに、とうとう振り返ってしまった彼女は、神の警告に背いた結果として塩の柱となってしまいました。二人の娘も兄さんが言われたように、非常に嘆かわしいことになりました。その娘たちから生

まれたモアブやアモンの子孫たちも今、カナンの地に住んでいますが、彼らは私たちにとってよからぬ存在となることは明らかでしょう。

レビ　:よからぬ存在だと？それはどういうこった？

ユダ　:前にお話ししたように、神はアブラハムを呼ばれましたが、ロトは呼ばれませんでした。ところが、ロトを連れてきたばかりに、あらゆるよくないことが立て続けに起こりました。簡単なことです。ロトがいなかったら起こらなかったであろうことがロトによって起こったとしたら、それはすべて神が望まれなかったこと

であります。アブラハムがロトを連れて来なかったなら、ロトはソドムへ行かなったであろうし、ロトがソドムへ行かなかったなら夫人に出会うこともなかったでしょう。夫人に出会わなかったなら二人の娘は生まれなかったでしょうし、二人の娘が生まれなかったのなら、モアブとアモンは存在しなかったはずだからです。

シメオン　　：おい、ユダ。それはちょっと言葉が過ぎるんじゃねえか。モアブとアモンの子孫も結局は、俺たちと同じ血筋だろうよ。いつかは力を合わせて生きていくべきだというのが道理というもんだろ

う。

ユダ　　　：人間的に見れば、もちろんそうです。ロトの父であるハランとアブラハムとは兄弟関係にあり、ハランとアブラハムの父はテラですから間違いなく同じ血筋です。しかし、神の中ではそうではありません。神はアブラハムを呼ばれた時、大いなる民族とし祝福とされるという約束されます。ですが、神が望まなかったロトを連れて出て来た瞬間から苦難は始まりました。カナンの地に入ると神はアブラハムに対して、「私はこの地をあなたの子孫に与えよう」という一言だけをおっしゃいます。これは

祝福の言葉でしょうか？いいえ。祝福どころか、ともすればアブラハムにとって呪いの言葉にも聞こえます。よく聞いてみてください。「私はこの地をあなたに与えよう」ではなく、「あなたの子孫に与えよう」と言われたのです。だからこの言葉は、「私はあなたを呼ぶときに約束したように、大きな民族を成し、この地をあなたの子孫に与える。これは、すでに約束したことだから、そのようにするだろうが、私の命令に背いた（前を指で指し大声で）お前には与えないぞ！」という意味でなく、何でしょう。

シメオン　：おいおい、そりゃ、あまりにも飛躍のしすぎじゃねえのか？俺の知っている神はそこまで冷たくはねえよ。なあ、ユダ、さっきお前が言ったように、神はソドムにいたロトを救ってあげたんだぜ。それなのに、ロトを連れてきたからと言って、そこまでするかねえ。

ユダ　：聞いてください。先ほどお話ししたように、神が放った一言。この地をあなたの子孫に与えようとおっしゃった後に神は口を閉じられます。ベテルの東に行って祭壇を築き、神を呼んでも沈黙を守っています。ついにその地を深刻な干ばつが襲うと、アブラハムは約

束の地をさっさと捨ててエジプトへ行きます。そこでは、自分の妻サラをエジプトの皇帝に奪われそうになる危機に遭遇した時も、神は何も仰りませんでした。再び、ロトと一緒にカナンに戻ってきて、やはり先に祭壇を築いたところで捧げものを捧げながら神を呼んでも返事がありません。やがて、二人の財産が増えるに伴ってその地が窮屈になると二つの家の羊飼いたちがお互いに争いを始めます。仕方なく、アブラハムは甥のロトに別れることを提案し、その結果、ロトは当時まで豊かにだったソドム行きを選び、アブラ

ハムのそばを去りました。神はその瞬間をとても待たれていたように思われてなりません。アブラハムが神の命令に戻ってくるその瞬間、神に従うという地点へと戻ってくるその瞬間をじっと待っておられた気がします。そして、ついにロトがアブラハムのそばを離れるやいなや、神は沈黙を破り、アブラハムに語り始めます。それは以前のように「あなたの子孫に与えよう」というような冷たい言葉ではなく、とてつもない祝福の言葉、初めてアブラハムの耳に入ってきた、まさにその時の言葉、その声でした。神はアブラハムに東西

南北を見渡しなさい、見渡しているこの地を「あなたの子孫に」ではなく、見渡しているこの地をすべて、「あなたに！そしてあなたの子孫に！永久に！与える」と言われたのです。これを見ても神がどれほどアブラハムがロトと決別することを望んでおられたのかを知ることができます。神が御使いを送ってロトを救ったのも、彼が真の義人、ソドムの滅亡を防ぐに足る義人だったからではありません。ソドムの住人たちと比べたら、それは少しマシだったかは知れませんが、結局は神がアブラハムを考えて、神がアブラハム

を思う心があったからにすぎません。もし、ロトが同じ血筋だからと言って、彼の子孫であるモアブ族やアモン族とも一緒に暮らさなければならないとしたら、それは神がアブラハムを導かれた以前に戻ろうと言っているようなものです。

ダン　　: (ユダを見て) 兄貴、過去のことは水に流して、みんなで集まって住んじゃだめなのかな？やれアブラハムだ、ロトだ、イシュマエルだ、イサクだなんて言わずにさ。そうなれば、戦争もなく、お互い仲良くできるんじゃないの。

ユダ　　: (ダンの方を向いて)うむ。そうするこ

とができれば、どれほどいいだろうか。しかし、神の御心は明らかに違った。神が人間を創造されたとき、言われた最初の命令は「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。」であった。ところが、その昔クシュの息子ニムロデが人々を衝動してお互いに散らばらずに集まって暮らそうといって建てた町の塔がバベルだったんだ。そうしたら、神がどうされたと思う？お互いの言語を混乱させ、最終的に神のご計画通りに全世界へと散らせたんだ。神がこの世界を創造される時、すべてのものをお創りになっただけではない。最初に

光を創造された後、最初の日に光と闇を分けられ、二日目には、空と水を分けられ、三日目には陸と海を分けられた。だから、神は創造の神であると同時に、分けられる神、選別の神、区別の神だということだ。

シメオン　:じゃあ、神はアブラハムも区別されたというのか？

ユダ　:(シメオンの方を向いて)まさにその通りです。区別しようとされた神の御心に対してアブラハムは従順によって応えました。「カルデア人のウル」に住んでいたテラは、彼の息子であるアブラハムとハラン、アブラハムの妻サラと

ハランの息子ロトを連れてカナンの地に行こうとしましたが、どのような理由でか、その中間にある「ハラン」の地にとどまったのです。もしかしたら神はアブラハムを区別する前に、テラを先に呼ばれた可能性もあります。もしテラが神の言葉に従いカナンの地まで行ったとしたら、祝福は、アブラハムではなくテラが受けたかも知れませんね。しかし、テラは約束の地カナンにまで行かず、その途中のハランの地にとどまってしまいました。最初に従って信仰の種を植えたとしても最後まで耐え忍ばなければ何を刈り取ることができ

ましょう。結局、テラはハランの地で死に、神の祝福は、最後まで従ったアブラハムに与えられました。神はアブラハムを呼び出されるとき大きな民族を成すとおっしゃいました。この言葉は、それまでアブラハムが暮らしていた地から呼び出し、新しい民族を成そうとされる神のご計画だったんです。

シメオン　:おい、ユダ。神が新しい民族を成そうとされるのも結構だけどよ、どうもこのままでは新しい民族はおろか、俺たち兄弟が皆殺しだぜ。(レビを見て)よ、レビ。なんかいい方法はないもんか。

レビ　:兄さん、オレの力を知ってるくせに、

なんだよ。昔に比べると少し歳は食ったが、それでも、まだまだ負けねえよ。ここの警備兵の持っている剣を一本奪って、何人か殺ったあと、あの宰相とかというやつを人質にとってしまえば、こっちのもんじゃねえか。

ユダ　　: (シメオンとレビを交互に見て)に、兄さん！今、何を言ってるんですか！

シメオン　: (ユダに)え？どうした？お前はここで死にたいのか？(ヨセフがいた椅子の方を指して)さっき、あいつが言ってたことをお前も聞いたろう。俺たちを無理やり連れてきたと思ったら、いきなり回し者呼ばわりだ。殺す気、満々じゃ

ねえか。お前はこのまま、ここで野垂れ死にしてもいいって言うのか？

レビ　:ここでこのまま死んじまえば、残された親父やおふくろはどうなるってんだよ。どうせ死ぬんなら、黙って死ぬより戦って死んだ方がよっぽどいいじゃねえか。

ユダ　:(シメオンとレビを見ながら慌てる)お願いですから落ち着いてください！今すぐ我々を殺すとは言わなかったではありませんか。それに兄さんたちは、また殺人を犯そうというのですか。一度でも足りずに、二度もそのような恐ろしい罪を犯そうというのですか。

シメオン　：おい、なんだお前。親父はまあ仕方がないとしても、お前まで俺らを罪人扱いか？お前はディナがあんなことをされたのに、何もするなってことか？お前はディナが可哀そうじゃないのか。

ユダ　：兄さん、そういう意味じゃないでしょう。ヒビ人シェケムがしたことは許されない悪行中の悪行です。しかし、その裁きを私たちの手でするというのも正しいとは言い難いということです。神は私たちにシェケムに対する復讐やその町に対する裁きを命じられたことはありませんでした。彼らは己の過ちを謝罪し、自分たちと平和に暮らすことを

提案してきました。にもかかわらず、神の御心も問わぬまま、私たちの判断で彼らを無惨に殺害してしまいました。シェケムや彼の父ハモルだけではなく、そこに住む男たちをすべて皆殺しにしてしまったではありませんか。

レビ　:おい、ユダ！そこまで言うんなら、一つ聞こうじゃねえか。お前はそれじゃあ、あの異邦人たちと一緒に暮らすべきだったとでも言うのか？それがお前の言う神の御心ってやつなのか？言ってみろ、こら！

ユダ　:そんなことなど、私にわかるはずないじゃありませんか。しかし、いくら何で

も私たちの手を血に染めるというのは弁解の余地のない罪です。それに、私たちが選んだ戦略とやらは何でしたか。

シメオン　：おう。完璧な作戦じゃねえか。言ってやったさ。俺たちは、割礼を受けていない者に娘を与えることができない、あんただけじゃなく、あんたがたの町に住んでいる男のすべてが割礼を受けなければ一緒に住むことはできないとな。俺は正直、そういうとあいつらがあきらめると思ったんだよ。そうしたら、あいつ。ディナに完全に惚れちまったらしいな。いくら族長だといえども、本

当に全ての男に割礼を受けさせるとは思ってもみなかったぜ。こんな絶好のチャンスを逃す手はないだろう。割礼を受けた後、痛みが最も激しい三日目にレビと一緒に殴りこんで、シェケムとその父ハモルだけでなく、そこに住む男たちをきれいに一掃してからディナを救い出して来たんじゃねえか。おい、ユダ。これを何だって？罪だと？むしろ、兄として当然のことをしたまでだろうが。

ユダ　　　：兄さん、さっきも言ったではありませんか。彼らに対する裁きを、神が私たちに命じられたことがないということで

す。そして、私たちは、今おっしゃったように割礼を利用しました。割礼とは何でしょう。まさに神が契約の証しとして、私たちに許されたしるしではありませんか。ところが、その神聖なしるしを、私たちは、人を殺す方法として使ってしまいました。これは単にお二人だけの問題ではありません。私たち兄弟全員が彼らの返り血を浴びたも同然です。なのに、今になって、再び殺人をしようというのですか。兄さん、ここはエジプトです。大国エジプトです。そしてこの場所は、今、この国の皇帝のような方がいる場所なんです。あの徹底

した警備をご覧ください。彼らはシェケムのような田舎者とはわけが違うんです。

－ ユダの話の途中から徐々に幕が上がる。舞台の上には、先ほどのようにヨセフと通訳、そして警備兵が立っている。

レビ　　:ユダ、じゃあ、どうしろっていうんだ。ここで死のうってのか？

ユダ　　:(レビを見て)彼らがもし初めから私たちを殺そうとしたとしたら、わざわざここまで引っ張ってきたりはしなかったでしょう。宰相の言葉が本当なら、末

を連れて来させるはずです。理由は分かりませんがとにかく末を連れて来る方法を探さなければなりません。

ルベン　　：（むせび泣きながら）だめだよ。お父さんは、お父さんは絶対末を手放さないよ。無理だよ。ボクが言ったじゃないか。お父さんを知らないのか？あの子が死んじゃった時、お父さんがどうなったのか知らないのか？これはラケルの呪いなんだよ。あの子を殺しちゃったボクたちが天罰を受けるんだよ。ボクたちだけがここで死んで行くんだ。ボクたちだけが…。（むせび泣く）

ダン　　：（立ち上がってルベンに殴りかかる）

おい、この野郎！黙れってんだよ！

ナフタリ　:(急いでダンをつかむ)もう、兄さん、やめときなってば。

ダン　:あいつがしょうもないことばっかりしゃべってるからだろう！

ユダ　:(ダンを見て)静かにしろ！私の言うことが聞けないのか！(ルベンを見て)兄さん、何か方法があるはずです。そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。

ルベン　:そ、そう？そうか…。ああ…。ユダ…。ボクたち、生きて帰れるかな？

ヨセフ　:(立ち上がって警備兵に向かって)何をしておる！あの者(ルベンを指す)、いや、あの者(シメオンを指す)、

あの者を、あの者を直ちに牢に入れよ！

シメオン:お、おい、何するんだよ。放せ！放せってんだよ！

- シメオン、抵抗するが、連行される
- 兄弟たち、何かをしようとする者、追いかけようとする者、「兄さん！」「兄貴！」と叫ぶ者もいるが、結局何もできず、連れて行かれるシメオンを目で追っている

（前に立っていた警備兵1・2・3が、シメオンを連行して右側に退場しながら照明が暗くなる）

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

第二章　幕。

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com

第三章　苦悩

－ヤコブの苦悩

登場人物

ヤコブ

場所

ヤコブの家

– 照明はスポットライトのみ。

– 照明が明るくなる（または幕が上がる）

– 中央にヤコブが横（左右いずれも可）を向いて立っている。

（横を見て、息子たちに話をする）

はあ…。はあ…。ゴホゴホ…。はあ…。はあ…。雨が降らん。なぜ、雨が降らんのじゃ。穀物が穫れんではないか。あの土地を見てみろ。燃えるように赤く広大な大地を見てみろ。空から炎の塊が休みなく降ってくるようじゃ。アブラハムの神、イサクの神がどうして、このような試練をお与えになられるのかのう。

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

遠い昔アブラハムをお呼びになり、子孫に与えるとされた土地がまさにここではないか。カナンの地ではないか。祝福の地ではないか。約束の地ではないのか。じゃあ、なぜ、このように乾ききっておるのじゃ。どうして、このように草木が一本も生えない荒野と化してしまったのじゃ。

お前ら、また、食料が底をついてしまったのう。早うエジプトに行って来なけりゃならんじゃろう。ここで、あの雑草たちのように、私たちまで、干からびて死ななければならぬというのか。お前らも行って来たから分かっとると思うが、エジプトには食糧が有り余っているというじゃないか。肥沃な土地で人々が腹いっぱい食べ、喜び歌うそうじゃないか。

分からぬ。本当に分からぬ。アブラハムの神、イ

サクの神が私たちを騙したのじゃろうか。どうして祝福の地であるヘブライは飢饉に見舞われ、その異邦の地である神を知らないエジプトは穀物で溢れかえっとるというのじゃ。

お前ら、また行って来きなさい。金ならあるじゃろう。以前、穀物を買ってくるときにはどういうわけか、その費用がすべて荷物の中に入っていたというが、よもやお前らがまさか食料を盗んだわけではあるまい。ああ、信じる、信じるよ。この前は何か手違いがあったのじゃろう。今度行くときは前回分まで持って行くようにしなさい。こんな腹の足しにもならぬ金など、いくらでもくれてやるわい。

早う行って食料を買ってきなさい。それに、捕まっているレビ…、じゃない、シメオン、シメオンも連れて

来ないとな…。

　お前ら、今度行った時には変なまねをするでないぞ。一体、何をしでかしたら回し者呼ばわりをされるのかのう。これこれ、何もなかったわけがないじゃないか。エジプトがどんな国なのか、お前らもよく知ってるじゃろう。エジプトにはこの世の富と栄華すべてがあるようだと言っておったではないか。

　早くいっておいで。ほら、早く…。そうだよ、レビ…いや、シメオンだったな？さっき言ったではないか。そう、シメオンも忘れずにつれて来るんだよ。

　何？なんだと？ならん！ならんと言ったらならんのじゃ！お前らはどうしてそう、聞き分けがないのじゃ。この老いぼれに何度、同じことを言わせれば気が済むのじゃ。お前ら、わしはもう今年で百三十だ。

そんなに死んで欲しいんか。この老いぼれを苦しめて、そんなに早くくたばって欲しいんか！ゲホゲホ…。はあ…。はあ…。

（正面を向く。観客に語り掛ける）

ここに集まっておる、みなさん。今日は一つ、この老いぼれの愚痴でも聞いてくだされ。まあ、それほど時間は取らせません。

ああ、私が何の過ちを犯したというのでしょう。神はなぜ、このような苦難と試練とをお与えになるのでしょうか。祖父アブラハムには「約束の神」、「備えられる神」であられました。父イサクには「そそがれる神」、「与えられる神」でありました。じゃが、どうしてこ

のヤコブにだけは「薄情な神」なのか、「奪われる神」なのか分かりません。

　父イサクが我々兄弟を得たのは六十の時でした。まあ、老年でしたが、その父アブラハムがイサクを得たのが百歳だったことを考えると四十年も早かったと言えるでしょう。

　私が生まれる前の話を母リベカから聞いたことがあります。双子の兄エサウとともに胎内にいたときのこと、私たちは母のおなかの中で昼夜を問わず争ったと言います。苦しむ母を見かねて父イサクがお祈りをささげると、神は面白いことを言ったそうですな。リベカのおなかの中には二つの国民がいる、とおっしゃったそうです。二つの国民、二つの国民…。ハハハ。二つの国民ですと！

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

神という方は元々、大げさにおっしゃることを得意とされているのか、あるいは、私どもの家柄なのかは知れませんが、何かにつけ大げさにいう癖があるようで、私にはどうも、それが気に入りません。

私が十五の時に亡くなった祖父アブラハムも、やれ民族だ、やれ子孫だ、という言葉をよく口にしとりました。神はアブラハムの子孫を夜空の星のように、海辺の砂のように、大地の塵のように増やしてやるとおっしゃったとか。これと同じ話を父イサクも神から聞いたことがあったそうです。

しかしねえ、ただ一つ、確かなのは、祖父アブラハムは百七十五年の人生の中でイシュマエルとイサクを得ただけであり、十年前に百八十歳で亡くなった父イサクは私とエサウを得ただけだということなん

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

です。

夜空の星？海辺の砂？なるほどね。ふん！

私の兄弟が生まれた日、私より間一髪の差で先に生まれたエサウは、その時からすでに肌が赤かったとか。それに毛深かったということから、名を「エサウ」と付け、私が生まれてくるときには、先に出て来たエサウの、足のこの、（自分のかかとの部分を指す。片足で立って指しているので不安定）かかとの部分をつかんで出て来たとして「ヤコブ」という名になったと聞きました。

私がなぜ、かかとをつかんだのか、母の体から出てくるときに何があったのかまでは知る由もありません。ただ、今も時々夢を見ます。とても焦っている夢です。おなかの中での長い争いは、まさしくその瞬

間のためのものだったようです。私は暗闇の中から一筋の光に向かって、もがき苦しんでいます。そして、どこからか、いいえ、私の胸の奥の方から大きな声が聞こえてきます。

　たたずんではならぬ！とどまってはならぬ！腕を伸ばせ！その手でつかめ！

　いつも、そこで夢から覚めるんです。心臓は激しく胸を打ち、全身汗だくです。そして、何かをつかみ、思いっきり引っ張ったような感覚が、この右手に生々しく残るのです。笑われるかもしれませんが、それは間違いなく百三十年前、私が生まれ落とされる瞬間の記憶のように思われるんです。

　（上を見上げ、右手を挙げて叫ぶ）

　たたずんではならぬ！とどまってはならぬ！腕を

伸ばせ！その手でつかめ！

　この声は一生、私に付きまといました。もしかしたら、父のことを快く思っていなかった母リベカの影響が大きかったのかも知れませんな。今、思えば、母は何をするにも常に積極的でした。

　お二人の馴れ初めはこうです

　父の結婚相手を探すため祖父アブラハムは信頼のおけるしもべをご自分の故郷であるアラム・ナハライム、またの名をメソポタミアと言われるところに遣わしました。彼が着いた頃は夕暮れ時だったそうです。ラクダたちを連れて町の外にいると、丁度、女性たちが水を汲みに井戸の方へと出て来たそうな。

　その時、このしもべはこう祈りました。主よ、水を汲みに来る女性に、水を飲ませてくれと言ったとき、自

分だけでなくラクダたちにまで水を飲ませる人がいたら、その女性こそ神が主人の息子、イサクの妻として選ばれたと信じます、というものでした。

　これは実に無謀とも言える祈りなんです。当時、このしもべが連れて行ったラクダは十頭にもなったんです。みなさん、女性の力だけでそれだけのラクダに水を飲ませるということが、どれだけ大変かご存知かな。それもただのラクダじゃない。何日も何日も荒野を歩いて、のどがカラカラに渇いたラクダ、そんなラクダが十頭じゃ。

　このラクダどもに水を飲ませるというのは大の男でも骨の折れることだったでしょう。間違いなく相当な労力と時間が必要だったはずです。そんなことをしてくれる女性がいるはずないじゃありませんか。

ところがね、どういうわけか、いたんです。そのような女性がいたんですよ。まさしく未来の我が母であるリベカだったんです。母はこのように、たたずんでいる人ではありませんでした。とどまってもいませんでした。動いて、腕を伸ばし、その手でつかむような方だったんです。

母がラクダと井戸との間を何度も何度も行ったり来たりしながら悪戦苦闘をしているのを、このしもべはじっと見ていたんですな。本当にその女性が主人の息子イサクの結婚相手として神が選ばれた人物なのかどうかを見極めたかったのでしょう。

とうとうリベカは最後までやり遂げました。しもべが彼女にどこのだれかと尋ねると、その答えを聞いて驚きました。祖父アブラハムの弟ナホルの息子ベト

エルの娘だというじゃありませんか。簡単に言うとイサクのお父さんの弟の息子の娘というわけです。等親で言うと五等親。もっと簡単に言うと、まあ、結構近い親戚ということですわ。皆さんには分かりにくいかも知れんが、これは奇跡のようなことなんですよ。アブラハムが息子の嫁さんを探すためにはるばる自分の故郷までしもべを送ったのは、異邦人ではなく、なるべく自分と近しい人物を探すためでしたのに、近いどころか親戚を探し当てたのだから、こんなうれしいことはない。

　祖父アブラハムのしもべは自分がそこまで来ることになった経緯を詳細に述べました。これを聞いた彼女の父ベトエルと、憎き…、いや、この時は私は生まれてもいませんでしたから、まだ憎いも何もない

のですが、ま、とにかく彼女の兄ラバンがその場で結婚の承諾をしました。それこそとんとん拍子です。しかし、だからと言って、あ、そうですかとついていく女性がどれほどいるでしょうか。彼女は結婚する相手はもとより、その両親にすら会ったことがないんです。にもかかわらず、さすがはリベカ、あっぱれです。すぐ、次の日には、アブラハムのしもべと一緒に旅立つと言い放ったんです。このように我が母リベカは、何においても積極的でした。まあ、変わった女性だったとも言えるでしょうがね。

　そんな母がイサクを快く思うはずがありませんでしょう。イサクは争いを知らない人でした。抵抗というもの、欲というものを知らない人でした。よく言えば、おとなしい羊のような人柄とでも言いましょうか。

それもそのはずです。父は生まれてからというもの、苦労を知りませんでした。祖父アブラハムはカナンの地に留まる間、日々豊かになっていったのです。祖父が百歳の時に得た独り息子イサクには競争相手がいなかったので、何の欲もなく、ただ与えられたものに満足し、豊かさを享受しながら生きていくことができました。

しかしねえ、みなさん。人生、そんな甘いもんでしょうか。そんなことで、どうやってたくさんのものを得ることができるでしょうか。もう少し努力すれば、もう少し頭を使えば、父はもっと豊かになることができたんです。ところが、父はただじっとしているだけです。まったく努力をしない。

ある日、父が井戸を掘ったことがありました。ところ

が、近隣の者たちが来て、その井戸をよこせと言うんです。皆さんはそういう時、どうしなければならないと思いますか？そうです。戦わなければならぬ。争わなきゃならんでしょう。何があっても守り抜くべきでしょう。退けなければなりません。当たり前です。しかし、父はこれを差し出したんです。それも、ただでやってしまったんです。そして、別の場所で井戸を掘りました。そうしたら再び隣人の者たちが来て喧嘩を仕掛けます。その井戸をまたよこせと言ってきたんです。ここまで来たのなら、戦うだろう。堪忍袋の緒が切れるだろうと思っていました。ですが、父はまたもや渡してやったんです。苦労して、汗水流して掘った井戸をみすみす他人に一度ならず二度も渡してしまったんですよ。母はこれを見て、大変怒ってい

たのを覚えています。

　私はそんな生き方はしません。自分のものを自分のものだと堂々と主張し、自分の権利はしっかり守りながら生きて行こうと決心しました。たたずまないつもりでした。とどまらないつもりでした。腕を伸ばし、手でつかんでみせるつもりでした。

　それでは、何をつかまなければならなかったでしょうか。金？財産？そんなものは既にあります。欲を知らない父親が、あちこちに分け与えはしましたが、それでも十分すぎるくらいアブラハムは遺産を残しました。それに、金や財産を欲しがるというのも愚かで幼稚な話です。ましてや、神を信じる者としては、あまりにも小さすぎる欲です。それはまるで、あの木に付いた果物をむさぼるようなものしかありません。

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

果物一つ？木の実一つ？そんなものなどは、すべてあの無知なエサウに上げてやっても惜しくはありません。私はその果物や実の付いた一本や二本の木なんかではなく、その木が植えられている森を、その森で満ちている山々のすべてを手に入れてやろうと思ったのですよ。

　このヤコブは家の中に転がっている金やケチな家畜などで満足するような器ではありません。何よりも私が欲しかったのは、それ以外のすべて！父の持っているすべてを、私のものにしようとしました。

　そのためには相続権を得る必要があります。わずかな差で二番目に出て来た、たったそれだけの理由で、すべてを失ってしまうわけにはいかんでしょう。他のものはいいとしても、エサウに相続権だけは奪

われたくはありませんでした。神の系図を汚すことはできません。アブラハムの神、イサクの神につながる祝福の系図は、エサウの神ではない、何があっても、このヤコブの神にならなければならんのです。ただ、それだけが私の生きる道、私が祝福を受けられる道だったのです！

（咳き込む）

ただ、それだけが、私の目標であり、ただ、それだけが、神の祝福を受けられる道だったのです！

（再び激しく咳き込む）

（のどの調子を落ち着かせる。この時に備えて飲み水などを用意しておくのも可）

ああ、長男。ああ、長子の権利。私が生まれた時から、あれほど望んでいた長子の権利を、あいつは、

肌の赤い、毛むくじゃらで獣を追いかけまわることしか能のないエサウは、私がどんなにもがき苦しんでも得ることのできない長子の権利を、何の努力もせずに自分のものにできたんです。

　あんなやつに長子の権利など贅沢だ。無用の長物。高価な真珠を豚の前に投げてやるようなものです。わたしは、チャンスを狙っていました。ああ、本当に長かった。そして、とうとう、その時が来たんです。

　いつものように朝食を終えた後、エサウは狩りに出かける支度をしていました。父は長男としての責任を忘れずに、どこへ行っても体に気を付けるように言っていましたが、彼はいつもどこ吹く風でした。

　狩りを終えて帰ってくるとき、彼は決まって腹を空

かしていました。彼が戻ってきたら家の納屋を開けては飢えた獣が餌をむさぼるように、食べ物を平らげていました。

私は彼が狩りを終えて家に帰ってくるところを狙いました。そして、彼の最も好きな色で作られた食べ物をこしらえたのです。そうです。エサウの好きな赤いレンズ豆の煮物です。

あの日、私は真っ赤なレンズ豆の煮物と出来立てのパンとを作り、風上の方に陣取り、エサウの帰りを待っていました。遠くからでもにおいを風に乗せ、彼の食欲を刺激するための知恵でした。どうです？我ながら素晴らしい作戦でしょう？あの鈍いおつむで、このヤコブに追いつこうなんて到底無理な話なんです。

案の定、彼は罠にかかりました。その日は特に疲れていたのか、並べた食べ物が何だったのか、どんな味だったのかも知らなかったようです。遠くからにおいを嗅ぎつけ、急ぎ足で来たと思ったら、私に向かって「その赤いもの」を食わせてくれとせがんできました。

　内心、胸が小躍りしました。

　おう、食わせてやる、食わせてやるとも。お前に食わせるために作ったんだよ。ですが、ここは大事な場面です。落ち着かなければなりません。そんなことはおくびにも出さず、私は努めて平気なふりをして、静かに言いました。

　兄貴、もちろん差し上げますとも。誰よりも大事な兄貴のお願いなのに差し上げないわけがないでは

ありませんか。ですが、私も一つだけお願いがありますが、聞いていただけますか。

　本来、気が短いエサウです。お願いだろうが何だろうが、早くその赤いのを出せと、騒いでおります。私は動揺せず、一つ一つ冷静に言葉を選びました。ここでしくじるとすべてが水の泡です。

　兄貴、ここにパンと煮物があります。いくらでも差し上げます。ただし、兄貴が持っている長子の権利を私に売ってください。

　すると彼は言いました。

　長子の権利？オレは今、腹が減って死にそうなのに、腹の足しにもなんねえ長子の権利がなんだってんだ。

　ここで安心してはいけません。チャンスは一度きり

です。念には念を押す必要があります。私はもう一度確認しました。

兄貴、長子の特権をヤコブに売ると誓ってください。

予想通り彼は怒りだしました。ああ、誓う、誓うよ。長子の権利なんてお前が持ってけ。だから、早くそれをよこせってんだよ。

その瞬間、私はどれほど嬉しかったか知れません。パンや煮物を放り出して走り回りたい気持ちでした。しかし、落ち着かねばなりません。慎重に事を進める必要があります。エサウが私に長子の権利を売ったのですから代金を支払わなければなりません。もし、そうしなかったら契約自体が成立しないからです。私が彼にパンと煮物を渡して初めて長子の権利を

得することができるのです。

　私は新鮮な焼き出てのパンと真っ赤なレンズ豆の煮物を丁重に差し出しました。エサウは私の気持ちも知らず瞬時に平らげたと思ったら感謝の言葉もなく消えていってしまいました。

　ああ、ヤコブ。そうです。私の名前はヤコブ。かかとという意味です。エサウから長子の権利を奪うため、胎内から出てくるときにつかんだ、彼のかかとから付けられた名前です。そのヤコブがついに志を遂げたのです。生まれたときから渇望していた夢をようやくかなえたのです！

　だからといって何かがすぐに変わるわけではありませんでした。依然として父はエサウを愛し、彼の獲ってきた獲物を好んで食べました。これを、エサウが

父を愛していたからだとは考えられません。彼が愛したのは狩りでした。彼が愛したのは自分自身でした。そうだ、そういえば彼が愛していたのがもう一つありました。

　父イサクはエサウが長子の権利を私に売ったという事実を知らずにいました。それは、エサウがその事実を父に知らせなかったからでもありました。私だって野暮ではありません。そんなことを父に話す必要など全くなかったのです。権利の譲渡は父の承認が必要なのではなく、エサウの愚かな選択によって既に成就されたからなのです。

　父はずいぶん前からの結婚について考えました。私たちは双子の兄弟でしたから、私も当然エサウと同い年だったのですが、父は自分が愛するエサウ

の結婚を優先していたようです。父の頭には、母を得た年齢である四十歳を念頭に置いていたようでした。私たち兄弟が四十になる年は、父イサクが百歳を迎える年でもありました。祖父アブラハムを慕った父は母リベカを得たときに倣ってエサウの奥さんを見つけようとしました。

　ハハハ。ところが、この愚かなエサウがしでかしたことと言ったら。

　彼は父の願いを無視したまま、アブラハムの故郷であるアラム・ナハライムではなく、ヒッタイト人の女を愛し、結婚までしてしまったのです。それも、二人の妻を一度に迎えたのです。何と無知な行為なのでしょう。神がアブラハムを選び出し、成し遂げようとされるご計画を知りもしないで、ただ目先のことだけ

しか考えない人間です。その名もエサウ！これによって父と母はどれほど失望したことか。けれど彼はそんなこと、お構いなしです。彼が親思いだというのも嘘で、長子としての資格があるというのも嘘、ましてやアブラハムの祝福を継いでいく力があるというのも嘘です。彼は所詮、世俗的で愚かな人間でした。彼が愛したもの、狩り、自分自身、そして異邦人の女たち。一方で、彼がないがしろにしたものは「神」でした。神がアブラハムと交わされた祝福の約束はこのヤコブを通して成し遂げられるべきなのです！

父の体は少しずつ衰弱してゆきました。年々歳をとるから当然と言えば当然でしょうが、目がよく見えなくなったときにはご自身も驚いたようです。遠いところはもちろんのこと、最近は近いところも見えづらく

なったと言っていました。丁度その頃、母から衝撃的なことを聞かされました。目の力が衰えて本人も先のことが心配になったのでしょうか。その日の朝、父がエサウにこんなことを話したそうです。

今日は狩りをしてから、私の好物である料理を作ってくるように。私はこれからどれくらい生きられるかわからないので、それを食べてからお前に最後の祝福をしてあげよう。

これには驚きました。「その手があったか」という思いです。最後の祝福。皆さん、最後の祝福とは何だと思われますか。そうです。これはまさしく遺言です。間違いなくエサウに長子としての祝福、長男としての祝福、つまり相続人としての祝福をしてやろうと言っているようなものなのです。

お父さん、今、何をおっしゃっているんですか。エサウはすでに長子の権利をこのヤコブに売ったんです。彼にはもう何の権利も能力も資格もありません。お父さん、お忘れですか。お母さんが我々兄弟を身ごもった時、神様が何とおっしゃったのか。

　「一つの国民は、もう一つの国民より強く、兄が弟に仕える。」

　このような神のメッセージをお聞きになったと、お母さんに話されたそうじゃありませんか。しかし、あなたは最後までこのことを我々兄弟には隠していました。その理由は何でしょうか。神の御心に抗い、ご自分の考えを優先させ、無理やりエサウを長子として立てようとしているからではありませんか。

　あなたが愛したエサウをごらんなさい。彼は神の

ご計画を知りません。知ろうともしません。アブラハムとの約束も知りません。神もエサウを憎んだはずです。彼のいる場所は荒れ果て、彼の相続地は獣の住処にでもなればいいんです。ヤコブは、エサウより強く、エサウがヤコブに仕えるべきなのです。神はこのヤコブを愛しています。このヤコブこそ神の約束を受け継ぐ人間だということが、なぜ、わからないのですか。なぜ、認めようとしないのですか。

　すぐにでも父の前に駆けつけて私の思いをぶつけてやりたいと思いました。

　すると胸の奥から、またもやあの声が聞こえてきたのです。

「ただずんではならぬ！とどまってはならぬ！腕を伸ばせ！その手でつかめ！」

母は私にこんなことを言い出しました。自分が呪われることになっても祝福は私が受けるべきだと。母は話をつづけました。父は目がよく見えないから、お前が代わりに祝福を受けろとのことです。

正直、困惑しました。考えてみてください。私は祝福は欲しいが、呪いはご免です。それまでの人生で、得をすることはしてきましたが、少しでも損をするかもしれないことは極力避けてきました。ですが今回、もし万が一これが父にばれてしまったら、祝福はおろか呪われてしまうかもしれません。私にはできません。無理です。このヤコブは人生を棒に振ることはできません。

ああ、もう五十年も経つというのに、未だにそのことを考えると、冷や汗が出てくるようです。いくら目が

よく見えないと言えども、丈夫な体格に毛むくじゃらのエサウと、小柄でなめらかな肌の持ち主である私とでは、あまりにも違いすぎます。それに、なによりも私は、父の好きな料理を作ることができません。

しかし、母は強気でした。このことよって、呪いを受けるようになることがあれば、その呪いはすべて自分が受けるから、ただ自分の言うとおりにすればいいと言って聞きません。そして中からエサウの服を持ってきて私に着せて、体にエサウのにおいが付くようにしたあと、手と腕には羊の毛皮を巻き付けて毛が生えたように見せかけます。そして、私にヤギ二匹を連れてくれば、料理を作るから、それを持って行けと言うのです。

みなさん、こういうのを見ると、誠に持って女性の

強さは想像を絶します。遠い昔、アラム・ナハライムの井戸べで十頭のラクダに水を飲ませていた当時の母の姿を見るようでした。

　母が作ってきてくれたヤギの料理を持って父のいる部屋に入るとき、私の手は震えていました。頭と体は全身汗だくです。よく考えてみると体臭や腕毛は服と羊の革でごまかせますが、声はどうしようもないではありませんか。

　お父さん…と静かな声で呼ぶと、少しいぶかしげな顔をします。そして目をこちらに向けたのですが、その時どれほど震えたか想像がつきますでしょうか。

　父は尋ねます。

　おう、私を呼ぶお前は誰だ。

　もう、後戻りはできません。私は決死の覚悟で申

し上げました。

　エサウです。お父さんの長男、エサウです。言いつけ通り狩りで仕留めたヤギで好物の料理を作りました。どうぞ、お召し上がりください。

　しかし、父は依然として疑っている様子です。声も声だが、狩りして料理をしたにしてはあまりにも早すぎたからでした。知ってはいましたが、だからと言ってぐずぐずしている余裕はありません。チャンスは一度限り。この機会を逃すと、もう二度と来ないからです。父は私の腕を触りました。声はヤコブだが腕はエサウだ、と言いながら繰り返し腕を撫でまわします。私はすぐにでもエサウが入ってくるのではないかと恐怖に震えたましたが、すでに取り返しのつかない状況まで来てしまいました。このまま押し進めるしか

ありません。やっと父は納得してくれたようで、私が持ってきた食事をすべて食べ終え、最後に差し上げたワインまでもすべてきれいに召し上がりました。

　そして、ついに私は祝福、父イサクの最後で最大の祝福をいただきました。私はその祝福の言葉を今でも一字一句すべて覚えることができます。

　「神がおまえに天の露と地の肥沃、豊かな穀物と新しいぶどう酒を与えてくださるように。諸国の民がおまえに仕え、もろもろの国民がおまえを伏し拝むように。おまえは兄弟たちの主となり、おまえの母の子がおまえを伏し拝むように。おまえを呪う者がのろわれ、おまえを祝福する者が祝福されるように。」

　ああ、この世にこれほど美しく、これほど偉大なる祝福がありましょうか。長子の権利を譲り受けたヤコ

ブは、今や名実ともにアブラハムの子孫、イサクの約束をを受け継ぐ人物に生まれ変わったのです。これで、私は祝福の人、これで、私は契約の人、これで、私は正真正銘の神の人となったのです！

　興奮冷めやらぬままの状態で父の部屋から出ていくやいなや、すぐにエサウが入ってきました。それこそ間一髪の差です。

「お父さん！エサウです！父の誇り、父の長子エサウが来ました！今しがた狩りをしたヤギで作った私の手料理を召し上がって下さい。そして私に祝福してください。思う存分祝福して下さい！」

　後ろで力強い声が聞こえてきます。私はここまで聞いてから夢中で走りだしました。次に起こることは十分想像できたからです。彼は既に祝福を失いまし

た。奪われたんです。私は長子という名分と祝福という実利をすべて得ることができました。エサウは敗者よ、ヤコブは勝者です。もう誰にも取り消すことはできません。覆すことはできません！

　しかし、多少計算違いがありました。もし、エサウがこれに気づいたとしても、煮物一杯で長子の権利を売ったあの時のように、またすぐ忘れてしまうと思っていました。なのに、今回は違いました。母が慌てて私のところへ来ると、今すぐ逃げろというのです。何事かと尋ねるとエサウが私を殺すと言って探していると言うではありませんか。正直エサウがここまで怒るとは思いませんでした。これは母も同じだったでしょう。ですが、今はどうにもなりません。止めることもできません。

母は父に会った後、自分の故郷へ逃げるよう言いました。そして、エサウの怒りが収まり、ほとぼりが冷めたころ呼び戻してくれるとも言ってくれました。いくら何でも父をだました手前、会うというのは気が引けました。全てが露呈したとなれば、今度こそ私が呪いを受けるかも知れないではありませんか。私はこのまま出ていくと言いましたが母は聞きません。大丈夫だから一度だけ会ってくれと頼むのでありました。

　最後に旅立つ前、父と話す機会がありました。不安がる私を見る姿は、すべてを諦めたような気がしました。おそらく、いつかはこうなるかも知れないということを、うすうす感じていたのではないでしょうか。父は私に言いました。

　お前は、アブラハムの故郷であり、母の故郷であ

るアラム・ナハライムのパダン・アラムへ行って、母の兄であるラバンを頼りなさい。そしてラバンの娘たちの中から妻を迎えること、決してここカナンの女ではなく、ラバンの娘たちの中から妻を娶るようにと釘を刺しました。そして呪いの代わりに再び熱い祝福、アブラハムに与えた祝福が共におられるように、繁栄して大きな民族をなすように、アブラハムに許された土地が与えられるようにと願ってくださいました。

　家を出るとき、私は父を振り返りました。いつまた帰って来れるか、わからなかったからです。しかし、父ではなく母にもう一度会っておくべきでした…。それが、母を見た最後の日だったからです。

　高齢とまではいかないにしても私は既に七十七。十四年前にこの世を去ったイシュマエルが百三十

七年を生き、アブラハムが百七十五年の生涯を送ったことを考えるならば七十七歳はそれほど若い年齢はありません。一家の主（あるじ）として家庭を築いてもおかしくない歳なのに、夜逃げ同然に自分の家を追われ、見知らぬ場所に向かっている自分自身が情けなく思えてなりませんでした。しかし、これは一つの通り道だと思うことにしました。祝福に至る通り道だと信じることにしたのです。それなら、耐えねばならないでしょう。耐え忍ばなければなりません。アブラハムの故郷に向かう道のりは祝福に至る過程だと固く信じて一歩ずつ踏み出しました。

　どれほど歩いたでしょう。伯父ラバンの家にたどり着くと私を喜んで迎えてくれました。嬉しさと同時に悔しさも込み上がってきたのか、その時は涙が止ま

りませんでした。私は一ヶ月間、その家に滞在しながら、伯父の仕事を手伝ってあげました。

　私を哀れに思ってか、いくら親戚間であっても、ただ働きをさせることはできないとし、私に報酬を決めるように言ってくれました。丁度その時、私の頭の中には、父の言葉が浮かんできました。カナンの娘たちではなく、伯父ラバンの娘たちの中から妻を迎えるようにという言葉です。彼には当時二人の娘がいました。姉はレア、妹はラケルでありました。ああ、ラケル。彼女は本当に美しかった。パダン･アラムに到着して最初に彼女の顔を見た瞬間、私は年甲斐もなく一目惚れをしてしまいました。野原で羊を従える彼女の姿は一枚の絵のようでした。

　家畜や富は、この世界のどこへ行ってもあります。

しかしラケル、その美しい少女ラケルがいるのは、ここだけです。私は迷わずラケルを妻として迎えられるようにお願いしました。私が伯父の次女ラケルのために七年間仕えることを申し出ました。金銀を要求すると思っていた伯父は驚いた様子でしたが、君と私は血を分けた同じ家系なので、私の娘を他人に与えるよりも良いとして、快く承諾してくれました。

それから私は毎日が楽しみの日々でした。この歳になるまで恋心を抱いたことのない私でしたが、初めて女性を愛したのです。愛とは全く不思議です。仕事がどんなに大変で苦しくとも、こんなに喜びで胸がいっぱいになるとは。夕方に仕事を終えて疲れた体を横たえる時ですら、朝を待つことは、とても楽しくおもえました。翌朝になると、その分ラケルに近

づいていくことだから、楽しくないはずがありません。

その時までも伯父ラバンは非常に良い人だとばかり思っていました。しかし、それはラバンとの悪縁の始まりであったのです。

私は一日も欠かさず一生懸命に働きました。必死に仕事をしました。伯父のためではなく、ラケルのための仕事だと思って献身的に励みました。そして約束した七年が経ち、私はラバンにラケルと結婚させてくれることを要求しました。ラバンは、もうそんなに経ったのかと言いながら、周囲の人々すべて集めて宴会を催してくれました。

実に久しぶりに味わう楽しい日でした。実家にいるときのことを思い起こせば、いつも父は長男という理由で、何かというとエサウを立てました。すべての

宴、すべての行事において、その中心には、父とエサウがいました。母と私はそのそばを守りながら雑務をするのが常でした。しかし、その日の宴は、私が主人公でした。ラケルを迎える新郎ヤコブがその宴の中心にいたのです。皆が私を祝ってくれました。誰もが私と喜びを共にしてくれました。

　喜びとワインに酔ったからでしょうか。床に横たわると私はいつの間にか深い眠りの中へと落ちていきました。生まれて初めて女性を抱いたようでしたが、記憶もおぼろげです。それでも私は喜びに満たされました。世界で最も美しいラケルを得ることができたからです。いや、できたと思ったからです。

　ところが、これは何ということでしょうか。朝起きてみると、私のそばに横たわっていたのはラケルでは

なく、その姉のレアだったのです。彼女は視力が弱かったので誤って自分のベッドと間違って寝ていたのかと思いました。しかし、そうではありません。伯父ラバンが私をだましてラケルの代わりにレアを隣に寝かせたのです。

　ラバンは悪い人です。こんなことってあるのでしょうか。過ぎ去りし七年は誰のための歳月だったというのでしょう。今まで他の者を知恵でやっつけたことはありますが、このようにやられたのは初めてです。

　私は煮えたぎる怒りを抑えられませんでした。我慢できませんでした。私は抗議しました。このように憤りを露わにしたのは生まれて初めてです。

　一方、ラバンはケロッとしています。その地では姉より妹を先に嫁に出す習わしはない、だから姉のレ

アをまず抱かせた、というのです。だったら、それをなぜ今になって言うのでしょうか。なぜ七年前に言ってくれなかったのでしょうか。

ラバンは言葉を続けます。心配するな。ラケルもやるともりだ。しかし、一旦はレアと七日間を過ごすように。その後でラケルもやるので、また七年間、自分のために働けと言ったのです。彼は一体どういうつもりなのでしょうか。最初の七年はレアのためではありません。ラケルのための七年でした。ところが、レアも与えてラケルもあげるから、もう七年仕えろと言うのです。

みなさん、本当にとんでもない話ではありませんか。私はラケルだけを愛しています。これからラケルのために七年間仕えろと言うのなら、今まではレア

のための七年間だったとでも言うのでしょうか。レアを得ようとする気は微塵もありませんでした。私は怒りをラバンにぶちまけようと思いました。あなたは嘘つきだ。ペテン師だ。私の七年を返せ。返せと言ってるんだ！

しかし、私にはできませんでした。私がラバンに食って掛かっている間、あそこの隅に座って頭を下げたまま音もなく泣いている人がいたのですが、他でもないレアでした。彼女に何の過ちがありましょうか。レアが先に私を騙そうとしたのではありません。すべてが自分の父ラバンが仕組んだものであり、レアはただそれに従っただけです。既に私と一晩を過ごしたので、私が見捨てれば彼女は行く当てもありません。

わかりました。いいでしょう。そうしましょう。私はラバンの提案を受け入れました。まあ、このままそこを出ていくとしても、私には何の財産がありません。寝食以外は唯一ラケルのために報酬もなく七年間仕事をしてきたので、このまま出て行ってもまともに家族を養える術もありませんでした。私はラケルを忘れたことは一度もありませんでしたが、姉のレアのことを考えると哀れに思われました。ラバンはレアを侍女シルバと一緒にくれました。私はレアを慰め、約束どおり七日間を彼女と一緒に過ごすこととしました。

内心、不安ではありましたが、幸いなことに七日後ラバンはラケルを侍女ビルハとともにくれました。ああ、ラケルとの結婚生活は実に楽しかった。すでに年齢は八十を越しましたが、このように美しい女

性を妻に迎えることができたことを神に感謝いたしました。

　私は子供を望んでいました。子孫を望んだのです。神が約束された祝福の言葉だけを信じて、ただ待つだけだったアブラハムやイサク…。彼らがもう少し自分で努力をしていたのなら、より多くの富とより広い領土を手に入れることができただろうに、それをしないで、ただ待つだけでした。子孫もご覧ください。アブラハムはイシュマエルとイサクのみ、イサクは私とエサウの二人を得ただけではないですか。これでどうやって夜空の星や大地の塵のように多くの民を成すことができるでしょうか。

　それはそうと、妙なことです。私はラケルをより愛しましたが、かえってレアを通じて息子を得ました。そ

れも、年子でです。最初の息子ルベンを得たときの喜びを、私はまだ忘れられません。神との契約が遂に始まる瞬間です。それから、シメオン、レビ、ユダを得ました。これだけでも、祖父アブラハムや父イサクが得た祝福の二倍です。これこそがまさしく、このヤコブが生きていく方法、祝福を受ける生き方だったのです。

　こうなってくると、さすがにラケルが妬み始めました。なぜレアだけが男子を得るのかと私をなじってきます。そんなことを言われても、私にはどうしようもない。ですが、愛するラケルの心をなだめるには、このヤコブは力不足でした。

　女というのは怖いものですね。自分の代わりに自分の侍女ビルハによって息子を産んでくれというの

です。一体それは何事かと、あり得ない事だと、何度も言い聞かせましたがまったく聞く耳を持ちません。どこで聞いたのかアブラハムも彼の妻サラの侍女ハガルを通じてイシュマエルを得たではないか、と逆に私を説得しようとする始末。

　ま、確かにそれは本当です。神はアブラハムに大きな民族を成してくださるとおっしゃいましたが、大きな民族はおろか、長い間子供一人にも恵まれませんでした。アブラハムはずっと待っていました。いや、もっと待ち焦がれた方は祖母サラだったようです。いつかは、神が子供をくださる。跡継ぎをくださる。彼女は耐えに耐えました。そして十年という歳月が流れたのです。サラはもうこれ以上我慢できないと言います。待てないと言います。そして自分に代わっ

て、自分の侍女であるハガルを通じて息子を産んでくれ、アブラハムにせがみました。そうして生まれたのがイシュマエルではありませんか。

誰にもサラを責めることはできないかも知れません。もしかして彼女は十年も待ったのだから、もう十分だと思ったのではないでしょうか。しかし、このことによって、同じ屋根の下でどれほど多くの混乱が起きたでしょうか。子供を持つようになったハガルは侍女という身分もわきまえず、自分の主人であるサラを蔑（さげす）み侮辱しました。愚かな女です。問題はそこで終わりません。結局、神の約束は、アブラハムが百歳になった年に達成されます。ハランを離れてから二十五年目のことでした。十四歳も上のイシュマエルが腹違いの弟にあたるイサクと仲良く過ごせばよか

ったものを、彼はイサクを苦しめたといいます。放っておきません。母も母なら息子も息子です。このことは、アブラハムとサラの心配の種になり、結局はイシュマエルと彼の母親であるハガルは荒野へと追い出されることとなりました。

人間の考えたやり方で生まれたイシュマエルと神の御心にかなった方法で生まれたイサクとは、決して共存できない、それこそ水と油のようなものだったのでしょう。共存できなかったのは単に、イシュマエルとイサクだけではありません。神の祝福なしに、人間の考えと神の考えが互いに共存しえないと私は信じております。

無理を言ってくるラケルには私は最初、怒ったりもしました。イシュマエルとイサクについて何度も詳しく

話してあげたつもりです。ですが、いくら言い聞かせても無駄です。私はその心の中に燃えたぎる妬みの力を沈ませることはできなかったのです。

　仕方なく、私は彼女の侍女ビルハと一晩を過ごしました。こういうのをまさに女の執念だというのでしょうか。驚くべきことに侍女ビルハが身ごもったと思ったら、なんと息子を産んだのです。名は「ダン」と名付けました。これに気をよくしたのか、ラケルはさらに次男を望みました。私は少なからず不愉快でした。私はラケルをこれほど愛しているのに、彼女は私ではなく子供にだけ関心があるように思えたからです。しかし、私は既に女性の妬みと執念に勝つことはできないということを知っていました。彼女はビルハを通じて二人目の息子「ナフタリ」を得ることになった

のです。

　こうなると、さすがのレアも黙ってはいませんでした。レアも自分の侍女シルバを通じて息子を得たいと言ってきます。

　本来、私は子孫に対する欲が強いと申し上げましたが、彼女たちの執念にはとてもかないません。結局レアからルベン、シメオン、レビ、ユダが、ラケルの侍女ビルハからダンとナフタリが、レアの侍女シルバからガドとアシェルが、またレアからイッサカル、ゼブルンが生まれるに至りました。

　そして、みなさん、聞いてください。ついにラケルから子供が生まれたのです。息子が生まれたのです。みなさんも一緒に喜んでください。（観客の様子を見ながら）皆さんはあまりうれしくないように見える

のですが、そうおっしゃらずに、さあ、もう一度言いますね。

　ついにラケルから子供が生まれたのです。息子が生まれたのです。みなさんも一緒に喜んでください。（観客の拍手をあおる）

　ハハハ。ありがとうございます。いやあ、もう、本当にうれしかった。彼女が喜ぶ顔が今でも目の裏にありありと浮んできます。その子の名前がヨセフだったのです。ヨセフ。ヨセフ…。ああ、ヨセフ…。ヨセフ…。

　ヨセフが生まれたのは伯父ラバンと約束をしたもう一つの七年の期限が終わる年のことでした。私はラバンに対して単刀直入に申し出ました。あなたの言う通り七年間を仕えました。初めに私は七年間あなたに仕える条件でラケルをくれるように言いましたが、

あなたは私を騙して、結局十四年間も私を働かせました。もうそれで十分じゃないですか。いい加減、私を放してください。私を自由にしてください。

　これを聞いてラバンは戸惑った様子でした。それもそのはず、自分の娘をだしにして十四年もの間、ただ同然でこき使った私が出ていくと言い出したからでしょう。それだけではありません。今、彼が所有している富は、私が働き始める前と比べると雲泥の差です。昔の財はみすぼらしい限りでしたが、今はあの家畜の群れをご覧ください。私が働き始めてからどれほど栄えましたか。これはみな、神が私と共におられたから成しえたことであります。にもかかわらず、私の分は一つもありません。もう、私を解放してください。私も自分の家庭を築き栄えたいのです。

するとラバンは新しい提案をしました。だったら報酬を私に決めろと言うのです。いくらでもやるとも言いました。私もずる賢いと言われますが、こいつもただものではありません。そういう面では私より一枚上手です。私が自分のためにどれだけ献身的に働き、どれだけ自分にとって得になる存在かをはっきりと分かっていました。

ですが、私はもうこれ以上は騙されません。彼は自分の持っているものを他人と分けることに関して徹底的に拒む人間、いくら血縁関係にある私と言えども、自分のものはびた一文たりとも渡さないという人間であるということを知っていました。だから、まるで私のためを思ってくれているようにああ言っているが、結局は自分のものを守りたいがために、私をま

た道具扱いする魂胆なのです。もう、その手に乗るものですか。

私はラバンに、こう言いました。

もし、あなたが私の頼みを聞いてくれるのであれば、報酬は頂かなくとも結構です。その代わり、これから新しく生まれる家畜の中で、羊の場合はまだら模様、縞模様や黒色、ヤギの場合は斑点のあるやつが生まれてきたら、それを私の取り分ということにしてください。それらは私の牧場に連れて行きます。もし、いつでも私の牧場をご覧になって、まだら模様、縞模様や黒色でない羊がいたり、または斑点や縞模様以外のヤギがいたら、それはすべて私が盗んだものと思っても頂いても構いません。

欲深いラバンがこの提案を断るはずがない。

彼は言いました。

よおし、いいだろう。その後、彼の行動の速さと言ったら大変なものでした。まず、彼は自分の家畜の中から模様のあるヤギと黒い羊たち、少しでも柄があったり、黒い色を帯びそうなものを見つけると、それらを分けて、全部自分の息子たちに与えてしまいました。

残った白い羊たちと柄のないヤギたちだけをラバンのものとし、それらを私に任せたのです。それだけでなく、空っぽの私の牧場から、歩いて三日ぐらいかかる離れたところに自分用の新しい牧場をこしらえました。もう絶対お互いの家畜同士が混ざらないように、念には念を押したつもりなのでしょう。一体こいつは、どれほど、がめついのでしょうか。そんなに

自分の物をとられたくないのかと思いませんか？

　さあ、これからいよいよこのヤコブの力を発揮する時が来ました。柄のないヤギ同士を交配させて柄のあるヤギを産ませる必要があります。白い羊同士を交配させて柄のあるの羊と黒い羊を作り出さなければならなかったのです。ハハハ、皆さんはこれが簡単に聞こえますか？これはですね、ちょっとオーバーに言えば、水と水を掛け合わせてお酒を造るようなものなんです。常識的に考えてうまくいくはずなんて全くなかったんです。でも、これを成功させなければ私の取り分、私の報酬がありません。

　ところが私は誰でしょう。そうです。私はヤコブです。長子の権利を奪い、父の最後の祝福も奪ったこの私がこれくらいのことでへこたれるでしょうか。ラバ

ンがそう来るなら受けて立ってやろうじゃありませんか。ラバンがラバンならヤコブもヤコブです。

　これからは私が動く番です。まず、ポプラやアーモンド、そしてすずかけの木の若枝を集め、その皮をむきました。これを家畜たちが水を飲むところ挿しておくと表面にまだらや縞模様が出てきます。なぜこのようにしたかというと、家畜たちは、この水飲み場に来て交尾をするんですな。柄のある枝を見て交尾をした家畜は柄のある子を産み、それを見ずに交尾をした家畜は、白い子を産みました。だから、私は丈夫な羊やヤギが交尾をするときは、この柄のある枝が見えるようにし、ひ弱な家畜が交尾をするときは、この木の枝が見えないようにしておいたのです。

　するとどうなったのでしょうか。ひ弱な羊とヤギた

ち、白い家畜はすべてラバンのもので、丈夫な家畜、柄のある家畜と黒い羊は、すべてがヤコブのものになったのです。素晴らしいじゃありませんか？みなさん、これがヤコブの実力なんですよ！天才的じゃありませんか？(手振りで観客の拍手を促す)

　そうです。これはヤコブが生き方です。たかがラバンごときが、どうしてこの私に勝つことができるでしょうか。六年が過ぎると、私の家はますます栄え、ラバンの家は衰退していきました。これをラバンと彼の息子が面白くないと思ったのでしょう。ラバンの息子を見ると、そのがめつさは瓜二つです。最初に自分の父親から模様のある家畜を譲ってもらった彼らは、私の取り分が増えるのを見て、自分のものが奪われていくと思ったのか、私のことを妬み始めたようでし

た。真っ白な家畜たちが私の手にかかれば、柄のある健康で丈夫な子を産むのを見て、どうも自分たちのものをわたしが横取りしてるように感じたようです。

　これは、それこそお門違いも甚だしいと言えるでしょう。呆れた輩です。結局、彼らは自分たちの父親に告げ口をしました。それでも自尊心のかけらくらいはあったのか、自分たちのものが奪われるとは言わず、私がラバンのものを横取りしていると言ったのです。どちらにしたって同じこと、こじつけもいいところです。実に情けない。ですが、息子の可愛さからでしょうか。あるいは自分にも妬みがあったかなのか、ラバンも私を疎ましく感じ始めたようです。

　これを直感した私は、もうそこを離れ、我が故郷カナンに戻る時が近づいたと思い立ちました。いつま

で、あのあくどいラバンの家で、惨めな思いをしなければならないのでしょうか。いざ、旅立ちの時は熟しました。ヨセフ、そしてその間に生まれた愛する娘ディナも長旅に耐えうるまで成長しました。

そのためにはまず、私はラケルとレアを説得しなければなりませんでした。

見てのとおり、私はあなたの父の下で二十年もの間、仕えて来た。ところがあなたの父親が私にしたことを考えてみなさい。あなたたちも自分たちの目で見たのだから知っているでしょう。私の取り分が増えれば、契約条件をあの手この手と変えて来たりしたのが十回にも及びます。しかし、その都度、神が私と共におられたおかげで、このようにヤコブの家は繁栄することができた。丁度、数日前、私の夢の中

に神の使者が現れて曰く、ここを離れ私の生まれ故郷に戻るようにとのお告げがあったのだ。今まで私はあなたの父の下で十分過ぎるほど仕えてきた。もう私の故郷へ行こうではないか。

　すると幸いにも、本当に幸いにもラケルとレアは快くついて来てくれると言ってくれました。それなら、ためらう理由がどこにあるでしょうか。私は急いで旅支度をし、さっさと子供たちと妻らをラクダに乗せ、家畜たちを引き連れて出発しました。

　予想はしましたが、案の定、ラバンは私たちを追いかけてきました。私たちが旅立ってから七日が過ぎたころでした。その姿はまるで取って食おうとでもいうのかと思える勢いでした。

　私には一片たりともやましいことはありません。ラ

バンが着くや否や、私は彼を問い詰めました。今まであなたのためにどれほど身を犠牲にして、どれほどに身を粉にして、どれほど誠心誠意をもって仕えてきたのかは、誰もが知っていることです。何よりも結果が物語っていませんか。猛獣たちによって羊やヤギが奪われようものなら、あなたは私に自腹で弁償させました。昼は暑さと、夜は寒さと戦いながらあなたのために今まで働いてきました。違いますか？

　答えに窮すると彼は不意に自分の家にある偶像を盗んだと言い出しました。呆れてものも言えません。アブラハムとイサクによる契約の祝福の系図を受け継ぐこの長子ヤコブがどうしてそんな偶像なんかを、それもラバンの家で盗む理由がどこにあるでしょう。家全体を探し回ったあげく去って行ったラバンに会

うことはもうないでしょう。考えただけでも、甚だうんざりするような歳月でした。

　ラバンが帰った後、私はより大きな課題を解決しなければなりませんでした。私の生まれ育った土地、懐かしいカナンの地に帰ることにおいて最も気にかかったのは、やはりエサウでした。二十年も経ちました。エサウから逃れるために家を出る時七十七歳でしたが、今は九十七歳、もう少しで百歳に手が届きます。お互い歳も歳だし、過去の事を忘れていてくれたら、そして私を受け入れてくれたらどれほどいいかと思いました。しかし、エサウの怒りが収まったら呼び戻してくれるという母リベカからの便りが届くことはありませんでした。考えれば考えるほど居ても立ってもいられないくらい不安でいっぱいでした。

カナンの地に入る最後の関門であるヤボクの渡し場に至りました。あまりにも気が気でなかったので、まずは使者を一人送って、兄の弟ヤコブが来ました…いや、いや。兄の「しもべ」ヤコブが来たと知らせるよう言いつけて、様子を見てくるようにしました。非常に優しく丁寧な口調でなければならない、と何度も言い聞かせましたよ。

ところが、急いで戻ってきたこの使者の報告によりますと、エサウが屈強の者総勢四百人を従え、こちらに向かって出発したというではありませんか。

熱烈な歓迎のお出迎え？いやいや、そんなはずはない。いくら考えても屈強の者四百人だなんて穏やかではありません。間違いない。兄はまだ過去のことを忘れずにおられるのです。そうに決まっていま

す。このヤコブが兄の長子の権利を奪っただけでなく、父の最後の祝福までも横取りしたということについてまだ怒っているのです。これはもう大変なことになりました。どうすればいいでしょう。

　私は不安で焦り、苦しい思いで祈りをささげました。神よ、あなたが行けとおっしゃったから従ったのではありませんか。今まで私を導いてくださって、ここまで来ることが出来ましたが、エサウが屈強の者四百人も従えて攻められたら、私は死んでしまいます。私だけではありません。ここにある財産はすべて奪われ、ラケルや他の妻たちまで無事では済まないでしょう。子供たちだって同様です。神は、アブラハム、イサクの子孫を天の星と海辺の砂のようにされると言われました。なのに、ここでみんな殺してしまうおつ

もりですか。

　いくら祈りを捧げても不安は依然として残っています。全く消えません。私は次の手を考えました。私は一晩中、兄に贈る貢ぎ物をまとめました。ヤギ二百二十匹、羊二百二十頭、ラクダと雌牛と雄牛などをささげようと思いました。私に必要な最少のものを除いてすべて贈ることにしたのです。私と私の家族の命がかかっているのです。こんな家畜を惜しんでいても始まりません。

　使用人たちに命じて家畜を複数の群れに分け、順番に兄に見えるように段取りを組み、兄の怒りを少しずつ沈めた後、最後に私が会おうとしたのです。これ、なかなかいいアイディアでしょう？

　このような作戦が功を奏して、兄は私を受け入れ

て下さいました。どれほど嬉しかったか知れません。私は残った財産を引き連れてカナンの地、シェケムに無事たどり着くことができました。これで私はやっと独立して立派な家庭を築ける思いました。平和で豊かな生活を送ることができると確信していたのです。これから神がアブラハムとイサクに約束された預言を成就する民族として繁栄し続けるだろうと信じて疑いませんでした。

　ところが何ということでしょう。あまりにも酷すぎます。神はなぜこのような仕打ちをなさるのですか。神がレアを通して下さった愛娘のディナが、カナンの地でシェケムの若い族長というやつによって強制的に辱めを受けたという知らせを聞いて、私はこの世の全てが、夢も希望も何もかもが崩れ去るような心

境でした。

　すると、若い族長シェケムの父ハモルが私を訪ねて来て、ディナと自分の息子を結婚させてくれと頼むのです。以前だったら、自分の判断で行いましたが、今は息子たちも成長したので一存で結論を下すということがためらわれました。私は一度、野に出ている息子たちを呼び集めて話を聞くことにしたのです。愛する娘がこのようなことになってしまった以上、怒りがこみあげてくるのは当然ですが、だからといってこのように訪ねてきた彼の父に対して、どうこうすることもできないじゃないですか。

　彼の父ハモルは、私たちの息子たちにも同じようにお願いしていました。自分の息子とディナを結婚させてくれることはできまいか、と。すると次男のシメ

オンが言います。自分たちの妹を連れて行くためには、あなたがたの土地に住んでいる男性すべて割礼を受けなければならないと言い出したのです。この言葉を聞いた三男レビも相槌を打ちます。そうすればディナを与えようと言うのです。

　長男は勿論ルベンでしたが、彼はいろいろな面で力不足です。口下手でもあり、長男としての役割を果たすには荷が重すぎるような気がしていました。ですが、次男と三男が、このように強く言っものですから私もどうにもならなかった。その提案を聞いたとき、なるほど、これも一理あるなと思いました。しかし、そうではなかったのです。ああ、まさかあのようなひどいことを考えていようとは、まさかあのようなむごいことを考えていようとは……。（顔を両手で覆う）

彼らがその地域の住民たちに割礼のことを伝えると、さすがは族長とその父です。すべての男性が割礼を受けることにしたんですね。正直、驚きました。あるいは私たちの財産目当てだったのかも知れません。彼らと一緒に暮らすとなると、私たちと取引もすることになるでしょう、私たちに財力がなければ、彼らが喜ぶ理由もなかったはずです。子供たちが選択したのですから、老いぼれは従うまでです。今度は婚姻の手はずをどのように進めればいいかと考えながらも、心に傷を負ったディナのことを考えると胸が痛みました。

彼らが割礼を受けて三日目の日、衝撃的な知らせが入りました。シメオンとレビがシェケムの地に攻め行って、割礼の痛みが治まっていない男性、ハモ

ルとその息子である若い族長を含むすべての住民を刺し殺し、ディナを連れて帰ったというのです。それだけでなく、イッサカル、ゼブルンまで加勢して、そこの家畜や財産を奪ったというではありませんか。

ああ、私は絶望しました。一体がなぜこんなことになってしまったのでしょうか。私はシメオンとレビを責めました。どうしてこのようなひどいことを犯したのかと厳しく問いただしました。しかし、彼らは堂々としていました。まだ殺気に満ちた目を輝かせています。自分の妹を辱めたのに、どうして黙っていれるかというのです。

ああ、私たちはもうこれ以上ここに留まっていることはできません。息子たちのしでかしたことを聞きつけて、他の民族が攻撃をしかけてくるかもしれない

ではありませんか。一刻も早く逃げなければ。私は直ちに父と兄がいるカナンの地へブロンの谷へ行こうとしました。

　ところが、不幸はこれで終わらなかった。まだ終わっていなかったんです。ベツレヘムの近くを通っているとき、ラケルに陣痛が起こり始めたと思ったら、息子ベニヤミンを出産したのです。

　ああ…、めでたい？はい…めでたいことです、ですがラケルは、ベニヤミンを出産すると、ベニヤミンを出産すると、なんと死んでしまったんです。ああ、ラケル、ラケル、愛するラケル…。私は、あなたにして上げたいものが、まだたくさんあったのに、君を得るために七年を働き、一緒になってからまだ十四年しか経っていないのに、こんな風に別れるなんて。こ

んなにあっけなく…。こんなに…。ああ、ラケル…、ああ…、ラケル…、ラケル…。

－　両手で顔を覆い、声を上げて泣く。

　ラケルを失った悲しみを何に例えられましょうか。ですが、こんな愛らしいベニヤミンを得られたことで、ラケルを失った悲しみから、少しずつですが、立ち直ることができました。もう残ったのはヨセフとベニヤミンしかいません。この歳になって子を得られるとは思ってもみませんでした。ヨセフとベニヤミンは私にとって今やラケルのような存在です。ラケルに勝るとも劣らない貴重な存在なのです。ヨセフとベニヤミンを見ると、それはラケルを見ることであり、ヨセフとベ

ニヤミンが笑うと、それはラケルが笑うことであり、ヨセフとベニヤミンが話すとラケルが話すことであり、ヨセフとベニヤミンが食べるとラケルが食べているように見えました。ヨセフとベニヤミンは、私の喜びであり、希望そのものでありました。このようは険しい人生を送ってきた私にとって、一握りの望みでした。

　なのに、それなのに、ヨセフさえ！ヨセフさえ！

　ああ、神よ！アブラハムの神、イサクの神は、こうはしませんでした。与える神、満たしてくださる神、豊かにされる神、慈悲深き神でした。だったら、その次の、ヤコブの神でも、そのようでなくてはならんでしょう。ヤコブの神は何でしたか。ヤコブの神は奪っていく神です！残酷な神です！あざ笑う神様です！

私は努力しました。アブラハムより、イサクより、もっとよくなるために努力してきました。彼らはじっと待つだけだったかも知れないが、私は自分の力で努力すれば、さらによくなると信じていました。

　エサウに会う前、ヤボク川を渡る前に、家畜たちをまず船で送り、夜には妻たちと子供たちを渡らせた後、私一人残ってしばらく人生を振り返りました。

　たたずんではならぬ！とどまってはならぬ！腕を伸ばせ！その手でつかめ！

　私は今まで必死になって生きて来ました。

　死に物狂いで生きて来ました。

　しかし、しかしね…。

　いろいろ考えてみたんです。

　何のために必死になって生きて来たのか。

今まで私は何のために生きて来たのか…ってね。

美しい妻？もちろんラケルは美しい女性だ。ラケルを得るために七年、いや、十四年をそのひどい伯父ラバンのもとで働きづめでした。そして、愛するヨセフも得ることができたのです。もちろんレアやシルバ、ビルハによって得られた子たちが大事ではないというのではありません。断じてそのようなことはない。

それでもねえ。どうしたもんでしょうねえ。目を閉じればレアよりも、シルバやビルハよりも、ラケルが先に浮かぶんですよ。

息子のルベンやシメオンやレビやユダや…あと、えっと、誰でしたっけ…（照れ笑い）まあ、とにかく、あいつらよりもヨセフやベニヤミンが先に思い浮かんでくるんですよ。ハハハ（苦笑い）

このように、私は妻にも子供にも恵まれました。それは事実です。

財産だってかなり儲けることができました。あんな薄情なラバンの下にいながらも、六年の間これほどの富を蓄えることができたということは、それこそ奇跡です。柄のない羊やヤギから柄のあるやつらを産ませるためにどれほど苦労したか、神様も見てご存知ですよね？それこそ骨身を削る苦痛の日々でした。

そう…、そうなんです。

命をかけて長子の権利と父の祝福を奪ったにもかかわらず、その結果、兄の手から逃げまわる身に成り下がってしまいました。

ラケルを得るために十四年間、ただ働き同然でラ

バンにこき使われました。

　がめついラバンの下で財産を貯めるために、六年もの間、血と汗と涙を流しました。

　愛する娘ディナは異邦人によって辱めを受けてしまいました。

　それで、シメオンとレビは殺人を犯すことになりました。

　私は今まで蓄えてきたかなりの財産を兄に差し上げました。

　ヤボク川を渡る前には負傷を負い、今ではほら、(不自由に歩いて見せる)足まで不自由になりました。

　あれほど長年の苦労の末に得られたラケルはあまりにも早く私の傍から去って行ってしまいました。

　そして愛しいヨセフは…。愛しいヨセフは猛獣によ

って殺されたんです。

　ああ、ヨセフ…。ヨセフ…。

　(両手で顔を覆ってむせび泣く)

　(顔を覆ったまま)ラケル、申し訳ないことをした。あなたのためにも、ヨセフを守ってやらねばならなんだが、出来んかった。私は将来、あなたに合わせる顔がない。ヨセフが生きていたなら、今ごろ三十を超えていただろうに、自分の夢も叶えることが出来ぬまま、十七という若さで死んでしまうとは…。ラケルよ。すまん…。本当に、すまん…。

　(覆っていた手を下ろし、急に横を振り返って)

　なのに、この馬鹿息子ども！せっかくエジプトにまで行かせて食料を買って来いと言いつけたのに、シメオンを人質に取られたうえ、ヨセフだけでも足りず、

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

今度はベニヤミンまで奪っていくつもりか！この役立たずども！お前らがこの老いぼれのためにしてくれたことが、何一つあったか？この親不孝者め！

（その場に座り咳き込む…。）

（腹をすかせた声で）

はあ…。はあ…。ゴホゴホ…。はあ…。はあ…。雨が降らん。なぜ、雨が降らんのじゃ。穀物が獲れんではないか。あの土地を見てみろ。燃えるように赤く広大な大地を見てみろ。空から炎の塊が休みなく降ってくるようじゃ。アブラハムの神、イサクの神がどうして、このような試練をお与えになられるのじゃ。

命を懸け、知恵を絞ったあげく、得られたのがこれなのか…。これが全部だというのか…。あれほど努力をして得られた結果が、たったこれだけだという

のか。

　はあ…。はあ…。ゴホゴホ…。もう、もう、勝手にせい、連れて行け、ベニヤミンを、連れて行くがよい。もしも、失うことになれば…。もしも、失うことになれば…。ゴホゴホ…。はあ…。はあ…。はよう、行ってこい。はよう…。はよう…。

第三章　幕。

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

第四章　疑問

－　十一兄弟たちの疑問

登場人物

ヨセフの兄弟たち：シメオン、レビ、ユダ、ルベン、ダン、ナフタリ、ガド、アシェル、イッサカル、ゼブルン、ベニヤミン

宰相の使者

兵士1・2・3

場所

エジプトを出発しカナンに向かう途上

※注１：【目上の呼称】母親が同じ場合は「兄さん」、違う場合は「兄貴」

※注2：【自分の呼称】

ルベン　：ボク

シメオン：俺

レビ・ダン：オレ

ユダ　　：私

他兄弟　：僕

※注3：【父の呼称】

ルベン　：お父さん

シメオン・レビ　：親父

他兄弟　：父さん

－ 右からシメオンと兄弟たち一行登場。シメオンが登場して、少し後ろにレビ、ユダ、ルベン、ダン、ナフタリ、ガド、アシェル、イッサカル、ゼブルン、そして最終的には少し距離を置いてうつむいたまま、ベニヤミンが付いて来る。

－ シメオンとレビは荷物を背負っておらず、他の者たちは背負っていた荷物を下に下ろす。

レビ　　　　:（先を行くシメオンに向かって）兄さん！兄さん！ちょっと、シメオン兄さん！

シメオン　　:もういい、レビ！聞く耳持たねえ！

(足を止める)

レビ　:もう、兄さん、いい加減にしてくれよ。

シメオン　:(後ろ振り返って)いい加減にしろだと？一体何をいい加減にしろってんだ？

レビ　:いや、だからさ。もう、怒るのはそれくらいにしてくれってんすよ。こっちだってそれなりの理由があったんすから。

シメオン　:それなりの理由？おもしれえじゃねえか。聞かせてもらおうか。

レビ　:いや、だから、俺らがあの宰相だかなんだか知らねえ野郎にいくら頼んでみても、あそこの、あいつ(一番後にいるベニヤミンを指し)を連れてこなけ

れば、オレたちを皆殺しにするっていうから…。

ベニヤミン　：(これを聞いて申し訳なさそうに、うつむいたまま後ろを向く)

シメオン　：だったら、さっさと連れて来りゃあいいだろう。何をそんなにぐずぐずしてたんだって言ってんだよ。

レビ　：あのね、そりゃあオレたちだってすぐにも連れて来たかったさ。兄さんがここにこうして人質として捕まっているのに、オレたちだって針のむしろだったんすから。(後を振り返って)イッサカル、ゼブルン、そうだろう？。

イッサカル、ゼブルン：(うなずきながら声を合わせ

て）そうですよ。もちろん。

シメオン　：いらねえよ。聞きたくないわ。おい、お前らが帰ったのがいつだったんだよ。もう二回以上来てもいいころだろうが。なのに、俺がここにつかまっているということを知っていながら今になって来るのか？てめえら、それでも血を分けた兄弟なのかよ？

レビ　：いや、だからさ。もう、何度言ったらわかるんすか。兄さんだって全部知ってるっしょ。あの親父が（ベニヤミンを指す）あいつを手放さないからしょうがないじゃないっすか。

シメオン　：だから俺がいつも言ってるじゃねえ

か。あの老いぼれはあいつ以外は自分の子だと思ってなんかいねえんだよ。あの親父が俺らに親父らしくしてくれたことなんか、一度でもあったか。

レビ　:そりゃあ、まあ、仕方がないでしょう。あのことが…。

シメオン　:あれ以前も同じだ。俺らの母さんがラケル母さんのせいで、どんなに冷たくされたか知ってんだろ？母さんがいくら親父のために尽くしても親父は、ただただラケル母さんだけを愛していた。俺らの母さんはずっと親父の後ろ姿だけを見てきたようなもんなんだよ。それがどんなに惨めなことなのか、お前

にわかるか？

レビ　　　：(声を落とし)兄さん、ベニヤミンのいるところで、ラケル母さんの話はしないことにしたでしょう。

シメオン　：(咳払いをする)ふむ。俺だってな…。ふむ。それはそうと、俺がここにいるとき、どんな目に遭わされたと思ってんだよ。え？囚人の中でも凶悪な殺人犯たちの一緒の牢屋に入れられたんだぜ。窓もよ、こんな手のひら見てえに小さくてよ、真っ昼間も暗くてしょうがねえ。それでまた、においが臭くてよ。何だか死体の腐るにおいが立ち込めてんだよ。それだけじゃあねえ。

朝から晩まで休む間もなくこき使われてたんだ。まったく、死ぬかと思ったぜ。

レビ　:え？それって本当っすか？

シメオン　:まだ続きがあるんだよ。あいつらは、何かってえと、けんかをしやあがってよ。毎日のように死体が運ばれてったぜ。もう、たまんねえよ。なんで俺があんな殺人犯たちと同じ監獄に入れられなきゃなんねえんだよ。ふざけんじゃねえってんだよ。

ダン　:(ナフタリに向かって)ふん、自分だって殺人犯みたいなもんじゃねえか。シェケムではあんなにたくさんの人を手あたり次第、殺しておきながら善人

面(づら)かよ。

ナフタリ　：(ダン、口を手でふさぐ)しっ！聞こえたらどうするんだよ！

ダン　：(口をふさいだ手を振り払いながら)おい、ナフタリ、オレが何か間違ったことでも言ったか？それだけじゃないだろう？血を分けたあの子にまで、あんなひどいことをしたんだろう、それが人間のすることか？

レビ　：(遠くを見つめながら静かに、しかし冷たい声で)おい、ナフタリ。お前の兄さんには言葉遣いをちいと気を付けるように言っといた方がよさそうだな。でねえと、そのうち、てえ変なことにな

るかも知んねえからな。(最後には冷たい目つきでダンとナフタリの方を振り返り、睨む)

ナフタリ　:(急いでダンを連れて右の隅に連れて行く)

ダン　:なんだよ。放せよ！

ユダ　:シメオン兄さん、お迎えに上がるのが遅くなって申し訳ありません。大変な思いをされたようですね。

シメオン　:ま、ユダよ。俺だって事情は知ってるさ。いくら来ようとしても、あの親父が末を行かせるはずがねえよな。

イッサカル　:それでもユダ兄さんが何度も頼み込んで、ようやく来ることができたんです。

ゼブルン　:そうだよ。本当に大変だたんだから。ユダ兄さんじゃなかったら、何年間もこれなかったかもな。

ユダ　:(後ろ振り返り)こら、お前ら、静かにしなさい。

レビ　:いや、その通りだよ。事実、ユダがあの老いぼれを何日もの間、説得して、やっと来れたんっすよ。

ユダ　:(レビを見て)兄さん、大したこと、ありません。

シメオン　:ああ、やはりそうだったのか。ユダよ。かたじけねえ。お前が歳は若くとも、俺たちの家の大黒柱だ。頼もしい限りだ。手間かけさせて済まなかったな。

ユダ　　　:いいえ、とんでもない。当然のことをしたまでです。それより、いくつかが気にかかります。いや、考えれば考えるほど納得のいかない部分があまりにも多いんです。

シメオン　:うん？なんかあったんかい。

ユダ　　　:考えてみると、私たちが最初にここ、エジプトに来たときからおかしかったと言えます。外国から来た他の人は、一定の費用を支払うだけで、それに応じた食糧を得ることができると聞きました。

ルベン　　:そ、そうだよ。だから、ボクたちも前にお金を持ってきたんだよ。

レビ　　　:あのねえ。ルベン兄さん、ちょっと黙

ってってもらってもいいっすか。ユダ、続けてみろや。

ユダ　　:はい。ルベン兄さんの言葉通り、私たちも食料を得るだけのお金を持って来ました。ところが、突然兵士たちがやって来て、有無を言わせず、私たちを連れて行ってしまったんです。

ルベン　:そう。そうだよ。あの時は本当に怖かったんだから。

レビ　　:(ルベンをにらみながら)あ、もう、まったく！(舌打ちをする)

ユダ　　:はい、私も気が動転して、考える暇もありませんでしたが、今になって振り返ってみると、どうしても、わからない

ことがあります。

シメオン　:そりゃあ、おめえ、わからんだろう。そもそも俺たちがどこかの国の回しもんだと疑われるようなことは、何一つしてねえのに、何で連れて行かれたんだって話だよな。

ユダ　:はい、兄さん。もちろん、その点については言うまでもありません。しかし、それより、もっと不思議な点があります。

シメオン　:もっと不思議な点？

レビ　:おい、ユダ。その不思議な点って、何だ？

ユダ　:兄さんたちも覚えているでしょうけれど、連行されるとき、私たちがいたの

は多くの人たちでごった返している市場のど真ん中でした。大勢の人だかりで、私たちは別々に散らばって見物をしながら歩いていたんです。なのに、急にエジプトの兵士たちが現れたかと思うと、瞬く間に我々十人を連行して行ってしまいました。

レビ　　：おおっ…。確かに、言われてみりゃあそうだ。あんな混雑の中で、よくもオレら十人をみつけられたもんだよな。

ルベン　：そ、そりゃ、ボクたちはみんな兄弟だから、か、顔が、似ていたからなのかな？きっと、そうだよ。ハハ…。

レビ　　：何言ってんすか。そんなわけ、ねえ

じゃんかよ。

ユダ　　　：私達はみな兄弟だから、もちろん似ている点もあるでしょう。しかし、私たちは、父親は一人ですが、母親は四人です。もちろん、その時はベニヤミンがいなかったから、三人の母親とはいえ、同じ父とレア母さんから生まれた私たち七兄妹でさえも顔が全く同じだとは言いづらいでしょう。ましてや母親まで異なるダンにナフタリ、ガド、アシェルまでも初対面の人が瞬時に見分けるというのは至難の業です。

シメオン　：俺たちの外見がエジプト人たちとは少し違っていて、見分けやすかったん

じゃねえのか。

ユダ　:ですが、今、起こっている干ばつは、カナンの地だけに限ったことではありません。エジプトの周辺国では、すべての土地が渇ききっていて、収穫量は皆無に等しいと言えます。事実、ここエジプトも深刻な干ばつに苦しんでいるのは同じです。ただし、数年前まであった大豊作の間に食糧を備蓄しておいたおかげで、エジプトだけでは食糧難の危機を免れているということなんです。

レビ　:おれにゃあ、そいつがどうも不思議なんだよ。どうして、エジプトだけがこ

んなに豊かなんだ？

ユダ　:私が聞いた噂によれば、それを陣頭指揮したのが今の宰相なのだそうです。ですから、エジプトの皇帝も今の宰相には頭が上がらないと聞きました。

シメオン　:ふむ。なるほど。

ユダ　:私たちの住んでいるカナンの地や、ここエジプト、そして周辺国一帯は干ばつが続いていますが、今の宰相のおかげで、ここエジプトだけは、食料があふれています。ですから兄さんたちも見てのとおり、どこへ行っても外国人たちで賑っています。人通りが少ない時間や場所ならともかく、外国人、

エジプト人を問わず、混雑した市場のど真ん中で、私たちの兄弟十人だけ正確に見分けることは常識的に考えて不可能です。

シメオン　:うーむ。お前は、それが不思議だというのか？

ユダ　:いいえ。妙な点はそれだけではありません。

レビ　:え？おかしなことが、まだあるってえのか？

ユダ　:はい、レビ兄さん。(背後にある弟たちにも振り返って見る)そしてお前たち。私が一つ、問題を出しましょう。私たちを連行した兵士たちが総勢何人

だったか答えられる者はいますか？

– 驚きながら兄弟たちかお互いの顔を見合わせながら首をかしげる。

ルベン　:い、いや…。数えてる暇なんてなかったよ。本当に怖かったんだ。

レビ　:ユダ、まさか、お前、あの時、その兵士たちの数を全部かぞえてたのか？

ユダ　:いいえ。実は私も最初は慌ててそれどころがありませんでした。しかし、彼らに連れて行かれている間に、はっきりと確認できましたよ。

レビ　:はっきりと確認できた？オレにゃあ、

さっぱりわかんねえな。じゃあ、お前はあの時、何を見たって言うんだ？

ユダ　　：私たち十人を連行していくとき、間違いなく一人当たり二人が付き添いました。ですから当時の兵士たちの数はちょうど二十人だったということになります。

レビ　　：そりゃあ、おめえ、オレたちが抵抗するかも知んねえからじゃねえか？それが妙だってえのか？

ユダ　　：彼らは市場で私たちの挙動に不審を覚えて急に逮捕したのではなく、最初から私たちの兄弟を連行するつもりで、その数に合わせて二十人が来て

いたということなんです。

シメオン　:それは、つまり、計画的に俺たちを捕まえたってことか？

ユダ　:はい、兄さん。おそらく、我々は、エジプトに入ってから、いや、あるいは、入って来る前から、彼らに監視されていたのかもしれません。

レビ　:おいおい、それはちょっと行き過ぎじゃねえか。だって、そうだろう。正直言って、オレたちが何だって言うんだよ。カナンの地に住む、ただの平凡な羊飼いじゃねえか。なのに何でオレらみたいな人間が監視されなきゃなんねえんだよ。

シメオン　:うむ。いくら何でも、それはお前の考えすぎなんじゃねえかな。俺らはただ、カナンの地から食料を買うために、ここエジプトに来ただけだろうがよ。なのに、俺らなんかを監視する必要なんてあるか？

ユダ　:もちろんそうです。私も今朝まで私の考えすぎかもしれないと思っていました。しかし、今日、二度目に宰相に会った後、私の推測は確信に変わりました。

レビ　:今日？さあ、別に大したことなかったろ？あいつがお前になんか言ってたか？

ユダ　　　:いいえ。私が注目したのは、まさに今日、宰相に会ったとき、彼の警護をしている兵士たちです。彼らの姿を覚えていますか？

－ みんな首をかしげる。

ユダ　　　:彼らの着ていた軍服は一般の兵士が着ているものとは異なります。より華やかで権威のある出で立ちをしていましたね。面白いのは、まさに私たちを連行した兵士たちが、それと同じ軍服を着ていたんです。

シメオン　:何だと？じゃあ、我々を連行してい

った奴らは誰だと言うんだ。

ユダ　　　：私の考えが正しければ、我々を連行していったのは間違いなく、エジプト宰相直属の親衛隊です。

－ ユダ以外の兄弟たちすべてに大きな声を出して驚く。

レビ　　　：お、おいおい…。こりゃあ、おめえ、話がどんどん大きくなりすぎやしねえか。オレたちって、言っちゃあなんだが、つまんねえ羊飼いだろうがよ。私たちがスパイか？回し者か？カナンの特殊部隊か？暴動でも起こしに来た

のかってえんだよ。オレたちはただ腹が減って食料を買いに来ただけじゃねえか？

ユダ　：ええ、そうです。それだけです。しかし、私の考えを組み合わせてみると、彼らは私たちが最初にここに来た時、エジプトの地を踏む前から監視していて、計画的に私たちを連行したということ、そしてそのために動いたのは、普通の兵士ではなく、エジプト最高幹部が関わっている組織なのかも知れないということです。

レビ　：ユダ。ちょ、ちょっと待ってくれ。(シメオンを見て)兄さん、ちょっとこっちへ。

(シメオンを連れて舞台の左の方に行く)

－ 照明は暗くなって、シメオンとレビだけスポットライトで照らす。

シメオン　　:うん？なんだ？どうしたんだよ？(シメオンに誘われて一緒に行く)

レビ　　:(少し抑えた声で)兄さん。正直に言ってくんねえか。

シメオン　　:なんだよ、突然を何を言い出すんだよ？

レビ　　:だからさあ、もう、正直に言ってくれって言ってるんすよ。

シメオン　　:だから何をだよ？じれってえなあ。

レビ　　　　:いやいや。兄さんとこのオレの仲じゃないっすか。最初に捕まったとき、あの宰相がベニヤミンを連れて来るように言ったとき、兄さん、正直言って、何を考えていたんすか。

シメオン　　:なにって…。

レビ　　　　:ほら、黙ってないで…。

シメオン　:うむ。そりゃ、まあ、あいつのことを…。

レビ　　　　:そうっすよね？オレもっす。あいつのことを考えました。今から十三年か十四年か前に、俺らはあいつを穴に投げ入れちまいやした。

シメオン　　:うむ。ふう、まあ、あの時、俺らはまだ

二十代そこそこの世間知らずだった。（遠くを見つめる）今振り返ってみると、あんときに、なんであんなことをしちまったのかと思えてならねえ。

レビ　:なんでって、あいつがなんか変な夢を見たとか何とか言ってたっしょ。何でしたっけ、その、夢の中で家族たちが畑の仕事をしていたら、自分の束が立ち上がってオレらの束が、自分のその束を囲んで拝んだって言うじゃねえすか。

シメオン　:うむ…。

レビ　:それだけじゃねえよ。夢の中で太陽と月と十一の星々が自分にひれ伏し

たって言うんだ。ふざけるのもいい加減にしろってえ話っすよ。オレたちをコケにしやがって…。

シメオン　：(咳払いをする)うむ。昔の話はもういいじゃねえか。(体を反対側に回し)

レビ　：兄さん、そう簡単片付けられねえかも知んねえぜ。

シメオン　：(レビの方を振り返る)何だと？お前、突然、何を言い出すんだ。

レビ　：兄さん、オレらがあいつを奴隷商人に銀二十で売り飛ばしたろう？

シメオン　：昔の話を今、蒸し返してどうしようって言うんだ。

レビ　：いや、だからさあ。そのヨセフが売ら

れたところが、どこだと思うんすか？

シメオン　:そんなの知るか。奴隷商人が行き先までは言ってなかったろう。

レビ　:そりゃあ、言ってねえっすけどね。でも今、奴隷商人が最も多く集まる場所って言ったら、どこっすかね？

シメオン　:お前、じれってえなあ。一体、何が言いてんだよ。

レビ　:いや、まったく、もう。一番奴隷が多いのは他でもない、まさにここ。エジプトのでしょう。それを口で言わなきゃ、わからんもんすかねえ。

シメオン　:は？何でそうなるんだよ。

レビ　:ユダが言ってたじゃないっすか。干

ばつはカナンやエジプトだけじゃねえ。この周辺国全部だって。だったら、ほかの国に奴隷なんて来ませんぜ。このご時世、自由人だって食いもんが足んねえんだ。奴隷なんていたって穀潰しでしょう。だから、もし、奴隷が残っていたとしたら、初めからここに来たにしろ、ほかの国へ売られてたにしろ、結局みんな今はここに集まってくるってことっすよ。

シメオン　:うむ？なんだ？じゃあお前、あのとき、俺たちが奴隷として売ってしまったあいつが、今、ここ、エジプトにいるってえのか？

レビ　　：そりゃオレも分からないっすよ。しかしね？さっきユダの言ってたのを聞いたっしょ？あいつの言っている言葉をじっと聞いているね、全然、的外れなことじゃねえんすよ。それどころか理にかなってやがんだよ。オレたちは監視されていた、計画的に連行された。ここまでを見るとシェケムの奴らの仕業かなとも思えるが、あいつらは所詮田舎の部族、とてもエジプトを動かす力なんか、あるはずがねえ。それに、あいつらだったとしたら、藪から棒にベニヤミンを連れて来いとか言うはずがねえじゃねえすか。シメオン兄さん、

間違いねえ、あいつだよ。あいつなんだよ。なんかオレ、今、すげえやばい気がするんすよ。(寒気がするというかのように体を震わす)

シメオン　:ふむ。おい、レビ。落ち着け。なんだよ、お前らしくねえ。まあいい。お前の仮定通り、あいつがここエジプトに売られてきたとする。そして今も生きているとしよう。さらに、幼い自分を奴隷として売ってしまった兄たちをまだ憎んでいるとしようじゃねえか。しかしだ、レビ、よく聞けよ。どんなにそいつが生きていて、今まで俺らを憎んでいたとしても、結局は奴隷だ。奴隷が自由人

になれると思うか？それも、エジプトまで連れて来られたとしたら、外国人、異邦人の奴隷だ。エジプト人ならいざ知らず、異邦人の奴隷がエジプトの地でそう簡単に自由人になれるはずがねえだろう。それだけじゃねえ。自由人になれたとしたら、じゃあどうなんだ？エジプトの幹部を動かせるというのか？異邦人の分際で、エジプトを動かして俺らに自分の復讐をさせるとでも言いてえのか？そんなのとんでもねえ話だよ。

レビ　：ふう…。まあ、そうっす。オレもあれこれ考えて、結局そこで詰まっちまうん

で…。あいつが万が一、ここエジプトに売られてきて、今まで生きているとしても、そしてまた万が一、オレたちがここに来たという事実をつかんだとしても、自分は奴隷、それも異邦人奴隷の分際で何もできやしないはずっすよね。でもねえ、どうも、わかんねえんすよ。

シメオン　　:ふむ…。(考えに耽る)おい、レビ。お前、一度ユダにちょっと聞いてみたらどうだ。

レビ　　:なにをっすか。あいつがどこにいるかってことをっすか？

シメオン　　:さすがにいくら何でも、そこまでは知らんだろう。だが、ユダは、俺たちとは

違う。何か考えがあるかも知んねえからよ、一度聞いてみようじゃねえか。

レビ　：(腕を組んで独り言で)もしかしてあいつが絡んでいるとしたら、ややこしくなるな…。(舌打ち)いや、生きていたって所詮は奴隷だ。オレらに何ができるってんだ。(シメオンを見て)じゃあ、兄さんも一緒に行ってみましょうぜ。

－ シメオンとレビが舞台中央に一緒に移動する。照明が明るくなって、ユダとその兄弟たちが再び現れる。ユダはシメオンとレビを除く兄弟たちの中央に立っている。

－ シメオンとレビが、ユダに近づく。

レビ　　　　：(ベニヤミンの方をちらっと見ては、静かな声で)なあ、ユダ。一つ、聞こうじゃねえか。

ユダ　　　　：(真剣な表情で静かに)ヨセフについてですか？

－ シメオン、レビ、驚く。

－ ほかの兄弟たち、反射的にユダを見る。

シメオン　　：え？お前、どうしてそれを…。

レビ　　　　：やっぱりお前もそれを考えていたのか。

ユダ　　　：はい、今、私たちに起こっているすべてのことを考えてみると、それぞれがバラバラで何一つ筋が通りません。あれもこれも別々です。しかし、ここで「ヨセフ」というカギを入れることによって、筋が明確になります。今、私たちに起こっているすべてのことは、申し合わせたように「ヨセフ」を指しているんです。

レビ　　　：（少し大きくなったユダの声を聞いて慌てて人差し指を自分の口に当てながら）おい、しっ！声が大きい！

– 他の兄弟たち。「ヨセフ」という言葉に反応する。

アシェル　　:ヨセフ？(ユダの方を見る)

ガド　　　　:ヨセフ？(ユダの方を見ては、アシェルと顔を合わせてみる)

アシェル　　:(ガドを見る)ガド兄さん、今、ユダの兄貴が「ヨセフ」って言ったの？

ガド　　　　:(アシェルの方を見る)僕もそういう風に聞こえたけど…。

アシェル　　:(ガドを見る)何で今、ヨセフの名前が出てくるわけ？え？何で？

－ ガドとアシェルの声　cut　out。身振り手振りと口だけが動く。

ナフタリ　　:(ダンを見て)ダン兄さん、今、ユダの兄貴が…。

ダン　　:わ、わかってるよ。

ナフタリ　　:ヨセフがどうしたって言うんだろう。

ダン　　:こいつはただ事じゃねえかも知んねえぞ。

ナフタリ　　:ただ事じゃない?何が?

ダン　　:今、見たか?レビとユダの兄貴をよ。

ナフタリ　　:え?なにが?

ダン　　:お前も鈍いな。レビの兄貴のあんなおじけづいた姿、見たことあるか?

ナフタリ　　:そ、そうかな。

ダン　　:それによ。レビの兄貴が尋ねる前に、ユダの兄貴の口から「ヨセフ」の名前

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

が飛びだしただろう。

ナフタリ　:あ、そうだったね。

ダン　:あの二人、何か知ってるかもな。

ナフタリ　:何かって？

ダン　:そんなの知らねえよ。でもよ、今のこのタイミングでヨセフの名前が出て来たってなると…。ちょ、ちょっと、オレも聞いてみるか。

ナフタリ　:え？何を？

ダン　:(ナフタリを一度見た後、ユダの方を見る)ユダ兄貴、今「ヨセフ」…。「ヨセフ」って言ったよね。

ユダ　:(軽くうつむいている)

ベニヤミン　:(右の隅にいたが、ダンの話を聞き、

驚いて顔を上げ、ユダの方に向かってゆっくりと歩いてくる）

レビ　：（ベニヤミンのこの姿を見て、反対側の左の方に歩いていく）ったく、なんだよ、もう…。（舌打ち）

シメオン　：（軽くうつむき左側の方に少し進み停止）

－ 照明が暗くなって、中央にあるユダとベニヤミンを照らす。左側ユダ。右側ベニヤミン

ベニヤミン　：（用心深くユダに近づいて話しかける）兄貴…。ユダ兄貴…。今「ヨ…セフ」って言いました？

ユダ　　　　:(黙ってじっとうつむいている。)

ベニヤミン　:兄貴…。兄貴…。答えてください。今「ヨセフ」って言いましたよね？そうでしょう？そうですよね？

ユダ　　　　:うむ。それが、つまりだな…。(軽くベニヤミンを見てからまた戻ってうつむく)

ベニヤミン　:兄貴。ユダ兄貴。違うと言っても駄目です。僕は今、はっきり聞きました。兄貴の口から…。兄貴の口から「ヨセフ」という名前が漏れたのを、はっきりと聞きました。ボクには聞こえました。間違いなく聞こえました。ヨセフ…ヨセフ…ヨセフ…ヨセフ…僕は兄貴たちのいるところでは、この名前をとても口にする

ことはできませんでした。父さんにも言うことができませんでした。どうしてかわかりますか。僕が「ヨセフ」という名前を言わなかった理由がわかりますか。

－ ベニヤミン、音もなくむせび泣く。

ベニヤミン：僕も、そうなるかも知れなかったから。
ユダ　　　：ベニヤミン…。
ベニヤミン　：僕も、そうなるかも、そうされるかも知れなかったから。服を脱がされたまま、穴の中に投げ込まれ、そして、名も知らない遠い国に売られていくかも知れなかったから…。

ユダ　　　　:みんな、知ってたのか。

ベニヤミン　:兄貴たちは気づかなかったらしいけど、僕は陰に隠れて一部始終を見ていました。本当は走って行って大声で叫びたかった。やめてくれと。兄さんを助けてくれと。お願いだから、助けてくれと…。

－ 静かにすすり泣く

ベニヤミン　:しかし、僕は本当に怖かった。兄貴たちが僕ら兄弟を殺すかもしれなかったから。遠い昔、アダムとエバの息子アベルがカインに殺されたのように、僕たち兄弟も殺されるかもしれなかっ

たから。怖くて、できなかった。怖くて、怖くて、怖くて、怖くて…怖くてね。（突然ユダを見て大声で）本当に！本当に怖かった！

（静かにすすり泣く）

ベニヤミン　：あの時から、僕は変わりました。何も見なかった。何も聞かなかった。しかし、どうして「ヨセフ」の名前が忘れられましょう。私は兄貴たちがうらやましかった。母もおられ、兄弟たちもいるでしょう。ダン兄さんとナフタリ兄さんを見てもうらやましかった。ガド兄さんと

アシェル兄さんを見てもうらやましかった。自分を産んでくれた母と兄弟がいるということがどれだけうらやましかったのか知れません。しかし、僕にはいませんでした。ボクを産んでくれたラケル母さんは僕を産んですぐ亡くなりました。顔もわかりません。そしてヨセフ兄さんは、無残な姿で僕から離れてゆきました。

ユダ　　　　：ベニヤミン…。それは…。

ベニヤミン　：いいえ。大丈夫です。兄貴たちもその時は若かった。でも、僕の孤独は、その時から始まりました。母さんの顔も知らない私をいつも守ってくれたヨセ

フ兄さんがいなくなり、僕はその後、僕たち家族の中で罪人のような気持ちでいました。息も殺して生きてきました。ユダ兄貴は、あの日以降、おそらく僕の口から「ヨセフ」という言葉が出てくることを聞いたことはなかったはずです。そうです。僕は怖くてヨセフ兄さんの名前も言えなかった…。怖くて…。本当に怖くてね…。だから寂しいとき、苦しい時は誰もいない所に行って名前を呼んでみました。ヨセフ…。ヨセフ…。誰かに聞かれないように、一度言うたび、周りを見回しました。そして再び呼んだんです。ヨセフ…。ヨセフ…。

そういう時は、いつも顔をきれいに洗ってから家に戻りました。夏でも冬でも、何度も何度も顔を洗いました。僕の顔に涙の跡があるのを見つかったら、ひどい目に遭うかもしれないと思ったから…。

（ベニヤミン、長い溜息）

ベニヤミン　：今まで本当に長かった。十三年、十四年という歳月が僕にとってはどれほど長かったことか。今は私も歳をとり、家庭を築くこともできました。子宝にも恵まれ、息子が十人もいます。私はも

う寂しくない。家族があるから耐え忍ぶことができます。家族を励みに、一日一日生きてきました。

－ ベニヤミン、ユダに近づいていく

ベニヤミン　:ユダ兄貴…。兄さんは…。ヨセフ兄さんは生きているんですか？そうなんですか？

ユダ　:それは、私もまだ…。

ベニヤミン　:兄貴…。兄貴…。教えてください。お願いですから、この通りですから。本当のことを教えてください。(ユダにしがみつく)兄貴！ユダ兄貴！兄さん

を！ヨセフ兄さんを！…。（その場でしがみついたまま座り込む）

－ ナフタリは慌てて前に出て慰めながらベニヤミンを後ろに連れて行く。ナフタリ、自分とダンの間に座らせ涙を拭いてあげる。

－ ユダ、頭を下げたままじっと立っている。

－ シメオンとレビ、左隅にいたが、やや気まずそうにユダへと近寄る

レビ　　　：だから、ユダ…。

ユダ　　　：はい…。

シメオン　：だから、お前も「ヨセフ」が引っ掛かるということなんだな？

ユダ　　　:確かなことは分かりません。しかし、今、我々を取り巻いている一連のことを考えるとヨセフを完全に排除することはできないように思えてならないんです。

シメオン　:うむ…。よし…。そうだとしよう。ヨセフが、今回のことにからんでいるとしようじゃねえか。すると、あれから、俺たちがいくつかの困難にぶつかったことも、やはりヨセフによるもんだと、お前は考えてんだな？

ユダ　　　:正直、今現在、ヨセフがどこにいて、今回のことに関して、どのようにかかわっているのか、私にも分かりません。し

かし、逆に全く関係がないとすると、むしろその方がより不自然に思えるんです。

シメオン　:うむ。だとしたらヨセフは…。だから、その…。ヨセフの俺たちに対する感情というか…。つまり…。(口ごもる)

レビ　:(シメオンを見て)ああ、もう、まどろっこしくて、見てらんねえや。(ユダを見て)よ、ユダよ。お前の言いう通り、もしヨセフが背後にいるとしよう。だとしたら、だ。これは結局、オレたちに対して良からぬ感情を抱いているんじゃねえかってことよ。だから、オレらのことを、どっかの回し者だと言ったり、シメオン

兄さんを捕まえて置いたりしてるんじゃねえのか？おい、じゃあ、これ、もしかしたら…。

ルベン　：おい、ユダ、シメオン、レビ、何言ってるんだよ。ヨセフは死んでないのか？ヨセフが生きているのか？え？そうなのか？あの時、獣に殺されたんじゃないのか？オレは見たぞ、血に染まった服を、真っ赤な血に染まったあや織のヨセフの服を見たんだよ。それなのに、ヨセフは、ヨセフは、生きているのか？おい、ユダ、答えてくれよ。シメオン、レビ、き、君たちは、知ってるんだろう？ヨセフは、生きていて、生きて

いるヨセフがボクたちを殺すのか？ラケル母さんがボクたちを殺すのか？ほら、これはラケル母さんの呪い！ヨセフの呪いだと言ったろ！ボクたちは、死ぬんだ。殺されるんだ。ボクたちは、みんな殺されるんだよ！(大声で泣く)

レビ　:ちょっと、ルベン兄さん！(イッサカルを見て)おい、イッサカル！何してんだよ！早くルベン兄さんを連れてけよ！

－ イッサカル、ゼブルンと共に慌てて出てきて、急いでルベンを慰めながら自分のところに連れて行く。

レビ　：（連れていかれるルベンを見ていたが、やがて頭を下げてため息をつき、しばらくした後、ユダを見る）おい、ユダ…。実はな。オレも同じ考えだ。やはり、あれが一番気になる。まあ、ざっくり言って、オレたちの運命はどうなるかってことだ。

ユダ　：ヨセフがこの件について、どのように関与しているかどうかが分からないまでは、下手な憶測をしても仕方がないと思います。ですが、確かなのは、もしヨセフが今まで生きていて、今回、私たちに起こった様々なことに関して

ヨセフ背後にいたとしたら、私たちをどうにかできるチャンスはいくらでもあったはずだという点です。

シメオン　:うむ。もし俺たちを殺そうとしたのなら、最初に捕まった時、殺せたはずだ。しかし、俺だけを人質として捕まえて置いたまま、お前らは送り返した。

ユダ　:はい。奇妙なことは、まだたくさんあります。最初にこの場所に食糧を買いに来たとき、私たちは確かに費用を支払いました。しかし、食料をろばに乗せて帰る途中に宿で確認をしてみると、お金がそのまま荷物の中に入っていたでしょう。

レビ　　　:あ。そうだ。ありゃ、一体どういうこった？まさか、オレたちの中の誰かが盗んでそこに入れたとか？

ユダ　　　:そんなはずはありません。私たちの兄弟の中で、誰かが、エジプトの金庫を開けてお金を盗み出したとは思えないでしょう。今、私たちには食料はありませんが、お金が不足しているわけではありません。それに、私たちは常に一緒にいたではありませんか。

レビ　　　:うーん。よくわかんねえなあ。じゃあ、どうなってんだよ。

ユダ　　　:奇妙な点は、まだあります。今回、再びエジプトに来た時には宰相が私た

ちを自分の家に招待までしてくれたでしょう。

シメオン　:うむ。確かにおかしい。俺たちむかって、やれスパイだ、回し者だとか言っていたくせに、もう自分の家に呼んで食事までもてなしてくれるなんてな。俺たちも最初はここに入れられて、何かされるんじゃないかと思ったじゃねえか。しかし、あんな豪勢なものまで食わしてくれるなんてな。俺たちにちょっと悪いと思ったからかね。

ユダ　:わかりません。わからない点は、まだ他にもいくらでもあります。あの食事の席で、私たちを座らせるとき、こちらが

何か言う前から、あらかじめ歳の順に座らされたのを覚えていますか？

レビ　:あ、言われてみればそうだったかな。でも、そんなの、偶然じゃないか？それに、オレたちを見ていたら何となく見当がついたとか。

ユダ　:いくら初対面でないとはいえ、我々、十一人兄弟の順序を一つも間違えずに当てたのを単なる偶然と言えるでしょうか。それに、歳の差なんてほとんどありません。

シメオン　:ふむ、そうか？うーん、そんなの、お前の思い過ごしじゃねえのか？

－ ユダを除く兄弟たち、雑談しながら再び荷物をまとめだす。ユダだけ立ちすくんで、考え事をしている。

ユダ　　:果たして、そうでしょうか。（うつむいて独り言）計画的な連行、親衛隊の兵士たち、回し者扱い、ベニヤミンの要求、シメオン兄さんの人質、荷物の中に入れられた資金、兄弟たちの順序…。（急に頭を上げる）え？まさか！そんな！

レビ　　:（荷物をまとめながら、軽い感じで）うん？どうした？なんか、あったか？

ユダ　　:あ、いや、何でもありません。ちょっと

突拍子もないことを考えてしまって。

シメオン　:突拍子もないこと？なんだ、そりゃ？気になるじゃねえか。

ユダ　:いや、いくら何でも、まさか。(手を振って見せる)本当に何でもありません。(荷物をまとめ始める)

レビ　:なんでい、お前らしくねえ。(笑う)でもよう。食料も充分な量を買えたし、このように、シメオン兄さんや、ベニヤミンも無事に連れて帰ることができたんだからよ、めでたし、めでたし、じゃねえか？。

シメオン　:何、言ってんだ。散々待たせといたくせに…。ふん！

レビ　　　：まあ、まあ、そう、固いこと言わんで。終わりよければ…っすよ。

シメオン　：なんだ、この野郎。他人事だと思って、勝手なこと言いやがって！どんだけ苦労したと思ってんだ！（言い終わって、レビの方を見て笑う）

ユダ　　　：（硬い表情で）めでたいのはもちろんですが、（荷物をまとめる手を止める）何だか、いやな予感がします。

レビ　　　：いやな予感？なんだよ、縁起でもねえ。

ユダ　　　：わからない謎があまりにも多すぎるんです。どうも、このまま終る気がしません。このままでは、終わらないような気

がしてならないんです。

シメオン　　：おい、ユダ。変なこと言わねえで行こうぜ。もたもたしてたら日が暮れちまうぞ。

－ ユダはじっとうつむいて思いにふける。

－ 他の兄弟たちは、ユダの後ろで床に置いた荷物を取りまとめて出発準備をししている。

－ 急に馬の蹄の音がうるさく響き渡る

声（使者）：止まれ、者ども！ 止まれ！ 止まらぬか！

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

（右から使者と兵士1・2・3登場）

使者　:者ども！止まらぬか！

レビ　:おい、ユダよ。お前が妙なことを言い出すから、こんなことになるんじゃねえかよ。

ルベン　:ユダ！あの人、さっきボクたちを宰相の家に案内してくれた人だよ！

ユダ　:（使者を見て）隊長殿、何事でしょうか。

使者　:この不届き者め。宰相閣下からあのようなもてなしを受けたにも関わらず、貴様らは恩を仇で返すつもりか！

ユダ　:お待ちください。私どもは何のことだ

が全く思い当たりません。

使者　:黙れ！この泥棒猫のような者どもめ！閣下の特別な計らいでお許しを得たにも関わらず、恐れ多くも、エジプト宰相閣下のものを盗むとは何事か！貴様らが我らエジプトを見くびっていなかったとしたら、どうして、このようなあくどいができようか！

ユダ　:隊長殿、私どもは何のことなのか本当に存じません。私どもがこともあろうに宰相閣下の物を盗むなんて。とんでもないことでございます。

レビ　:なんかの間違いでしょう？オレたちが一体何を盗んだって…。

使者　:黙れ無礼者！それでもまだ白状せぬ気か！

ユダ　:隊長殿、何か誤解されているようです。宰相閣下の物を盗むなど、決してそんなことはありません。お金はむしろ私どもが献上させていただくために持ってきたではございませんか。それなのに、どうして恐れ多くも閣下の物に手を出すでしょうか。

使者　:よかろう。それでは今から、貴様たちの荷物を捜索し、その中から宰相閣下の物が発見されたら、どうするつもりだ。それでも白を切るつもりか！

ユダ　:承知いたしました。そんなことは万に

一つもないでしょうが、もし私どもが持っている荷物を捜索し、その中から宰相閣下のもの出てきたならば、その荷物の持ち主は、死を免れますまい。そして、私どもは、永遠に宰相閣下の奴隷となりましょう。

使者　:大変な自信であるな。では、このように致そう。もし、そちらの荷物から宰相閣下のものが出てきた場合、その荷物の持ち主は、永遠に閣下の奴隷となろう。他の者は帰らそうではないか。よいな？それではこれから捜索を始める。（後にある兄弟たちに向かって）今から、自分の荷物を持ってこっちに

来るように。さあ、貴様からだ！（ルベンを指す）荷物を持ってこっちに来い！ぐずぐずするな！早くしろ！

－ 三人の兵士がそれぞれ自分の荷物を持って来たルベン、シメオン、レビ、ユダ…などを順に捜索する。

使者：（ベニヤミンを指す）貴様が最後か？荷物を持って来い！

－ 兄弟は、それぞれひそひそ話をしたり、首をかしげたりしながら捜索する姿を見守る。

－ ユダは捜索する兵士たちの姿を見ながら、考え

に耽る。

兵士1:隊長！見つかりました！

－ 兄弟たち、驚いて兵士の方を見る。

使者　　　:おお。やはりあったか。早くこちらに持って来い！
兵士1　　:(ベニヤミンの荷物をもって使者の方へ行く)
ナフタリ　:(ダンに)ダン兄さん、あれ、ベニヤミンの荷物じゃない？
ベニヤミン:(ただ、驚いてぼんやり立っている)
ダン　　　:何だと？そんなわけないだろう。宰

相の物が、なんでベニヤミンの荷物の中から出て来るんだよ。

シメオン　:ああ…。（頭をかきむしりながら、その場に座り込む）

レビ　:ちょっと待てよ。なんで、よりによってベニヤミンの荷物の中から出て来るんだよ。（ベニヤミンを見て）おい！お前、一体、何をしでかしたんだよ。

ベニヤミン:（レビは、周辺を見て頭を振る）僕は、知らない。僕は何も知りません！

\- 兵士2・3、ベニヤミンの両脇を抱える。

ルベン　:た、隊長、うそだ。こんなはずないで

すよ。おかしいですよ。何かの間違いですよ。どうか、どうか、お願いです、隊長。許してください。うちのベニヤミンを許してやってください！(使者にぶらさがって懇願する)

使者　　　：(ルベンを退けるが、強くは押さない)放さぬか！(兵士を見て)おい、見つけた物をここに持ってこい。

－ 軍人1が見つけたは銀の杯を持っています。

使者　　　：(兵士1から銀の杯を受け取ってユダに見せる)さあ、これを見ろ。これでも違うというのか。

ユダ　　　　:し、しばらくお待ちください。（困惑する）（ベニヤミンを見て）ベニヤミン。これ、これは、どういうことなんだ。お前がこのような物を盗むわけがないじゃないか。

ベニヤミン　:（ユダを見て首を横に振る。涙声で）僕、僕、本当に、本当に知りません。本当です。どうして、あんな物が僕の荷物の中に入っているのか、わかりません…。

使者　　　　:さあ、お前たちも自分の目で見たのだから、誰も否定できんだろう。宰相閣下が占いをされて、すぐ犯人を見つけることができたからよかったものを、

あわや不届きな泥棒に奪われるところだったではないか。(ユダを見て)貴様、さっきの言葉、よもや忘れたとは言わせんぞ。この荷物の中から宰相閣下の物が見つかれば、その荷物の持ち主は、永遠に宰相閣下の奴隷となると申したろう。これで犯人も捕まった。他の者たちに罪はなかろう。安心して帰るがよい。(ベニヤミンを指し)こやつはエジプトに連行して、徹底的に調査する。(兵士に向かって)何をしておる。こやつを連れて行け！

－ 兵士2、3：は！(二兵士がベニヤミンの両脇を

抱えて連れて行こうとする）

ユダ　　　：隊長殿。お待ちください。これは、どういうことなのか全く分かりません。

使者　　　：お前にわかるかどうかが重要ではない。お前も見たように、こやつの（ベニヤミンを指す）荷物の中から宰相閣下の銀の杯が出て来たではないか。だからこやつだけを連れて行って調査をするから、お前たちは帰ってもよいと申しておるのだ。さあ、さっさと立ち去れ！

ユダ　　　：隊長殿、こうなった以上、何を申し上げられましょう。どうすれば私どもの心

の中を開いてお見せできるでしょうか。いずれにせよ私どもの荷物の中から宰相閣下のものが発見されたのですから、私どもがみな、閣下の奴隷になりましょう。

使者　:いや。そんな必要はないと申しておるではないか。盗んだ者だけを連行せよとの閣下の命令だ。お前たちは、早く故郷に帰れ！

ユダ　:隊長殿、しばらく、今しばらく私の話をお聞きください。以前、閣下が私どもの家族について詳細に尋ねられた時、私どもには父がおり、末の者がいるが、彼を産んだ母親と兄は早くこの

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 ： 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

世を去り、老年に得られた子供であるがゆえ、父親がその末の者を寵愛していると申し上げました。

- 照明が少しずつ暗くなってユダだけを照らす。
- ユダ、観客席を向いて話を続ける。

ユダ　　　　:すると閣下が、その末の者を連れて参るようにおっしゃいました。どうして、そのようなことを命じられたのかは定かではありませんが、しかし隊長殿、それは容易なことではありません。父が末の者を寵愛しており、どこに行っても彼を連れて行く有様です。文字通

り一瞬たりとて一人でおくことがありませんでした。それほど愛されたので、もし、そのその者を連れて来るとすれば、そうすれば、おそらく父は心を痛まれ、病に臥せってしまうかも知れません。だからこそ、私は閣下に何度も申し上げたのです。食料の代金として、もっとお金を持ってこいというのでしたら持って来ましょう。私どもがお持ちした金が足りないというのでしたら、下さる分だけでも有難く頂きましょう。しかし、しかし末の者だけは、私の父の傍に留まらせてくださるよう何度もお願い致しました。ところが、閣下は、なぜ

か末の者を必ず連れて来るよう申し付けられます。そうしなければ、二度とエジプトに来ることはできないと厳しくおっしゃいました。

ユダ　:隊長殿もご存知でしょう。今、この地域に二年前から続く干ばつは空前絶後の災害です。私どもの住むカナンの地でも、すべての穀物が乾き、地はひび割れ、ひと握りの食糧さえも得ることができませんでした。今、この地域で食糧がある国は、唯一エジプトだけです。エジプトだけが私たちの命綱なのです。もし、エジプトで食糧を得ることができないとしたら、私たちは荒野

の真ん中で草が枯れていくように、死んでいくしかありません。

ユダ　：宰相閣下は私どもの兄弟であるシメオンを人質に取り、必ず末の者を連れてくるようおっしゃってから残りの九人を故郷の地に帰してくださいました。ですが、それでも老いた父は末の者を手放すということを長い間、拒み続けていました。それほど、末の者を愛していたのであります。しかし、時は流れ、かつて持ち帰った食糧は底をつきました。私たちは、父に再び懇願いたしました。食料が必要です。食糧を得るためには、エジプトに行くしか手

はありません。ところが、エジプトの宰相閣下が末の者を連れて来なければ、食料はおろか、エジプトに入ることすら許さないと言われました。父は、お前たちが末の者を連れて行って、もしものことがあったら、もう生きていくことができない。これ以上、生きていくことができないと言いました。父と末の者の命は一つにつながっているようなものです。父は今年で百三十歳です。もし今度、末の者を連れて行かなければ、父は間違いなく生きていくことができません。死んでしまうでしょう。

－ 照明が少しずつ明るくなる。

－ ユダ、照明の明るさを見計らって、再び使者へと向きを変える。

ユダ　　　：このようなことを承知している私どもが、たとえ自分たちだけ無事に故郷に戻ったとしても、父が死ぬことになるとなれば、息子として、どうやって受け入れることができましょう。隊長殿、お願いです。お願い申し上げます。どうしても、その者を連れて行かれるというのであれば、私たちも一緒に連れて行ってください。

使者　　　：（しばらく悩む）よし。そこまで言うの

であれば、よかろう。望み通りにしてやる。（兵士に向かって）おい。こいつらも、みんな連れて行け！

軍人1、2、3：は！（連行するために兄弟たちに近づきながら照明が暗くなる）

第四章　幕。

第五章　追及

－追及されるヨセフ

登場人物

アセナテ　（ヨセフ－ツァフェナテ・パネアハの妻）

場所

ツァフェナテ・パネアハ宰相の執務室または二人の部屋

なりませぬ。断じてなりませぬ。私までも騙そうとされるのですか。たとえあなたの神を欺くことができようとも、私を騙すことなどできませぬ。もし私の言葉が間違っているのなら、あなたの神がわたしを幾重にも罰せられることを望みます。

ツァフェナテ・パネアハ閣下。今、あなたは、エジプトの皇帝のような方です。大丈夫です。今、私たちの話を聞く人は誰もいません。すでに席ばらいを命じておきました。しかし、たとえ誰かが聞こうとも、これを否定する人はないでしょう。今この国でツァフェナテ・パネアハに逆らえる人などおりせん。これは陛下があなたを皇帝に次ぐ権威とされたからです。いや、むしろ陛下もまたあなたの進言に従っておられます。その証拠がまさにあなたの手の中にあると言

えましょう。その指に輝く指輪は他でもない陛下ご自身の手で渡された皇帝の印章です。九年前、その指輪と共に与えられた閣下の威厳は今でも色褪せることなく輝いています。

　あなたは過去に七年続いた大豊作の間、徹底的に備えをされました。これはあなたが陛下の夢を解き明かし出来たからこそ可能だったことでしょう。最初は疑う人間もいましたが、あなたの預言は的中しました。エジプトの建国以来、あのような驚くべき大豊作はありませんでした。食糧や家畜が溢れ、統計を試みても増える一方の収穫量に追いつくことができないほどでしたね。国中の人々は、あの豊作が永遠に続くであろうと信じていました。誰も七年後に飢饉が襲ってくるとは想像できないほどの大豊作でし

た。人々はお金に溺れました。酒に酔いしれました。享楽に浸ってました。歓喜に我を忘れていました。労働は消え、怠惰が支配し始めました。潤いがもたらす喜びはいつのまにか退屈となっていきました。実に愚かな人たちです。もしかすると幸せとは、人々にとって贅沢なのかもしれません。人々は幸せをどのように受け入れるべきかを知りませんでした。もし、あなたがいなかったら、この国は、飢饉に襲われる前、豊作のために滅びてしまったかもしれませんね。

　しかし、エジプトの神々は信じられないほどの贈り物を準備しました。それは、あなた、ツァフェナテ・パネアハ閣下です。長い間続いた豊作がもたらした快楽に溺れ堕落する直前だったエジプトの国民をあな

たは厳しく戒めました。この豊作は長続きしない。七年で終わる。その次には恐ろしい七年間の飢饉に見舞われる。飢饉が始まると、今の豊作の間に得られたものがすべて消え失せてしまうだろう。

その時は誰も信じませんでした。陛下の家臣たちも皆があざ笑いました。ましてやあなたの妻である私ですら、にわかには信じることができませんでしたから、無理もありません。しかし、誰もあなたの権威に逆らえませんでした。それは、何よりも陛下のおかげです。あなたを否定することは、解き明かしをした陛下の夢を否定するであり、それはつまり陛下を否定する反逆とみなされたからです。

あなたは、国の至る場所に倉庫を建て、あふれる穀物を蓄えさせました。一部の家臣たちは、このとき

を利用して兵力を増やし、軍事力を高めようと主張しました。それまで一貫してあなたを支持してきた陛下でさえも、この時だけは、心を揺り動かされたような気がします。それもそのはずでしょう。陛下の野望はあまりにも偉大です。その野望は、この全ての国をご自分のものにされたとしても満たされることはないに違いありません。そんな陛下は当然強い軍事力を望まれました。このように富が溢れて家畜が溢れ、そして穀物が溢れる今こそ軍事力増強のための絶好の機会だと思ったことでしょう。しかし、あなたの方針は変わりませんでした。躊躇われる陛下の前に立ったあなたは断言いたしました。

「今、軍事力を育てれば、今後、必ず迫ってくる飢饉が近づいた時、兵力を維持するために、より多く

の食料が消費される。来たるべき飢饉は、エジプトだけではなく、この世界全体を覆うものであり、その時に備えて食料を保存しておけば弓矢一つ使わず、馬一頭使わずとも、天下を手中に収めることができる。」

陛下と言えども揺るぎのないあなたに対して反対することはできなかったようですね。陛下は以後ツァフェナテ・パネアハに背く者は極刑に処するとの勅令を出され、誰であれもあなたの政策に反対できないようにされました。

私はどれほど誇らしかったか、私がツァフェナテ・パネアハの妻という事実がどのよう誇らしかったか知れません。しかし、一方では、不安な気持ちに駆られました。それは他でもない、エジプトの家来たちの

嫉妬心をよく知っていたからです。祭司であるの父ボディベラも常にその点を心配していました。

いくら陛下が勅令を出されたとしても、彼らの謀略は鎮まりませんでした。彼らは待っていたのです。大豊作が終わるのを待っていました。そして、あなたが予測した七年が過ぎても飢饉に見舞われない場合、彼らはあなたを陛下に告発するつもりでした。エジプトの復興を妨げる偽預言者と糾弾し、権力の座から引きずりおろうと企んでいたのです。

私は自分の立場があまりにも悲しゅうございました。。豊作の期間中、エジプトでは、黄金があふれ、民たちは銀を粗末に扱うほどでした。道に落ちているお金も拾いません。私は、エジプトの民の一人として、この驚くべき豊作が永遠に続いてほしいと願い

ました。しかし、一方で、私は飢饉を待たなければなりませんでした。飢饉が来なければ、あなたが窮地に追い込まれます。いいえ。あなただけではない。権力に目がくらんだ彼らはあなたを引きずり下ろすだけでは事足りず、陛下さえも危機に陥れるかもしれません。ああ、なんと恐ろしいこと、考えただけでも胸が張り裂けるようです。

　しかし、あなたはこれを知っているか知らないか、七年の間に一貫した政策を展開していきました。休む間もなく、全国を巡回しては貯蔵量を確認して、倉庫を増築しました。一日に何度も命令を下して印章を押されたので、印章の指輪は、かなりすり減っているようにも見えるほどになりました。

　やがて七年が過ぎしようとしていました。あなたに

不満を抱いた者たちは、十分な資金をもとにして秘密裏に軍事力を集め反逆の準備を進めていました。期日が過ぎても飢饉が起こらなかったら、彼らはすぐにでも動く態勢でした。

　ああ。ところがどうでしょう。あなたが預言したその年、その月から収穫が絶え始めます。土地が乾き出します。天の窓が閉じてしまったかのように雨が降りません。過去、数年の間には収穫期になると忙しく動いていた人手が止まってしまいました。いくら土地を耕そうとしても、石と岩で埋まるばかりで、手の施しようもない始末です。

　人々の心は単純です。あなたの予測が的中すると反逆勢力の中で分裂が起こったのです。最終的に彼らの密告により、すべての反逆者だけでなく、

その家族や親戚たちまでも陛下の前で無残に殺されてしまいました。

　私はエジプトの祭司の娘、あの空高く昇る太陽を崇拝する祭司の娘です。しかし、私は折に触れて言ってくださるあなたの神のことも慕っております。ヤハ、とおっしゃいましたっけ？興味深かったのは、あなたの曽祖父様アブラハムの話でした。その方が七十五歳の時、突然どこからか聞こえてきた呼びかけの声に従って、それまで住んでいた家を捨てカナンの地へと向かったそうですね？その方を導き出した神はカナンの地を与えると約束し、それだけではなく、彼の子孫を天の星のように海辺の砂のように増やしてあげると言ったもかかわらず、長い間、息子一人与えられなかったそうではありませんか。さぞ辛

かったことでしょう。それでも子供を身ごもることができる年齢だったら希望も持つこともできたでしょうけれど、その方の息子であなたの祖父様であるイサクを得たのが百歳の時だったとか。

　私は以前、あなたの大伯父様イシュマエルについて教えてくれたことを覚えております。ハランの地を出発して十年になっても息子がなかったため曾祖母様のサラが曽祖父様に、自分の侍女ハガルを通して息子を得てほしいとお願いすることで生まれたのがイシュマエルだったとおっしゃいました。それに、あなたはサラの判断が適切でなかった、神の働きを待たなければならないと、神の考えではなく、人の考えに基づく行動は、いつか我々を突き刺すトゲやいばらとなって帰ってくると言われした。しかし、私は

同じ女性として、あなたの曾祖母様の心がわかるような気がします。一年や二年でもなく十年もの間、何の要求もしない方が、むしろおかしいでしょう。結局、アブラハムに言われた約束は二十五年後に成就されたそうですね。

あなたが聞かせてくれた言葉の中で最も興味深い点があります。あなたの神は二十五年も待たせた後に得られた息子を自分に生け贄として捧げるよう命じたんですって？そのようなことは、ここエジプトにもありました。最も純粋で最も高貴な人を偉大な神に捧げる神聖な儀式です。アブラハムをハランの地まで呼び出した神は三日の道のりの先にあったモリヤ山まで登り、息子を全焼のささげ物として捧げるようにと命じられたので、息子を縛って命を奪おうとし

たところ、神の使者が現れ、これを阻止したと言いました。神は息子の代わりに全焼のささげ物としてささげる雄羊を備えてくださったのでしょう？それで曽祖父様は、その場所の名をアドナイ・イルエ、主なる神は備えられるという名前を残したという話が私にはとても印象的でした。

　あなたの信じる神を考えるといろいろな意味で笑みがこぼれます。子孫を天の星のように海辺の砂のようにしてくださるとアブラハムに言われながら、結局、曾祖父様が得られ息子はイシュマエルとイサク二人だったそうじゃないですか。しかも、神の約束された、曾祖母様サラとの間に生まれた息子はイサクだけとのことです。幸いなことに、曾祖父様がお亡くなりになる十五年前に、あなたのお父様であるヤコ

ブと伯父様のエサウを見届けられました。さぞ安心されたことでしょう。お逢いしたこともない曾祖父様の喜ばれるお顔が見えるようでございます。

　曽祖父様アブラハムは最後まで準備される神を信じながら感謝の心を忘れなかったと言いますから、とても素晴らしいお方だったでしょうね。私には、とても真似できません。あなたの祖父様であるイサクは全くの父親似だったそうですね。すっかり物心ついた年頃だったにも関わらず、お父さんが自分を縛って薪の上にのせ、刃物を振りかざしても、抵抗しなかった祖父様。ホホホ。あら、笑って申し訳ありません。それが信仰なのか従順なのか、それとも…フフッ。

　あなたの言葉によれば、祖父様の人生は平穏だ

ったそうですね。これといって欲もなく争いもせず、与えられたことに感謝する生活でした。あなたが時折おっしゃる話を聞くと、備えられる神によって備えられたすべてのものを享受するだけだった生活は、だからこそ平穏な人生を送ることができたのかもしれませんね。

備えられる神。私はこの言葉がとてもに気に入っていました。もちろん、私たちを試される神を好きになることはできません。でも、信じて待っていれば備えてくださる、導いてくださるという点においては魅力を感じます。

あなたの神は、エジプトのために、あなたのような優れた指導者を備えてくださいました。夢のような大豊作が終わり、今はひどい飢饉が始まって二年目

になります。あれほど木々の生い茂っていた周辺諸国の野原には砂ぼこりが立っているだけです。ただ、エジプトだけが豊かさを享受しています。潤いがあふれています。大小の国々は、すでに危機に瀕しています。エジプトを脅（おびや）かしていたすべての王たちは使者を送って金銀財宝と香料と奴隷たちをも運んで来ては、少しでも食料を得ようと躍起になっています。これ以上持ちこたえることができない国は、陛下に国土を上納しているのが実情です。全くあなたが予測されたように、弓矢一つ射ることなく、馬一つ失うことなく、周辺国のすべてを手に入れることができました。これがすべてあなたの知恵と陛下の信頼によって成し遂げられた奇跡でなく何でしょう。

　陛下がその夢を見られた時、多くの人々は緊張し

ました。陛下は憂いのあまり、食事もお召し上がりにならなかったほどでしたから。しかし、これぱかりはどなたも解決できませんでした。いくら腕利きの占い師であっても陛下の夢の話を聞いた者たちは、一様にを唇閉ざしてしまいました。私は丁度その時、父と一緒に遠くから陛下のご様子を拝見していたので、よく覚えております。もしその時、献酌官様がいなかったら、陛下の機嫌を損なわれ、ひどいことになったかもしれません。

　まさにその時、献酌官様が二年前、監獄に閉じ込められていた際に出会ったある青年のことを陛下に言われました。話によると、その青年はカナンの地に住んでいたヘブライ人として兄弟たちに見放され奴隷として売られてきては、ポティファル将軍の家で

仕えていた折に、無念にも濡れ衣を着せられ監獄に閉じ込められた人物なのだそうですが、ご自分が監獄におらえれるとき見た夢を、その青年が解き明かしをしてくれたとのことでした。

結局、その青年の解き明かし通り、自分は釈放され、一緒にいた料理官は処刑されたそうです。普段だったらそんな話に耳を傾けることなどなかったはずですが、あまりにも心苦しかったのか、陛下は意外にも、その青年をすぐに呼んでくるよう申し付けられました。

無念の人生、無念の濡れ衣、無念の罪…。どれほど陳腐で聞き苦しい言葉でしょうか。今この瞬間にも監獄に閉じ込められてる中から誰でもいいから連れてきてご覧なさい。皆が申し合わせたように無

念という言葉だけを並べたてるはずです。誰一人として自分の罪を認めません。これから目の前に現れる人間に対して私がどんな想像したのかは見当がつくはずです。卑しく悪賢い狡猾な姿の若者を思い浮かべました。この世の荒波にすたれた青年を想像しました。

　どれほど時間がたったでしょう。一人の青年が王室の中へと導かれてきました。あなたを初めて見たのは、まさにその時でした。正直、驚きました。卑しさなど、悪賢さなど、狡猾さなど、微塵も感じさせません。あなたの目は実に澄んでいました。透き通っているようでいて、熱さを感じるものがありました。あなたがどこに視線を向けても、まるであなたが見つめるその場所が真っ黒く焼け焦げるかのように強烈で

した。

　陛下も同じことを思っておられたのかも知れません。あなたをご覧になった時、しばらくは何もお話になりませんでした。何かにとても驚かれたご様子です。献酌官様に勧められて初めて、夢のことをおっしゃいました。すると、さらに驚くべき光景が繰り広げられたのです。あなたの口が一度開かれたと思ったら、まるで堰を切ったように休むことなく信じられない言葉が飛び出してくるではありませんか。それは、私が今まで聞いたこともない神秘的な言葉でした。思いもよらなかった解き明かしでした。

　あなたはそのようなお言葉を一度も詰まらせることなく話されていましたね。あなたが言い終えると陛下をはじめ、他のすべての家来たちが我を忘れて見

入っていました。いくら学識が高く自尊心の強い者だったとしても、誰があなたの解き明かしに異議を唱えることができたでしょうか。あなたの表情は話をはじめられた時と全く変わりませんでした。あなたのお顔は天の御使いのように輝いていました。その輝きは、王室全体をまぶしく照らしておりました。

　陛下はすぐにその場であなたにエジプトの宰相という高い官職とすべての権限を授けると言われました。そして数日後、私はお父様を通して陛下が直接あなたとの縁談を提案されたということをお聞きしました。お父様はその場で陛下の命に従うと申し上げたそうですから、私がこれをお断りすることはできません。

　正直に申し上げますと不安でした。一にも二にも、

あなたが宰相という高い地位にの方だったからです。

　この王宮は嫉妬と謀略が横行する世界。いくら権謀術数に長けた者あっても、一晩のうちに、ちり芥と化してしまう世界です。あなたがポティファル将軍家の監獄に閉じ込められたとき出会った献酌官様と料理官様も同様です。彼らのように絶対的な権威を持つ者でも中傷と謀略の罠から逃れることはできませんでした。幸運にも献酌官様は釈放されましたが、料理官様は結局に木に吊るされてしまったではありませんか。陛下の寵愛を受けた者であったとしても、いつ何時(なんどき)、そのような恐ろしい魔の手にかかって犠牲になるかも知れないのが、ここ王宮なのです。

　あなたが異邦人であったということですか？いいえ。そのようなことなどは全く問題になりませんでし

た。あの時、陛下の前での堂々としたお姿、聖なる泉が湧き出るように夢を語るあなたの姿を一目見たならば、このエジプトのどこを探してみても、あなたに心を許さない女性などいなかったはずです。私も女として同じです。あなたが宰相ではなく、また奴隷に戻ることになったとしても、私はあなたの心を得るために私の人生すべてを捧げたに違いありません。

　月明かりの夜、あなたはこんなことを言ってくださいました。ミディアン人の商人たちによってエジプトに連れて行かれてくる時のこと、その時も月明かりの夜に空を眺めてみたところ、すぐにでも落ちるような大きい満月と多くの星が見えたそうですね。その月や星をみて、あなたは以前に見た夢のことを思い浮かべたと言っておられました。

「夢の中では、太陽と月と十一の星が私に丁寧にお辞儀をした。そしてまた、神が曾祖父アブラハムにされた御言葉、子孫を天の星と同様にしてくださると言われた。私の見た夢は、確かな希望であり、アブラハムも私も眺めた夜空に輝く無数の星たちも神が見せてくださった希望だったのだ。しかし、当時の夜空に浮かんでいた月と星は一様に私をあざ笑っているように見えた。未来も希望もない、ただ冷たくあざ笑っていただけだった。」

あなたは底を見たという話もしましたね。人生の底を見たと言いました。兄弟たちからひどいことをされてた上に銀二十で売られ、ここエジプトのまで連れてこられたときのことです。その時あなたは地獄を見たと言いました。私は初め、その言葉を信じることが

できませんでした。香油のようにいつも優しいあなたからそのような恐ろしいことを感じることはできなかったからです。

　私には分かりかねます。幼い頃から豊かな生活に慣れていたからしょうか。もどかしい限りでした。私の心を知っているのかどうか、その話をされるときには、とても寂しそうに見えました。普段の私を見つめる視線は穏やかですが、過去のことを口にされる時だけは、いつも悲しい表情をされておりました。十七の若さで奴隷として連れてこられたあなたは、どれほど大変なつらさに耐えなければならなったでしょうか。奴隷になってだけではなく、監獄でも長い間過ごされたその心の痛みは、私の想像を超えるものなのでしょう。そのようなお姿を見ると、本当にあなたには言

い難い過去がある方であるということを推測することができました。

　しかし、あなたは逆境を力に変えられる方です。ポティファル将軍の家に仕えながら、あなたはエジプトを学びました。言語と文化を学べたことでしょう。王の監獄、権力の争いに敗れた者が入る監獄に閉じ込められている時には王室に関して学ぶことができたと私に教えてくださいました。

　おかげで陛下の前にお立ちになって、高い地位をお受けになられた後も、何の問題もなく職責を遂行されていくことができました。どこの誰があなたを異邦人呼ばわりをするでしょうか。どこの誰があなたに向かって奴隷だったと言えるでしょうか。どこをどう見ても、あなたは正真正銘エジプト人の中のエジプ

ト人であり陛下の有能な臣僚の中の臣僚です。あなたの神は本当に備われる神です。アブラハムやイサクのための備えは知らなくとも、偉大なエジプトのためにあなたを備えて下さいました。ご自分にとっては言い尽くせないほどの苦痛と苦難の時であったことでしょう。でも私には中傷と妬みの化身となったあなたの兄たちや、あなたを買ったメディアンの商人、ポティファル家での奴隷生活、そして監獄生活までも、あなたの神がすべて備えて下さったかのように感じられます。

　私は時々あなたの目を見て、多くのことを考えます。あなたの目には、聡明さが生きていました。両目に宿る透明感は以前と変わりません。むしろ年を重ねるごとに輝きを増していきました。その目を見るた

びに、あなたが私のそばにいるという事実を確かめることができました。あなたの神への感謝があふれました。あなたのその目が私にどれほど大きな力となって下さったことか、どれほど大きな癒しになって下さったことか、どれほど大きな励みになって下さったことか知れません。

しかし、そんなあなたは…。そんなあなたは！あの日以来、お変わりになりました。あなたの兄弟がここエジプトへ食糧を得るためにくるという知らせを聞いてから、あなたは変わりました。あなたの顔もあなたの目も、あなたの心までも変わっていくのが私には見えました。

あなたは待っていましたのよね。彼らはカナンの地で、ここまでの食糧を得るために来るという事実を

あなたは知っていました。この二年間、あなたはご自分の力を利用して、彼らがいつ来るかを密かに監視していたのです。だからこそ、彼らが来たとき、すぐに連れてくることができたのです。しかし、いくらあなたと言えども、何の罪もない彼らを罰することなどできませんでした。。そこで思いついたのが間者、スパイ、回し者いう罪でした。気を悪くなさらないでください。権力を持つ者にとって最も扱いやすい罪がまさしくにこの回し者という疑いだったでしょう。

　過酷な飢饉の中にも二年間を耐えたのを見ると、あなたのお父様がどれほど多くの財を築いていたのか見当がつきます。でも、それ以上は難しかったのでしょう。

　あなたは誰よりも彼らに会いたがっていましたが、

いくら待っても彼らが動こうとする気配がありません。あなたは業を煮やしていたはず。おそらく彼らが来るのを二年もの間、昼夜を問わず待っておられたことでしょう。

彼らがこちらに向かってるいう知らせを聞いて、あなたは大変喜ばれたそうじゃありませんか。ところが突然、会わないと言われました。断じて会わないとまでおっしゃいました。私は最初、とても怪訝に思われましたが、すぐに分かりました。理由はただ一つ。彼らの中に、あなたのこよなく愛するベニヤミンがいなかったからです。

ああ、ベニヤミン、ベニヤミン、ベニヤミン…。あなたは彼らが来れば当然ベニヤミンも一緒に来ると思っていたことでしょう。ところが、見当たらない。何度

確認しても彼らは十人でした。あなたは緊張しました。焦りました。ベニヤミンが生きているのか死んでいるのかすらわかりません。あなたは計略を練ました。

　まず、あなたはシメオンを人質としました。ルベンでもなくシメオンを連れて行くように命じられたのです。普通だったら長男のルベンか、あるいは卑劣な人間だったら最も下の者を選んだことでしょう。あなたもそのように考えたはずです。だから、最初はルベンを人質にしようとしましたが、すぐに考えを変えシメオンを閉じ込めるように命じられた時、私は不思議でした。なぜあなたは長男のルベンでもなく、一番若いゼブルンでもない次男のシメオンをお選びになられたのだろうか。

　理由は簡単です。カナンの地でのあの事件の時、

長男のルベンは他の兄たちとは違って、あなたを庇ったのを未だに覚えていたからです。だからこそルベンではなくシメオンを人質にしたのです。私はその瞬間、すべてを悟りました。何をですって？それは、真実です。あなたの本心です。あなたは許していない。あなたは彼らを許していませんでした。血を分けたあなたの兄弟たちを許していなかったのです。

次に、兄たちに何を要求されましたか？あなたはシメオンを人質にして、末のベニヤミンを連れて来るよう命じられました。当然のことです。初めからそれがあなたの狙いでしたから。そして彼らから受け取ったお金を食料と共にこっそりと彼らの荷物の中に戻しておくようにされましたよね？まさか、これが慈悲深きあなたの配慮？いいえ、そんなはずありません。

あなたは彼らから一銭も受け取りたくなかったのです。汚らわしいそのお金をすべてそのまま返しました。

　あなたのお父様も大した方ですね。次男が捕らわれているというのに、お父様は末っ子であり、あなたの唯一の実の弟を送ろうとはしなかったようです。そして時間が過ぎ、そのとき持っていった食料が底をついたころになってようやくベニヤミンを送ってきました。あなたは一日を千年のように待ってたことでしょう。

　最初は彼らに会おうとしなかったあなたでしたが、これで立場が逆転しました。あなたは彼らを待ち焦がれるようになったからです。

　私にこんなことを漏らしておられましたよね？もし

かしたら、長い間逢っていないので顔を忘れていたらどうすればよいかと。しかし、そんな心配は無用でした。その顔の輪郭、目鼻立ちや肌や髪。どうして見間違えることができるでしょうか。彼を初めて見た私にも、あなたの弟ベニヤミンを初めて見た私にも、彼があなたと同じ血筋だとわかるくらいそっくりでした。ベニヤミンの顔を確認してからようやくお父様の安否を尋ねるほど、あなたはベニヤミンに夢中でした。

あなたは、それから彼らにごちそうをもてなしました。自分たちが何も言わなかったにもかかわらず、あなたが年齢順に席に着かせるのを見て彼らは驚いていました。気づきませんでしたか。それもそのはず、あなたはベニヤミンだけを見ていたからでしょう。

そして、あなたは、食事をベニヤミンにだけ五倍もの量を与えました。ホホホ。そんなに食べられるはずないじゃありませんか。あなたはあなたなりにベニヤミンに何かをしてあげたかった。しかし、何をしてあげればいいかをそれほど知らなかったのでしょう。

理由はどうであれ、あなたが喜んでいる姿を見て、私も嬉しく思いました。あなたがまるで子供のような無邪気な姿を、長い間見ていなかったような気がしました。

あなたは今、酔っています。いいえ。葡萄酒よりもさらに強いベニヤミンという酒に酔っているのです。

それだけではありません。あなたは、もしかしたら、権力という酒にも酔っていらっしゃるかもしれませんね。

陛下があなたにされたのお言葉を覚えていらっしゃいますか。

「おまえが私の家を治めるがよい。私の民はみな、おまえの命令に従うであろう。私がまさっているのは王位だけだ。」とおっしゃるほど、あなたは名実ともにエジプトの支配者です。

あなたは偉大です。あなたの一言で彼らの命を一瞬に吹き飛ばしてしまうこともあります。それほどの力をあなたは持っています。あなたの知恵とあなたの清さ、あなたの忠誠心からすれば、それだけの力を持っていて当然です。今までその力をむやみに使ったことなど一度もありませんでした。今までどんなに偉大な君主よりも、あなたは賢明で知識と知恵に満ちております。あなたは、この数年間、陛下に

は勿論のこと、私も失望させたことがありません。ですが、あなたは、兄弟の方々に会ってから変わりました。

私にはわかります。あなたは頭の頂からつま先まで、アブラハムを恨んでいます。イサクを恨んでいます。ヤコブを恨んでいます。いや、それだけでしょうか。天地を創造されたというあなたの神をも恨んでいます。アブラハム、イサク、ヤコブの子孫が彼らだから、神が彼らを未だに生かしておいたからです。違いますか？

あなたはいつの日か私に、このようなこともおっしゃいました。神は沈黙する神だと、アブラハムやイサクには多くのことをお話になりながらも、神があなたには沈黙を守り続けていると。

しかし、あえて私はあなたに申し上げます。沈黙したのは、あなたの神ではなく、他でもない、あなた自身なのです。

あなたは、三つの沈黙をされました。一つ目は、愛に対しての沈黙、二つ目は、慈悲に対しての沈黙、三つめは、許しに対しての沈黙です。

私はあなたを愛していました。私の体と心を尽くして愛していました。それは、今、この瞬間も変わりありません。しかし、あなたは私の愛に沈黙しました。否定しても無駄です。私も知っております。あなたも私を愛してくださったことを。しかし、その愛は<ツァフェナテ・パネアハ>としての愛です。あなたが私に与えられた愛は、ツァフェナテ・パネアハとして、エジプトの宰相として私を愛してくださっただけです。

でも、ツァフェナテ・パネアハはあなたの半分にすぎません。あなたの残りの半分、もう一つの半分。それはヨセフとしてのあなたです。あなたは私をヨセフとして愛していない。なぜなら、ヨセフとしての愛は私に向けられたものではなく、あなたがカナンの地に置いてきたベニヤミンに向けられたものだったからです。私はすべて捧げて愛しましたが。あなたから与えられたのは、中途半端な愛だけでした。私はあなたのすべてを愛そうと思いました。宰相としての高い地位についているあなたとしてだけでなく、あなたのお父さんの十一番目に生まれた子として、ミディアン人の商人に売られていった弟として、濡れ衣を着せられ、長い間、囚人となっていた奴隷ヨセフとしてのあなたも愛そうとしました。でも、あなたは私の

心を受け入れてはくれませんでした。ヨセフとしてのあなたは、ただベニヤミンだけを見つめていました。空を見つめるときも山を見つめるときも、ましてや私を見つめるときも、その目の中には、私以外にベニヤミンがいました。誤解しないでください。女の見苦しい嫉妬心で申し上げているのではありません。あまりにも危うく見えました。薄いガラス玉のように触れるだけで、割れてしまいそうでした。私は今までツァフェナテ・パネアハとだけ生き、ヨセフに対しては片思いをし続けてきたのです。あなたは私への愛に沈黙しました。

　あなたは慈悲に沈黙しました。私は覚えています。多くの人々があなたのもとに来ては食料を求めるときのあなたの目を覚えています。お金が尽きたと言

えば、家畜を渡せと言い、家畜も尽きたと言えば、土地を渡せと言いました。彼らは今、土地を失って奴隷になったも同然です。一つ伺います。これもまた、あなたの神がさせたことでしたか。彼らの土地を没収して小作農に転落させて、高い税金を課すようにあなたの神が命じたのですか。あなたは優しい人です。苦難を知っている人です。しかし、あなたこそ利己的な人間です。あなたのためになる人には慈悲と恵みを施すことを惜しまず、そうでない人に対しては、あまりにも無慈悲な方です。あなたに土地を売りに来た人が他の民であれば、そうすることもできましょう。しかし、彼らはエジプトの民です。自由人だった人々です。あなたは彼らの土地を没収して陛下の所有としてしまいました。あなたには陛下の笑い

だけ見え、彼らの涙は眼中にもありません。あなたは貧しい人々に対する慈悲に沈黙しました。

そして、あなたは今、許しに対して沈黙しています。他でもない兄たちの許しについて沈黙しています。そうさせているのがベニヤミンです。あなたのベニヤミンに対する思いです。冷静になって考えてみてください。ベニヤミンはあなた兄たちの死を望んでいるのでしょうか？同じラケルお母様の子であるあなたの手が血で染まることを喜ぶでしょうか？そんなに彼らを殺したいのであれば、いいでしょう。そうしてください。誰があなたを咎めることができましょうか。誰があなたを再び牢に入れることができましょうか。この国の民の半分を虐殺したとしても陛下はお責めにならないでしょう。ましてや、外国人の数人を殺すく

らいで、いくら広いエジプトといえども、あなたを非難する者などおりません。私に申し付けて下さい。どの剣をお持ちしましょうか。陛下から賜った宝剣をお使いになりますか。それとも、自分の土地を奪い奴隷にしてしまった小作農たちが使う鎌を持ってこさせましょうか。

閣下。お願いです。この通りでございます。中途半端の愛でも満足しましょう。いや、残りの半分の愛までも奪っていって結構です。どうか、その憎しみを抑えて下さい。どうか、その憎しみの炎を消し去って下さい。

怒らずに聞いてください。私の目には、あなた自身が燃え盛る炎によってますます黒く焦げていく、あなた自身がますます細くなっていく蝋燭の芯のよ

うに見えてならないのです。

　あなたの神はなぜ彼らをここに、エジプトにまで送られたと思いますか。あなたに復讐させる機会を与えるためだと？あなたをカナンの地で奴隷商人に売り渡した彼らの命を奪わせるために、あなたの前にひざまずかせたとお思いですか？彼らの死が目的であったならば、とっくの昔にカナンの地で死なせたはずでは？それともあなたの神は、彼らの血をこの地に注ぐためには、あなたの力を借りなければならないほど無力なのですか。さあ、答えてください。

　いや、私があえて申し上げるまでもないでしょう。あなたはすでに知っておられます。あなたの神はなぜ彼らをあなたに送ったのかを知っておられるでしょう。

あなたは彼らに会ったとき二度の涙を見せられました。

一度目の涙は最初に会った時でした。あれは怒りの涙です。憎しみの涙です。恨みの涙です。復讐の涙です。私がもし、その涙の前にいたなら、私は恐怖のあまり、立っていることすらできなかったことでしょう。

二度目の涙は、彼らが連れて来たベニヤミンに逢った時でした。あれは喜びの涙、愛の涙でした。あなたはすぐにでも駆け寄ってベニヤミンを抱きしめたかったはずです。それと同時にあなたは、すぐにでも剣を抜いて兄たちの首を斬ってしまいたかったでしょう。その心の中に詰まっている恨みを一度に晴らしたいと思ったかもしれませんね。しかし、あな

たにはできませんでした。最初、彼らに会ったときには、ベニヤミンがいませんでした。でも、ベニヤミンを連れて来させるためには彼らが必要でした。では、二番目はどうでしょう？私は、彼らがベニヤミンを連れて来たという知らせを聞いて、これで彼らの命も終わりだと思いました。彼らがベニヤミンを連れてきたからと言って、あなたが兄たちを許すはずはありません。許すどころか、あなたは今、彼ら全員を殺そうとしています。あなたは彼らを殺しベニヤミンだけを生かしておくつもりだったからです。

ですが、今度もできませんでした。ベニヤミンを愛したあなたは、彼の目の前で血を流すことは望まれなかったからです。何とかして、彼らからベニヤミンを遠ざけようとされるはずでした。

私の心配は的中しました。彼らの荷物の中に穀物を入れ、やはり彼らの持ってきたお金をそのまま入れました。それだけではありません。ベニヤミンの荷物の中に銀の杯を隠しておいたのです。

　その理由は何でしょう？あなたの使者を使わし、その荷物の中を捜索して、ベニヤミンの荷物の中から銀の杯が見つかれば、他の兄弟たちは帰らせ、ベニヤミンだけを連れて来させたかったのではありませんか？もう一度伺います。その理由は何ですか？おっしゃらないおつもりですか？では、私が申し上げます。あなたはベニヤミンだけを連れ戻してから彼らを追撃し、残りの全員を殺してしまうおつもりでした。違いますか？驚くほどのことはありません。

　ところが、どうしましょう。今入ってきた知らせによ

ると、ベニヤミンだけでなく、他の兄たちも一緒について来ているそうではありませんか。もう機会はありません。あなたの愛するベニヤミンの前で彼らの首を取らない限り、彼らの命を奪う方法がなくなったわけですね。

　どうなされるおつもりですか。おや。もう、使者が到着したようですね。最後にひとつ。どうか、どうか、あなたの心の中の知恵の泉が乾かぬことをお祈り申し上げます。

第五章　幕。

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先 : 群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

第六章　従順

– ヨセフの従順

登場人物:

ツァフェナテ・パネアハ宰相(ヨセフ)

場所:

ツァフェナテ・パネアハ宰相の執務室

ああ、神よ！

アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神よ！

（大声で笑う）

本当に情けない。実に情けないではありませんか。

神よ、ご覧になりましたか。そうです。彼らは間違いなく私と血を分けた兄弟たちです。しかし、彼らをご覧になりましたか。あの悪賢い弁舌をお聞きになりましたが。

覚えておいででしょう。私が兄弟に関して尋ねたところ、彼らは何と答えましたか。末の者は父とおり、もう一人はいなくなったのだそうです。いなくなった？いなくなったとは何とも白々しい。神は、あれほど汚れた言葉を口にする彼らを放っておかれるのですか。彼らは私を捨てたのです。彼らの汚れた手で

私を穴の中に落とし、奴隷として売り飛ばしてしまったのです。それを…、それを…。いなくなった？何という厚かましさでしょう。言葉も出ません。私が自分の足で出ていったとでも言うのでしょうか。

　おお神よ、主なる神よ！あなたは何故、彼らを生かして置かれたのですか。何故、彼らの命を取られなかったのですか。アブラハムを呼ばれた神よ、イサクに恵みを与えられた神よ、ヤコブを愛された神よ、そして、このヨセフと共におられた神よ、何故、あの者たちまでも慈悲を与えられるのですか。あの者たちが果たして神が自ら祝福されたアブラハムの子孫たちでしょうか。とんでもありません。あのみすぼらしい姿を見てください。荒野をさまよい食い物をあさる浮浪者ではありませんか。

実に見苦しい姿です。神の祝福をドブの中に投げ捨てたあの者たちをいつまで放っておかれるおつもりですか。彼らの罪をお忘れですか。私の悔しさをなんとも思われないのですか。正しくさばかれる神よ、私の叫びが聞こえないのですか。私の苦しみが見えないのですか。今まで私にこれほどの苦難を、これほどの試練をお与えになったのですから、今度は私の祈りをお聞きください。私の望みはただ一つ。ベニヤミンです。ベニヤミンであります。他には何も要りません。何も望みません。

　ああ、彼らは何とも卑しいのでしょう。おそらく今この瞬間も彼らは罪のなすりあいをしていることでしょう。自分自身の醜さも知らず、自分らが犯した恐ろしい罪をも省みず、詭弁や屁理屈を並べ、邪悪なる

計画だけを楽しんでいる者たちです。彼らの罪がソドムとゴモラの民が犯した罪より軽いと言えるでしょうか。

おお、神よ。ソドムとゴモラを滅ぼした硫黄の火がなぜ彼らの頭の上に落ちなかったのでしょうか。

今日彼らを見ると、確かに人間は変わらないようです。

ルベンをご覧になりましたか。父の寝床を汚した彼はまだ兄弟たちから後ろ指をさされているようですね。気の毒な人間です。ただ、あの時、彼らが私を手にかけようとしたとき、私の命を守ってくれたことは覚えております。

シメオンとレビはどうでしょう。彼らからは殺気がにじみ出ています。残虐な殺人を犯した彼らの手には、

いくら洗ってもぬぐい切れないほどの血で染まっています。その血が叫んでいます。シェケム人たちの恨みの血、恨みの叫びです。憎しみの叫び声です。悔しさを訴える血の叫びです。嘆きです。おお、彼らの目を見ましたか。あの目つきは人を生かす目ではなく、殺す目です。彼らの目と耳はふさがれ、彼らは頭の先からつま先までの全てが罪に染まっております。

　ベニヤミンさえいなければ、あそこにベニヤミンさえいなければ、ひと思いに！ああ、神よ！

　彼らがもしも悔い改めたのであれば、私は許したはずです。彼らが過ちを悔いたのなら、私はその場で彼らを抱きしめたかも知れません。しかし、彼らは悔い改めることも、許しを求めることもしませんでした。

神よ！彼らが自ら犯したことについて少しでも罪悪感を感じたならば、少しでも私に申し訳ない気持ちが残っていたのなら、私を探さなかったでしょうか。彼らは私をミディアン商人に売り飛ばしました。彼らはおそらく、その商人がここエジプトに向かっているということを知っていたはずです。私に少しでも申し訳ない気持ちがあるなら、私が生きているのか死んだのかぐらいは知りたいと思わないでしょうか？自分の目の前にいる者は、この国を治めている宰相です。あれほど私が叱りつけたのであれば、過去に犯した過ちを悔い改めて、私に過去の弟を探してくれということもできたはずではありませんか。この国は隅から隅まで知り尽くしております。私は陛下の名によっていかなることもできる力を与えられております。こ

のエジプトの中で誰かを探し出すことなど、赤子の手をひねるようなものです。しかし、彼らは言わずじまいでした。このヨセフについては最後まで口を閉ざしていたのです。

　ああ、何故、皆このように口を閉ざしているのしょう。その中でも、神よ、私はいつもあなたに対してもどかしさを感じております。わかっておられますか。

　神は曽祖父アブラハムに絶えず言われました。

　アブラハムを呼び出され、天の星々のように子孫をお与えになると言われた神。

　あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろうと言われた神

　東西南北を見渡す地すべてをお与えになると言われた神。

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

罪に溺れたソドムとゴモラを滅ぼすご計画もアブラハムに隠さず言われた神。

イサクにあるべき土地を言われた神。

イサクと共におられると言われた神。

イサクを祝福してくださった神。

アブラハムに誓った祝福を与えると約束された神。

どこへ行ってもヤコブと共におられると言われた神。

ヤコブを守ると言われた神

ヤコブを導くと言われた神。

ヤコブを捨てないと約束された神よ！

なのに、なぜこのヨセフには沈黙をされるのですか！

兄たちが私を憎むときにも、神は沈黙しました。

兄たちが私のあや織りの長服をはぎ取るときにも、神は沈黙しました。

兄たちが私を穴の中に投げ入れたときにも、神は沈黙しました。

銀二十でエジプトに売られて行くときにも、神は沈黙しました。

ポティファル将軍宅で奴隷生活を強いられていたときにも、神は沈黙しました。

彼の妻が私を誘惑するときにも、神は沈黙しました。

夫人を振り切って出てくるときにも、神は沈黙しました。

私に濡れ衣を着せられたときにも、神は沈黙しました。

その結果、牢にの閉じ込められたときにも、神は沈黙しました。

神は何故、このヨセフには黙っておいでなのでしょうか。アブラハム、イサク、ヤコブにはあれほど言われた神なのに、何故、聖なる神のロヨセフの耳から遠ざけるのでしょうか。主よおっしゃって下さい。私が聞きましょう。

(笑い出す。静かな笑い声からだんだんと大きくなる)

フフフ…フフフ…

ハハハ…ハハハ…

わかっております。わかっておりますとも。

このヨセフ、少し戯れてみただけのことでございます。

神の弱さは万人の力よりも強く、神の沈黙は万人の饒舌よりも多くを語ります。

神の沈黙は沈黙でなく、沈黙こそが天を揺るがし地を震わすほどの、神のみことばだということを存じております。

今の私自身が何よりの証拠です。羊飼いの幼い息子を高く上げてエジプトの宰相にまでして下さいました。共におられる神を信じられないはずがないではありませんか。

試練は忍耐を、精錬は謙遜を、沈黙は従順を教えてくださった神に感謝をささげます。

アセナテに言われるまでもありません。沈黙は私がしたのかも知れませんね。

それでは、私も神の御前でもう口をつぐむのはよ

しにします。

　そうです。アセナテの言う通りです。

　私はあの者たちを許しませんでした。許す理由も根拠もありません。

　私はただベニヤミンだけを取り戻せればいいと思いました。他の者たちなど…。

　だが、不思議ですね。神はなぜ阻むのですか。私が間違っているとでも仰りたいのでしょうか。あのような罪深き者どもの掃きだめからベニヤミンを救い出そうという私の試みは悪でしょうか。

　神よ、何を迷っておられます。あなたの約束、アブラハムとの約束はこのヨセフを通して成し遂げればよいではありませんか。あなたが授けて下さった息子マナセとエフライムがいるではありませんか。さ

あ、ここから天の星々であろうが海辺の砂であろうが、この豊かなエジプトで子孫を増やしていけばいいではありませんか。この豊かなエジプトで…。この豊かな、エジプトで…。

　この豊かな？

　エジプトで？

　神よ、あなたはもしや…。あなたはもしや…！

　なるほど、なるほど…。そういうことでしたか。

　あなたは初めからこの豊かなエジプトを用意されていたのですね。

　何というお方だ。

　カナンの地ではなくエジプトでしたか。

　あなたはアブラムにこう言われたそうではありませんか。

「あなたは、このことをよく知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる。しかし、彼らが奴隷として仕えるその国を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る。」

そうでしたか。そうでしたか。

謎が解けました。

「自分たちのものでない地」とは、ここエジプトでしたか。全てが渇ききってしまった今、唯一豊かさを保っているこのエジプトにヤコブの子孫を招き入れるというのがあなたのご計画。

四百年、エジプトでしたか。

私はとんだ勘違いをしていたようですね。

あなたは私のためにこのエジプトを備えられたのではなかった。

あなたは私の愛する家族やベニヤミンのためにこのエジプトを備えられたのではなかった。

あなたはあの罪深きヤコブの息子たちのために「私」を備えられたのだ。

（天を仰ぐ）

あなたは、なんてひどい方ですか。

あなたは、なんてむごい方ですか。

（沈黙）

わかりました。あなたの意志がそうであるとおっしゃるのなら、従いましょう。従わなくてはなりますまい。従いましょう。

カナンの地からここエジプトまで売られてくる時に

も共におられた神よ。

　ポティファル将軍の家で奴隷住まいをする際にも共におられた神よ。

　王の監獄でも共におられた神よ。

　三十歳にてエジプト宰相に立ててくださった神よ。

　どうしてあなたの意志に背くことができましょう。

　おお、神よ。

　私の死後、四百年の間ヤコブの子孫が苦難を受けるとき、あなたの仰せから迷い出ないように守って下さい。

　この民をあなたが見捨てないように。

　この民があなたを見捨てないように。

　あなたを忘れないように慈悲をお与え下さい。信仰を加えて下さい

（号泣）

たとえ私が死に果て、この地に埋められようとも、

私のいるべき処は、ここエジプトではありません。

私の骨がいるべき処は、神よ、あなたが約束された地、

アブラハムに約束されたカナンの地でございます。

400年後にこの民が神の導きにより、ここから出てゆくとき、

約束の地カナンに向けて旅立つとき、

私の骨も、この民と共に参りましょう。

私の魂も、彼らと共に参りましょう。

ああ、神よ、

ああ、神よ！

（号泣）

基隣宣教会　洪性弼（ホン・ソンピル）牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com

（天を仰ぐ）

神よ、今になってわかりました。

神よ、今になってあなたの御心がわかりました。

従いましょう。受け入れましょう。感謝をもって従いましょう。

ああ、神よ、あなたはどれほど罪人（つみびと）たちに憐れみ深いのでしょう。

ああ、神よ、あなたはどれほど義人たちに残酷なのでしょう。

（外に向かって）

聞いてください！

私がヨセフです。

兄たちよ、聞いてください！

私がヨセフ。私がヨセフです。

基隣宣教会　洪性弼(ホン・ソンピル)牧師
http://www.kirin.love　kirinmission@gmail.com
宣教支援先：群馬銀行　店番号190　口座番号1992256

あなたがたが、あなたがたがエジプトに売ったあなたがたの弟。

私がそのヨセフです！

(退場)

(音楽)

第六章　幕。

ヨセフの再会　終。